

北久米淨蓮寺遺跡

～3次調査地～

1994

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團

埋蔵文化財センター

キタ ク メ ショウ レン ジ

北久米淨蓮寺遺跡

～3次調査地～



1994

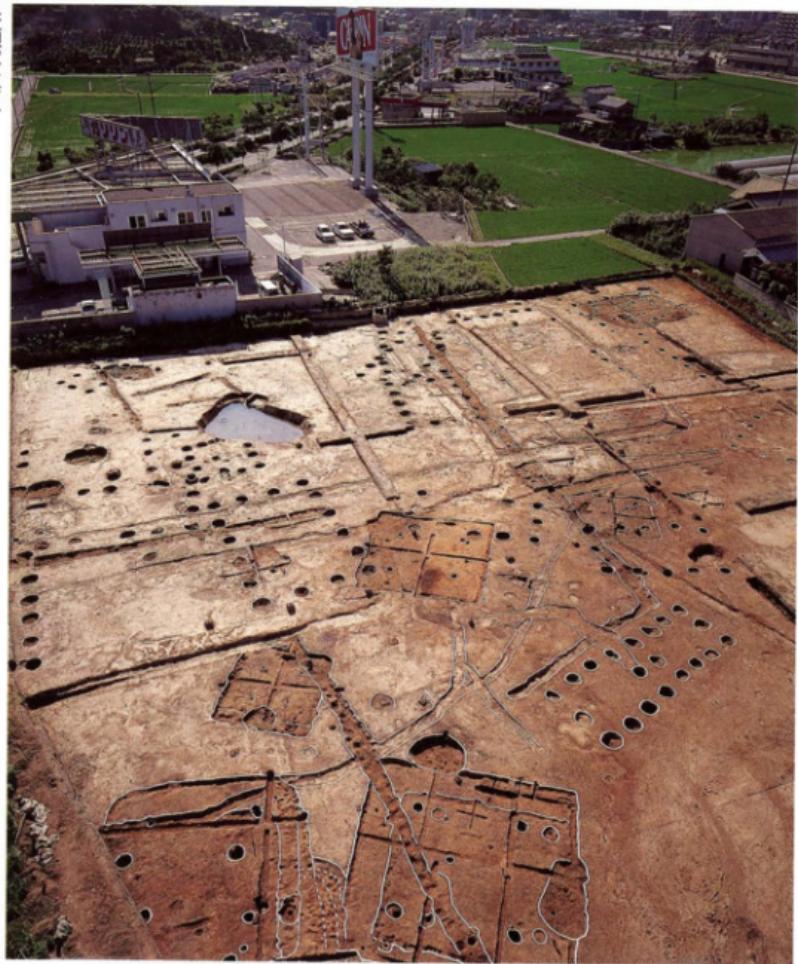
松山市教育委員会

財團法人松山市生涯學習振興財團

埋蔵文化財センター



I. 調査地全景（南より）



1. 調査地主要部（東より）



I. S B - 9 出土遺物



I. S B - 9 出土の甌

序

この報告書は、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが、富屋建設株式会社から委託を受けて発掘調査を実施した「北久米淨蓮寺遺跡3次調査地」の調査成果をまとめたものです。

当遺跡の周辺においては、昭和40年代の国道11号バイパスの建設に伴う発掘調査をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡である福音小学校構内遺跡など、重要遺跡の調査が進められてきました。

今回の調査は、北久米淨蓮寺遺跡としては3カ所目のものとなり、古墳時代中期から飛鳥時代にかけての集落遺跡としての全容が明らかにされつつあります。発掘調査は10カ月余りをかけて行われ、5世紀中葉の初期須恵器を持つ集落や、7世紀前半の掘立柱建物群の変遷が確認されるなど、多くの成果を得ることができました。埋蔵文化財に対し深いご理解をいただいた地権者である富屋建設株式会社、市民の方々のご協力のたまものと心から感謝申し上げます。

本書が埋蔵文化財の保護と活用に役立ち、さらには教育活動、文化振興の一助となれば幸いです。

平成6年6月15日

財団法人 松山市生涯学習振興財團
理事長 田 中 誠 一

例　言

1. 本書は、財團法人松山市生涯学習振興財団が、富屋建設株式会社より委託を受けて、平成4年9月から平成5年7月まで実施した、松山市北久米町671-1外所在遺跡の発掘調査の報告書である。調査対象となった面積は約6526m²であった。整理作業は、平成6年6月15日まで行った。
2. 発掘調査は、富屋建設株式会社（松山市竹原町4丁目8番地40 代表取締役菊池勝義）による宅地開発とともに実行された。
3. 遺物の実測・製図および遺構の製図は、橋本雄一の指導のもと、相原秀仁、石丸由利子、松下郁子、大久保陽子、八木幸徳が行った。また、石器の実測と製図に際しては、重松佳久（松山市教育委員会文化教育課）の協力と助言を得た。
4. 遺構の撮影は、大西朋子、橋本雄一が行い、遺物の撮影は大西が担当した。また、写真図版の編集は大西が担当した。
5. 本書に関する遺物・図面などの記録は、財團法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターにて保管されている。
6. 本書の執筆、編集は橋本雄一が行った。
7. 現地での調査に際しては、富屋建設株式会社および学建設の協力を得た。
8. 調査に際して、株式会社古環境研究所（代表取締役杉山真二）に委託して、自然科学分析を行った。分析結果は、本文の内容に盛り込むとともに、附編に掲載してある。
9. 「第3章　まとめ」の「3　煙道の痕跡が確認されない造り付けカマドについて」の執筆に際しては、愛媛大学埋蔵文化財調査室（下條信行室長）より、「樽味遺跡3次調査」に関する資料および諸データの提供を得た上で、遺構実測図の掲載をお許しいただいた。記して感謝申し上げる。
10. 調査に際しては、以下の方々よりご援助ご教示をいただいた。記して感謝申し上げる。
上原真人　工楽善通　田辯昭三　小笠原好彦　石野博信　前園実知雄　下條信行
松原弘宣　宮本一夫　田崎博之　村上恭通　新納　泉　松井和幸　藤原　学　水島稔夫
吉田　広　尾上元規　谷若倫朗　柴田昌児　多田　仁　杉山真二　愛媛大学埋蔵文化財
調査室（順不同・敬称略）

目 次

第1章 調査の経過と遺跡の概要	1
1 立地と歴史的環境	1
2 調査に至る経緯	4
3 調査組織	4
4 調査の経過とその概要	5
(1)調査の経過	5
(2)調査成果の概要	8
(3)調査の方法と凡例	10
第2章 3次調査の成果	15
1 層位	15
2 旧石器時代の遺物	18
3 古墳時代中期の遺構と遺物	21
4 古墳時代後期の遺構と遺物	51
5 中近世の遺構と遺物	97
6 遺構に伴わない遺物	100
7 倒木痕跡	105
8 出土遺物観察表	106
第3章 まとめ	124
1 倒木痕跡について	124
2 5世紀代の集落変遷について	133
3 煙道の痕跡が確認されない造り付けカマドについて	136
4 5世紀中葉の堅穴住居廃絶時の祭祀について	141
5 5世紀中葉の土師器の高杯について	147
6 古墳時代後期の集落から出土する小型鉄器について	148
7 正方位を指向する区画施設について	149
附編 自然科学分析	151
1 松山市、北久米淨蓮寺遺跡3次調査における植物珪酸体分析 (株)古環境研究所	151
抄録	199

図 目 次

図1 遺跡分布図	2	図33 堀立-2出土遺物	44
図2 調査地位置図(1)	6	図34 堀立-3	45
図3 調査地位置図(2)	7	図35 堀立-4	46
図4 調査地区割図	11	図36 S K-1~3	47
図5 3次調査地遺構全測図	13	図37 S K-1~3出土遺物	48
図6 層位図(1)	16	図38 S K-26	49
図7 層位図(2)	17	図39 S K-28出土遺物	50
図8 断面ポイント位置図	18	図40 S B-11	51
図9 旧石器時代の遺物	19	図41 竪穴住居跡群I	52
図10 別片剥離の工程模式図	20	図42 竪穴住居跡群I出土遺物(1)	53
図11 S B-9全測図・土層断面図	21	図43 竪穴住居跡群I出土遺物(2)	54
図12 S B-9(拡張前)	22	図44 S B-10	55
図13 S B-9(拡張後)	23	図45 S B-14	56
図14 S B-9カマド~台状遺構	25	図46 S B-3	57
図15 S B-9カマド断面図	27	図47 堀立-20出土遺物	58
図16 S B-9出土遺物(1)	28	図48 堀立-20	59
図17 S B-9出土遺物(2)	29	図49 堀立-18	60
図18 S B-9出土遺物(3)	31	図50 S B-1	61
図19 S K-6出土遺物	32	図51 竪穴住居跡群II	62
図20 S B-6	33	図52 S B-2	63
図21 S B-6カマド	34	図53 S B-2カマド	64
図22 S B-6出土遺物	34	図54 堀立-22	65
図23 S B-7	35	図55 S B-4	66
図24 S B-7カマド	36	図56 堀立-14・S A-3	67
図25 S B-7出土遺物	37	図57 竪穴住居跡群II出土遺物	69
図26 S B-5	39	図58 堀立-10・S K-17	70
図27 S B-5カマド	40	図59 堀立-10出土遺物	71
図28 S K-27出土遺物	40	図60 堀立-12	71
図29 堀立-8	41	図61 堀立-12出土遺物	72
図30 堀立-9	42	図62 堀立-11	73
図31 堀立-1	43	図63 S A-2	74
図32 堀立-2	44	図64 S A-2出土遺物	74

図65	S A - 2 ~ S D - 32出土遺物	74	図99	S D - 11出土遺物	95
図66	掘立 - 5	75	図100	S D - 26出土遺物	95
図67	掘立 - 5 出土遺物	76	図101	S D - 22出土遺物	96
図68	掘立 - 17・S K - 15	76	図102	S D - 12出土遺物	96
図69	掘立 - 19	77	図103	S D - 2 出土遺物	97
図70	掘立 - 23	78	図104	S D - 8 出土遺物	98
図71	掘立 - 13	78	図105	S A - 1	98
図72	掘立 - 15	79	図106	S K - 24出土遺物	99
図73	掘立 - 15出土遺物	79	図107	S K - 24・S K - 23	99
図74	掘立 - 16・S K - 20	80	図108	4区・7区・8区出土遺物	100
図75	S D - 10出土遺物	82	図109	11区出土遺物	100
図76	S D - 21出土遺物	83	図110	13区出土遺物	101
図77	S D - 24出土遺物	84	図111	14区出土遺物	101
図78	掘立 - 6	85	図112	18区・24区・19区出土遺物	101
図79	掘立 - 7	85	図113	15区出土遺物	102
図80	掘立 - 21	86	図114	16区出土遺物	102
図81	掘立 - 24	87	図115	17区出土遺物	102
図82	S K - 4 出土遺物	87	図116	22区・12区・27区出土遺物	103
図83	S K - 5 出土遺物	88	図117	20区出土遺物	103
図84	S K - 7 出土遺物	88	図118	25区出土遺物	104
図85	S K - 8・S K - 9	89	図119	21区・26区出土遺物	104
図86	S K - 8 出土遺物	90	図120	出土地点不明の遺物	104
図87	S K - 9 出土遺物	90	図121	倒木 - 1	125
図88	S K - 10	90	図122	形成過程模式図	126
図89	S K - 10出土遺物	91	図123	植物珪酸体分析結果	128
図90	S K - 11出土遺物	91	図124	倒木 - 3	129
図91	S K - 21・S K - 27	91	図125	倒木 - 8	130
図92	S K - 22	92	図126	久米窪田V遺跡の倒木痕跡	131
図93	S K - 22出土遺物	92	図127	5世紀代の集落の変遷(1)	134
図94	S K - 17出土遺物	92	図128	5世紀代の集落の変遷(2)	135
図95	S K - 14出土遺物	93	図129	樽味遺跡 3次: SC - 04	138
図96	S K - 20出土遺物	93	図130	樽味遺跡 3次: SC - 04のカマド	139
図97	S K - 19	93	図131	S B - 9廃絶時の共伴遺物	142
図98	S D断面図	94			

図132 江町遺跡2次調査地SB-1出土遺物	143
図133 北久米淨蓮寺遺跡全測図	146

表 目 次

表1 石器観察表	106
表2 石製品観察表	106
表3 出土遺物観察表 土製品	107

写真図版目次

図版1 1. SB-9検出状況 (北東より)	図版6 1. SB-9完掘状況 (南東より)
2. SB-9遺物出土状況 (南東より)	2. SB-7完掘状況 (北東より)
図版2 1. 高杯・金床石出土状況 (東より)	図版7 1. SB-7 遺物出土状況(北より)
2. 須恵器高杯出土状況 (北東より)	2. SB-7カマド (南東より)
図版3 1. SB-9 カマド～台状遺構 (北より)	図版8 1. SB-6付近 検出状況(西より)
2. SB-9カマド検出状況 (南東より)	2. SD-2・SD-21・ SD-24検出状況 (北西より)
図版4 1. SB-9カマド (北より)	図版9 1. SD-9・SD-10 検出状況(北より)
2. SB-9カマド断面 (南東より)	2. 掘立-12・掘立-21 検出状況(北東より)
図版5 1. SB-9 拡張前のカマド痕跡 (北東より)	図版10 1. 掘立-5付近検出状況 (東より)
2. SB-9土師器高杯 出土状況(南より)	2. 掘立-6・掘立-7 検出状況(東より)

- | | | | |
|------|-----------------------------------|------|-------------------------------|
| 図版11 | 1. 挖立-6 完掘状況
(北東より) | 図版20 | 1. 調査地北西部完掘状況
(南西より) |
| | 2. 挖立-7 完掘状況
(北東より) | | 2. S B-1 付近完掘状況
(西より) |
| 図版12 | 1. S D-10 遺物出土状況
(東より) | 図版21 | 1. 調査地北東部完掘状況
(北より) |
| | 2. S K-8・S K-9
完掘状況 (南より) | | 2. 調査地東部完掘状況
(東より) |
| 図版13 | 1. 挖立-20 遺物出土状況
(南より) | 図版22 | 1. 挖立-1 検出状況
(南東より) |
| | 2. S B-2 カマド
(南より) | | 2. 挖立-1 完掘状況
(北より) |
| 図版14 | 1. S K-24 遺物出土状況
(南より) | 図版23 | 1. S K-1~3
完掘状況 (南西より) |
| | 2. S K-24 人骨の痕跡
検出状況 (南より) | | 2. 現地説明会状況
S B-9 付近 (北西より) |
| 図版15 | 1. 倒木痕跡半截状況
2区 (西より) | 図版24 | 1. 出土遺物(1) |
| | 2. 倒木痕跡断面
21区攪乱北壁 (南東より) | 図版25 | 1. 出土遺物(2) |
| 図版16 | 1. 倒木-1 土層堆積状況①
掘立-2 付近 (北東より) | 図版26 | 1. 出土遺物(3) |
| | 2. 倒木-1 土層堆積状況②
掘立-2 付近 (南より) | 図版27 | 1. 出土遺物(4) |
| 図版17 | 1. 倒木-3 二次堆積土層
完掘状況 (北西より) | 図版28 | 1. 出土遺物(5) |
| | 2. 調査地全景① (北東より) | 図版29 | 1. 出土遺物(6) |
| 図版18 | 1. 調査地全景② (西より) | 図版30 | 1. 出土遺物(7) |
| | 2. 調査地東部完掘状況
(南西より) | 図版31 | 1. 出土遺物(8) |
| 図版19 | 1. S B-9 付近完掘状況
(南東より) | 図版32 | 1. 出土遺物(9) |
| | 2. 調査地南西部完掘状況
(西より) | 図版33 | 1. 出土遺物(10) |
| | | 図版34 | 1. 出土遺物(11) |
| | | 図版35 | 1. 出土遺物(12) |
| | | 図版36 | 1. 出土遺物(13) |
| | | 図版37 | 1. 出土遺物(14) |

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1 立地と歴史的環境

北久米淨蓮寺遺跡は、松山平野の中央北よりに位置する、俗に「伊予三山」と呼ばれている独立丘陵群の東方、およそ350mの地点に立地している（図1・図2）。遺跡の北東方向には、高龜山系の山々が隣接し、これから、星岡をはじめとする丘陵群に至る微高地が形成されている。この微高地の南縁には、平野の北東部に源を発した小野川に起因する低地が広がっており、当遺跡はこの微高地の南西端に位置している。当該地は、現在の行政区割りでは北久米町にあたるが、かつて小字名が淨蓮寺と呼ばれたことから、これをとて遺跡名称としている。過去に近接地において、2次にわたって発掘調査がおこなわれており、今回は3次調査にあたる（図133）。当該微高地の周辺に展開する遺跡の変遷は、以下述べるとおりである。

旧石器時代の松山平野の様相は、これまでのところ、遺跡レベルでは把握されていない。ナイフ形石器などの遺物が採集されているものの、遺構と絡むものではなく、当時の社会環境の復元がなされるには至っていない。しかし、近年、当遺跡の北方約2km付近に位置する樽味、東本地区において、A T火山灰が層位的に確認されつつあり、将来、当該期の遺跡が確認される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は、後期から晩期に限られたあり方を示す。久米窪田森元遺跡^①の土壌から一括で出土した縄文後期中葉の土器群の存在は重要なものである。また、当遺跡南方の南久米片廻り遺跡^②2次調査地から出土した土器群は、縄文晩期後葉ないし弥生早期段階に位置づけられるもので、平野北部の大測遺跡^③出土資料に後続する段階のものと考えられている。この遺跡は、小野川の北に位置する来住台地と、その南辺を西流する小野川の接点に位置しており、微高地からその南方の低地にかけて、当該期の遺跡が分布しているものと推測される。

西日本の各地において、縄文時代晩期以降、水田の造営が確認されつつあるが、松山においては、これまでのところ関係の遺跡は確認されていない。このような状況は、平野中央部の低地における調査事例の欠如に由来する可能性が高く、今後の進展によっては重信川右岸地域ならびに小野川流域において、水田跡が検出されることが期待される。一方、当遺跡が立地する微高地や、東の来住台地上において、集落遺跡として弥生時代の人々の活動の痕跡を認めることができる。特に、北西約350m地点に位置する「福音小学校構内遺跡」においては、大規模な集落が確認されている。また、古代の官衙遺跡群の存在が知られる来住台地においても、当該期の集落の存在を想定し得るだけの高い密度で、遺構、遺物が出土している。

古墳時代に至ると、前方後円墳をはじめとする古墳が各地で造営されて行くが、当遺跡の周辺において認められるものは、後期古墳のみである。首長クラスの前方後円墳が調査地の周辺に存在するが、正確な時期決定がなされておらず、首長系列の復元を行うことは困難



図1 遺跡分布図

- ① 北久米淨蓮寺遺跡 ② 東本遺跡 ③ 久米御田森元遺跡 ④ 南久米片廻り遺跡 2 大調查地
⑤ 福音小学校構内遺跡 ⑥ 綾石山古墳 ⑦ 三島神社古墳 ⑧ 二ツ塚古墳
⑨ 東山古墳群 ⑩ 星岡古墳群 ⑪ 福音寺・筋違遺跡 ⑫ 福音寺・竹ノ下遺跡
⑬ 久米高畠遺跡 ⑭ 来住廢寺 ⑮ 鷹子遺跡

を伴う。断片的な検討から、経石山古墳^④から三鳥神社古墳^⑤（6世紀前半）、二ツ塚古墳^⑥（6世紀）へいたる流れが考えられている。二ツ塚古墳は、当遺跡の南東に隣接する位置にある前方後円墳であるが、後円部の残丘が残存するのみである。この古墳と当遺跡の集落は、時期的に並存していた可能性も考えられる。

遺跡の西方に位置する星岡、東山をはじめとする独立丘陵には、円墳を中心とする小規模な古墳が多数分布している。これらの古墳の主体部は、石室の入り口が階段状に下がる「堅穴系横口」状の形態をとるものが多い。また、葬道をほとんど持たない点も特徴的であるが、このような形態の石室は松山平野では一般的に認められるものである。6世紀から7世紀中葉にいたる時期の、近隣の首長クラスの人物の墓であろうと考えられる。至近距離に位置する北久米淨蓮寺遺跡の住人たちと関わりがある人物の墓であるかもしれない。

古墳時代の集落は、「福音小学校構内遺跡」から当遺跡に至る地域全体に広く認められる。両遺跡の南に隣接する国道11号線の建設に先立って行われた調査においては、福音寺遺跡筋^⑦地区、星岡遺跡北下（きたさがり）地区をはじめとして、古墳時代の遺構遺物が多く出土している。特に北下地区においては、今次の調査で出土した初期須恵器とほぼ同段階の把手付椀が出土しており注目される。また、福音寺遺跡群においては、T K208併行期の初期須恵器を出土した竹ノ下道路が知られている。さらに、淨蓮寺遺跡の1次及び2次調査においては、当該期のカマド付きの住居が確認されているが、この点は初期須恵器のありかたと絡めて、今回の調査の重要な視点のひとつにあげられた。

歴史時代に至ると、当遺跡の東から南東方向に展開する来住台地上の「官衙遺跡群」の存在が目を引く。久米高畠遺跡においては、「評術」推定遺跡の隣接地において、「久米評」線刻須恵器が出土していることから、7世紀中葉にまで遡る可能性が高い「久米評術」の存在が確実視されている。さらに同一地域には、一方町規模の区画溝で開われた「回廊状遺構」が存在するが、この遺構は7世紀後半の齊明天皇の「石湯行宮」に比定する考え方も提示されている。なお回廊状遺構は、白鳳期の寺院である「来住庵寺」と重複関係にあり、この地が古代久米評、久米郡の中心地であったことがうかがわれる。これまでの調査の結果、この他にも、区画地が最低2ヵ所確認されており、7世紀代の久米評（郡）の重要施設が集中して立地していた可能性も考えられる。北久米淨蓮寺遺跡は来住の中軸部から北西に離れた位置にあるものの、住居の形態、その配置関係などの点において、中心地帯の状況と連動した変遷過程を示すことが想定できる情報が、今回の調査によって得られた。今後、広域に及ぶ検討作業を行っていく必要がある。

中世に属する顕著な遺構としては、来住庵寺21次調査地において確認された大規模な総柱の掘立柱建物群があげられる。中世の河野氏に關係する施設であることも考えられているが詳細は不明である。この他、鷹子（たかのこ）遺跡において、13~14世紀に属する地境の溝などが確認されている。当遺跡においても、ほぼ同段階に属する区画溝が検出されており、

今後の資料の増加が待たれる。

近世に属する遺構としては、来住庵寺15次調査^註において確認された土壙墓があげられる。これらの墓には、17世紀前半の肥前系陶器の削り出し高台を伴う皿が副葬されていた。同様のものは、今次の調査においても出土している。副葬品が土師器のみで構成されるものも存在するが、今後、この差異が何に由来するものなのか検討していく必要がある。

近代、特に昭和40年代以降に至ると、当遺跡の至近距離に国道11号線のバイパスが建設され、周辺に次々と店舗、住宅の建設が進んで行くが、この傾向は今現在も続いている。その結果、水田を中心としたかつての景観が急速に失われることとなった。

2 調査に至る経緯

1991年5月、富屋建設株式会社（松山市竹原4丁目8番地40）より、宅地開発にともなう松山市北久米町671—1外8筆における埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課に提出された。当該地は、松山市が指定する「124 北久米遺物包含地」内に位置しており、北久米淨蓮寺遺跡として過去に2次にわたって調査が行われているほか、隣接地においても国道11号線バイパス建設に伴う発掘調査など、多くの調査が行われている。そこで、同年6月21日から7月1日まで試掘調査を行った結果、初期須恵器を伴う堅穴住居など多数の重要遺構を検出した。その結果、当該地における本格調査が必要との結論に達し、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターと富屋建設の二者は、発掘調査にかかる協議を開始した。その後、富屋建設の協力のもと、1992年9月16日に本格調査に着手し、翌1993年7月17日まで発掘調査を行った。

3 調査組織

〔平成4年度・平成5年度調査組織〕

調査主体	財団法人松山市生涯学習振興財團	理 事 長	田中誠一
		事務局長	渡辺和彦
		事務次長	鶴井茂忠 （平成4年度）
			一色正士 （平成5年度）
埋蔵文化財センター	所 長	和田祐三郎 （平成4年度）	
		河口雄三 （平成5年度）	
	次 長	田所延行	
調査係長	西尾幸則 （平成4年度）		
	田城武志 （平成5年度）		

調査担当

調査主任 田城武志（平成4年度）
調査主任 栗田正芳（文化教育課職員）
調査員 橋本雄一
調査員補 相原秀仁

〔平成6年度・7年度刊行組織〕

調査主体

財團法人松山市生涯学習振興財団 理事長 田中誠一
事務局長 一色正士
埋蔵文化財センター 所長 河口雄三
次長 田所延行
調査係長 田城武志
調査主任 栗田正芳（文化教育課職員）
調査担当

調査員 橋本雄一
調査員補 相原秀仁

4 調査の経過とその概要

(1) 調査の経過

9月中旬から、現場事務所などの調査にかかる諸準備を開始し、18日より重機を導入して表土の掘削に着手した。排土を現場内で処置する必要から、掘削は調査の進行に合わせて数次に分けて行うこととし、同月24日から本格的な発掘調査に着手した。調査区南西部の一部を除いて、後世の削平のために包含層が存在しないことから、地山面に振り込まれた遺構の検出をおこなうことが当面の作業であった。土置き場の確保のため、最初に掘削をおこなった東地区の調査を1月末までに終了し、残りの区域の掘削と精査によって生じた排土で、東地区的遺構が検出されなかった1～3区を埋め戻す手順を採用した。

調査区の全区域において遺構の検出作業を終了したのは4月の上旬であった。その後およそ3カ月間で主要部分の調査を完了したが、6～7月は断続的に降り続く近年希な大雨のため、写真や図面の内容が不十分なものとなってしまった。最終的に、7月3日に現地説明会を行った後、航空写真の撮影など補足的な調査を経て、同月16日に現場における作業を終了し、引き続き整理作業に移った。整理作業は翌1994年6月15日まで行った。



図2 調査地位置図(1)

S = 1/25,000



図3 調査地位置図(2)

(2)調査成果の概要

発掘調査の結果、古墳時代中期から後期にかけての時期の集落の変遷を辿ることができ、道後平野における当該期の好資料を提供することとなった。以下、各段階ごとの概要をまとめておく（図5）。

〔1期：5世紀前半〕SB-9と7を中心として集落を構成している。各竪穴住居には、北西壁のほぼ中央に造り付けのカマドが存在する。屋根は四本柱によって支えられており、壁溝には多数の小ピットが認められる。南の隣接地における1次調査の際に、これらの住居と方向性が一致する竪穴住居2棟が検出されており、この内の1棟を含む最低3棟から成る集落であったことが想定される。

〔2期：5世紀中ごろ〕SB-7と9は増築され、1期とは異なり平面形状はほぼ正方形となる。SB-9は柱を建て直している。カマドは1期同様、北西壁の中程に設けられる。SB-9のカマドの北には、壁に平行に幅約50cm、高さ約10cmの粘土の台状の遺構が確認された。この台状遺構の南端、カマドとの接点には、TK216からON46に併行する時期の埴輪が試掘調査の際に元位置から出土している。また、カマドの中央には土師器の高杯が伏せた状態で置かれていた他、柱の抜き取り跡からも完形に近い土師器の高杯が1点出土している。

〔3期：5世紀中ごろ〕SB-9はSB-6に、SB-7はSB-5にそれぞれ建て替えられる。住居の平面形状とカマドの位置は前段階と同様である。SB-6から初期須恵器の甕の口縁部片が1点出土している。

〔4期：5世紀第3四半期〕SB-6は掘立-8に、SB-5は掘立-9に建て替えられる。これらの掘立柱建物は居住施設として使用されたものである。

〔5期：5世紀後葉〕1期の集落の背後に位置する掘立-1～4と、調査区南東部の竪穴住居跡群で最も古い時期のSB-11（5世紀末）などから構成される。SB-11については3期までとは異なり、北壁の中央にカマドの残骸が確認されている。掘立-1～4は、その方向性などから、1期～4期の集落に連続する時期に属するものと考えられる。SK-1～3などもこの段階に属する。

〔6期：6世紀～7世紀初頭〕5期のSB-11に後続する、SB-10など竪穴住居が重複している箇所の他、掘立-15、18などから構成される。SB-10には、北壁中央にカマドが造り付けられている。小型鉄斧1点、鐵鎌1点の他、鐵滓も数点出土しており、小鍛冶が行われた可能性がある。掘立-20からTK209の蓋杯が出土しており、掘立の出現は概ね6世紀末以降と考えられる。これらの建物の軸線の方向は、真北からおよそ10～15度東に振っている。

〔7期：7世紀第1四半期〕建物の軸線が磁北よりもやや西に振った方向に設定された段階である。掘立-14、SB-1が属する北西のグループと、掘立-10を中心とする南のグループに区分できる。SB-1の北壁中央には、灰を伴うカマドが存在する。北西のグループは、竪穴住居が掘立に建て替わったものと考えられる。なお、このグループの継続期間の始め

は、6期との重複も想定される。一方、南のグループは、桁行きが5間の掘立-10、6間である可能性が高い掘立-11、脇殿的建物である掘立-12から構成される。6期の掘立-18がこの段階に至って掘立-10と12に置き変わったものと考えられる。S A-2についてもこの段階に属する可能性が高い。なお、掘立-10から小型鉄斧が一点出土している。

〔8期：7世紀第2四半期〕建物の軸線が磁北から真北付近に集まつてくる段階で、調査区の北西部に位置する掘立-5、17、19、23から成る。柱穴の形状はおむね方形に近い。これらの特徴は、この建物群が官衙的な施設との関係から成立している可能性を示唆するものと考えられる。なお、この段階の集落は、区画施設を伴っていないようである。

〔9期：7世紀中ごろ〕建物の方位規制が一時的に崩壊し、各建物の軸線が東に約30~50度ほど振る段階である。掘立-13、15、16によって構成されており、いずれも、梁間が2間であることが特徴的である。柱穴は方形に近いのが多い。建物の面積が前段階と比較して縮小し、しかもその方向性が大きく崩れることは、当該期が古代社会における一大変革期（混乱期）に当たっていることと関係があるのかもしれない。

〔10期：7世紀第3四半期〕建物の軸線が真北を基準とし、区画溝を作つ段階である。この区画の成立時期は、出土遺物から西暦650年前後を上限とする。SD-10と21に囲まれた区画の中に掘立-21と24、SK-8と9が存在している。掘立-21は12を切り、SD-10と21は重複関係のあるすべての掘立（9期以前）を切っている。SD-10の東端は南東方向に屈曲しており、この部分に近接して掘立-6と7が位置している。SDの主軸方向は東に数度振っており、来住、久米地区に存在する他の区画施設を作つ遺構の方向性と共通している。

〔11期：7世紀第4四半期～8世紀代〕10期のSD-21と29に平行なSD-24と、SK-19によって構成されている。遺構の埋土の色調は、10期までの赤黒色からオリーブ黒色に変化し、拳大の角礫が多く混じる。なお、この段階の建物は検出されていない。

〔12期：15世紀初頭を下限〕中世の区画溝であるSD-2（10、11期の溝と平行）と15の他、SD-7、8などで構成される。区画の内側になんらかの施設の存在が想定されるものの、建物等は確認できなかった。畑作地の区画である可能性も考えられる。

〔13期：近世〕SK-23、24が該当する。24においては粘土化した人骨の残骸を確認した他、副葬品として唐津の削出高台付の皿が1点出土しており、17世紀前半のものと考えられる。現在の溝と方向性が一致するSD-1と3についても、この段階に属する可能性が高い。

(3)調査の方法と凡例

a. 座標軸の設定と調査区の区割り(図4)

当初、任意で設定した軸を基準として一辺4メートル四方の区割りを行ったが、調査が進むにつれて各建物の輪線の方向を正確につかむ必要性に迫られた。そこで、調査区を国土座標にのせる作業を行ったところ、当初設定した軸は真北からおよそ2度東に振っていることが判明した。よって、本報告における調査区の区割りは、当初の設定どおり任意の輪線を基準とするが、方位は基本的に国土座標に基づく真北を基準としている。

調査区の区割りのラインは、調査区北西方向の任意の原点を基準として、南北方向の軸をアルファベット2文字の組み合わせで、東西方向の軸を数字で表記することとした。たとえば、調査区の中央付近のAMラインと11ラインが交わる点をAM11、この点を北西角とする4メートル四方の区画をAM11グリッドと呼ぶ(図4)。

b. 凡例その他

1. 本報告の内容の一部は、「松山市埋蔵文化財調査年報」VI 1994に掲載されている他、研究会等で報告もおこなっているが、その内容に相違点が有る場合、本報告をもって訂正したものとする。
2. 遺構は、以下のとおり略号で記した。竪穴住居跡：S B、掘立柱建物跡：掘立、棚列：S A、土壙：S K、溝：S D、柱穴：S P。ただし、1次調査と2次調査については、すでに年報等によってその成果の一部が公表されていることから、略号はその際に用いられたものをそのまま採用した。他の調査組織による調査に関しても同様である。
3. 遺物の実測図は、土器については1/4を基本とするが、旧石器は3/4、鉄器は1/2で提示してある。遺構の実測図については、基本的に1/80もしくは1/100、1/40で提示したが、必ずしもこの限りではない。スケールの下にそれぞれ縮分を示した。
4. 本書で示した方位はおおむね真北であり、高度は標高である。
5. 遺物観察表における胎土の表記は、0.5mm未溝を細砂、0.5mm～1mmを中砂、1mm～2mmを粗砂、2mm以上のものを粗礫として示した。
6. 基本土層の番号はローマ数字で、遺構堆積土層については原則としてアラビア数字で表記した(例：1層・③層)。
7. 本報告書中で使用した地形図は以下の通りである。一部、加筆修正を行ったものも含まれている。
松山市都市計画図 1/500、同1/2500
国土地理院発行1/25000地形図「松山南部」
8. 出土遺物については報告書掲載の遺物番号を赤色で注記し、遺構単位に分類したうえで収納している。未掲載分については、黄色の注記番号が遺物台帳の登録番号に対応する。

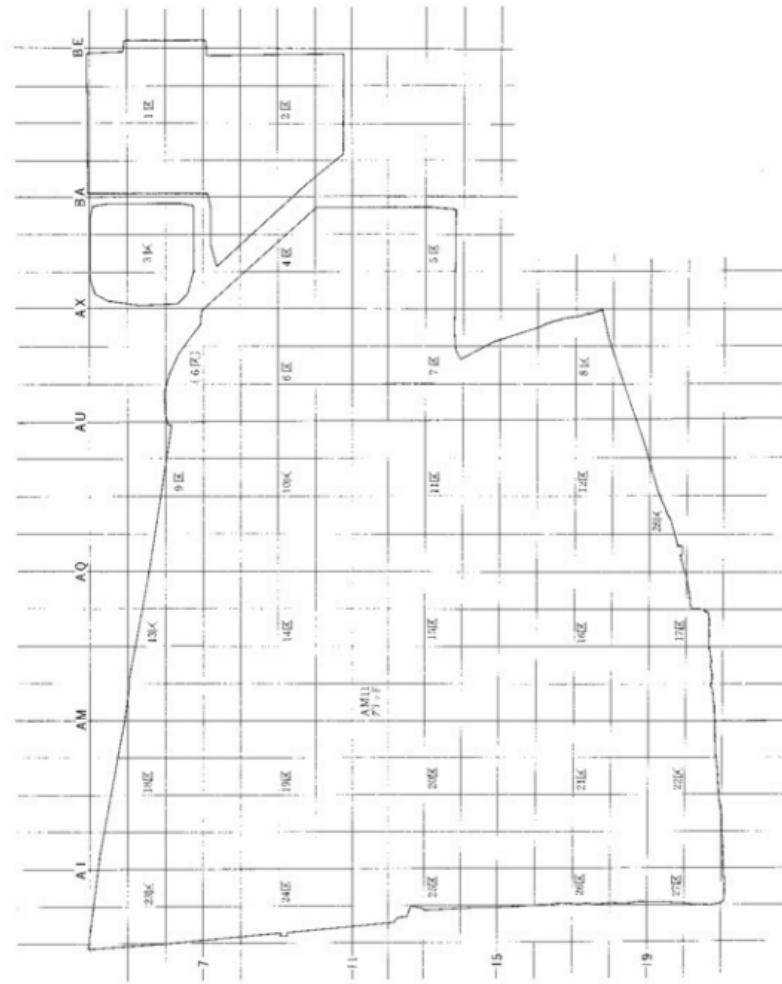


図 4 調査地区割図

註

- 1 重松佳久 1992年「小野川水系における旧石器文化」「米住・久米地区的遺跡」(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 2 梅木謙一編 1992年「第5章 横味四反地遺跡」「桑原地区的遺跡」松山市文化財調査報告書26 (財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 3 松山市教育委員会 1989年「39. 久米庭森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II
- 4 栗田茂敏編 1991年「南久米片廻り遺跡2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』III 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 5 松山市教育委員会 1989年「1. 大洞遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II
- 6 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センターによって1993年12月1日から94年5月20日まで調査された「森松道路」において、古墳時代の小区画水田跡が検出されている。中世よりも古い時期の水田が確認されたのは、愛媛県下では初めてのことである。
- 7 栗田茂敏編 1991年「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II
- 8 梅木謙一編 1992年「第9章 経石山古墳」「桑原地区的遺跡」松山市文化財調査報告書26 (財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 9 岸 郡男・森 光晴・長井数秋 1972年「三嵩神社古墳」松山市教育委員会
- 10 森 光晴 1986年「81. 二ツ塚古墳」「愛媛県史 資料編」考古 愛媛県史編纂委員会
- 11 梅木謙一編 1993年「東山古墳群6次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』V 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 12 松山市教育委員会 1983年「国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書」
- 13 西尾幸則 1986年「87 北久米淨蓮寺遺跡」「愛媛県史 資料編」考古 愛媛県史編纂委員会
- 14 松山市教育委員会 1989年「28. 淨蓮寺2次遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II
- 15 栗田茂敏編 1991年「久米官衙遺跡群」『松山市埋蔵文化財調査年報』III 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 16 栗田茂敏編 1991年「久米高畠遺跡11次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』III 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- 17 松山市教育委員会 1989年「40. 久米高畠遺跡(7次調査)」『松山市埋蔵文化財調査年報』II
- 18 梅木謙一編 1993年「米住庵寺19次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』V 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 19 小笠原好彦編 1979年「米住庵寺」松山市文化財調査報告書12 松山市教育委員会
- 20 梅木謙一編 1993年「米住庵寺21次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』V 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 21 宮本一夫編 1989年「第2章 鷹子遺跡の調査」「鷹子・梅味遺跡の調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告 I 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 22 西尾幸則編 1993年「米住庵寺遺跡第15次調査報告」松山市文化財調査報告書34 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

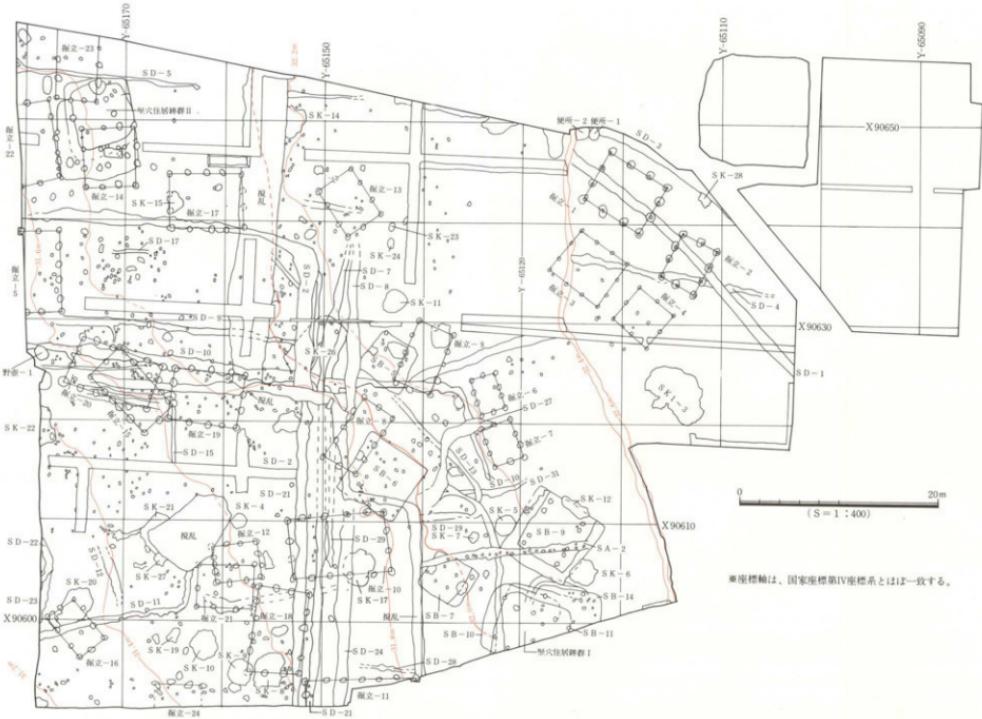


図5 3次調査地遺構全測図

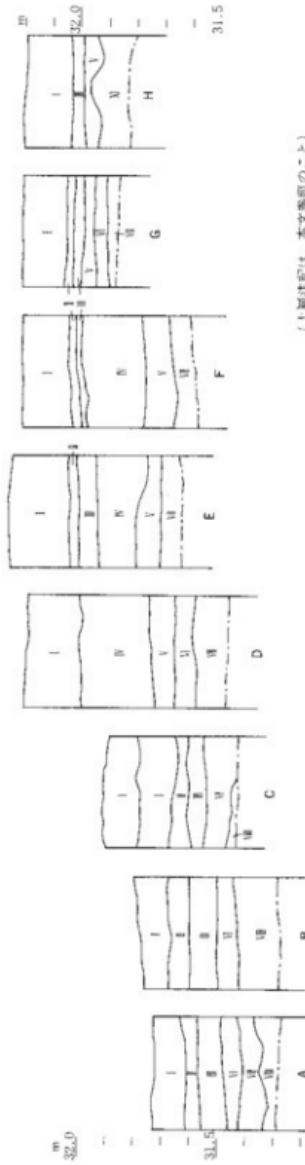
第2章 3次調査の成果

1 層位

- I層 青灰色粘質土 数年前まで耕作が行われていた水田の耕作土層である。部分的に上下2層に分層可能な所がある。
- II層 淡赤褐色土 酸化鉄が沈着して赤身を帯びた層で、I層における耕作によって生じたものと考えられる。おそらく近世から近代にかけての旧耕作上層であろう。
- III層 暗茶褐色混じり暗褐色土 時期の特定はできないが、この層も旧耕作土層であろう。マンガンが多く集積している状況が認められるが、これはII層同様、I層における耕作の影響で沈着したものと考えられる。
- IV層 赤褐色土 水田の床土層で、調査区の中央部と南部および西部の一部に分布している。時期の特定はむずかしいが、近世以降に属するものと考えられる。
- V層 灰褐色土 中世の水田にともなう土層であると考えられる。東部には分布しない。調査区の西部および南部など、東部よりも一段下がった区域にのみ分布している。掘削時に瓦片などの中近世の遺物が少量出土している。
- VI層 灰茶褐色土 V層同様、中世の水田層と考えられる。分布範囲もV層と同じである。
- VII層 茶褐色混じり暗褐色土 これも旧耕作土層であると考えられるが、時期ははっきりしない。
- VIII層 暗灰褐色粘質土 調査区の南西部にしか分布しない。時期ははっきりしないが、古代に遡る可能性がある。調査区西部に多く分布する小ピットの埋土がこの層の土質に類似しているので、関係があるかもしれない。
- IX層 黒褐色土 古墳時代後期の包含層。古墳時代の遺構の埋土でもある。自然科学分析の結果、ネザサ類の集積土であることが判明している。
- X層 茶褐色粘質土 調査区北東部の、レベルが高い区域に存在する地山層である。
- XI層 灰白色ないし黄白色土 東半部では灰白色、西半部では黄白色を呈する。和泉砂岩の風化土であると考えられる。東と西では、明らかに土質に違いが認められるものの、層序的には同義と判断した。
- XII層 赤褐色土 碾層の直上に位置する土層で、東部にのみ分布している。西部では、碾層の上部が赤化している部分がこれに当たるものと考えられる。小礫を多く含み、堅くしまった土層である。
- XIII層 碾層 調査区の全面に分布する。主に砂岩によって構成されており、風化が激しく過半数の礫が割れている。

図 6 層位図(1)

(上層は記入、本文参照のこと)



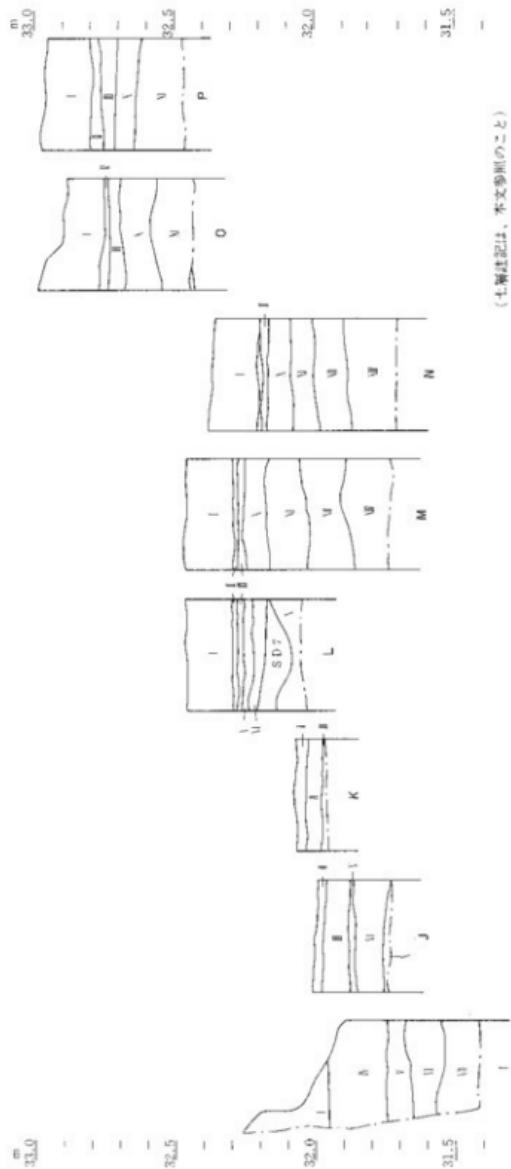


図7 層位図(2)

(上層記号、本文参照のこと)

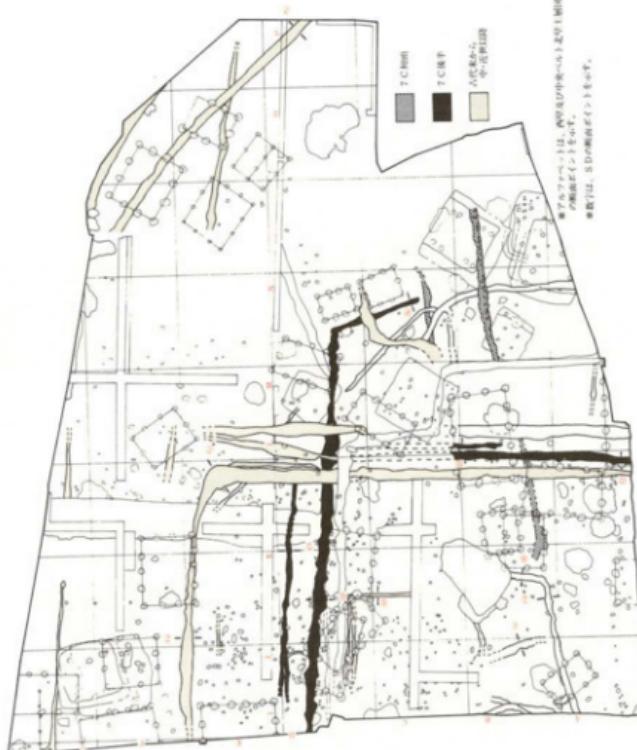


図8 断面ポイント位置図

2 旧石器時代の遺物

赤色頁岩製のナイフ形石器と石核が各1点、頁岩製の剥片が1点出土した(図9)。いずれも、耕作土の直下、地山直上からの出土であって層位的には意味のない状況である。しかしながら、ナイフは11区の北半、石核と剥片はその西隣の15区の北半から出土しており、調査区の中央付近の比較的限られた範囲に集中している。調査の終盤に小規模なトレンチを数ヵ所設定して地山層を掘り下げ、旧石器時代の文化層の検出を試みたが空振りに終わった。

1は赤色頁岩製のナイフ形石器で、交互剥離によって生産された不定形の横長剥片を素材とするもので、国府型と呼ばれるものではない。基部を調整するほか、先端部を加工している。一部、素材面を残している。使用痕、付着物等は特に認められない。2は剥片剥離後の

残核と考えられる小型の石核で、黒色のタール状の付着物が認められる（図版37）。いわゆる交互剥離と呼ばれる剥片剥離技術によって、不定形の横長剥片を生産したものと考えられる。この技法は先に述べたナイフ形石器の生産技術と一致するものであり、これらの石器が一連の技術体系のもとで成立した可能性を示唆している。将来的に当該地付近で、旧石器のユニット調査が実現される可能性が高まってきたと評価できよう。ちなみに、これらの石器は、多田仁氏作成の「剥片剥離の工程模式図」（図10）によると、Icの工程を経て製作されているものである。

頁岩製の剥片である3については、生産技術等の詳細ははっきりしない。大きなバルブが特徴的である。使用痕は認められず、おそらく剥離に失敗した剥片と考えられる。

松山平野において、明らかに旧石器時代と認定できる石器のうち、赤色頁岩製のものは、釜ノ口遺跡出土の舟底形石器について2例目である。この石材は、松山平野では産出せず、四国山地以南の地域にその供給源が想定されている。縄文時代や弥生時代の石錠などでは一般的な石材であるが、多田仁氏によって旧石器時代の松山平野周辺においては、サヌカイトとともに相補的関係にあることが指摘されている。今後注意を払う必要があろう。

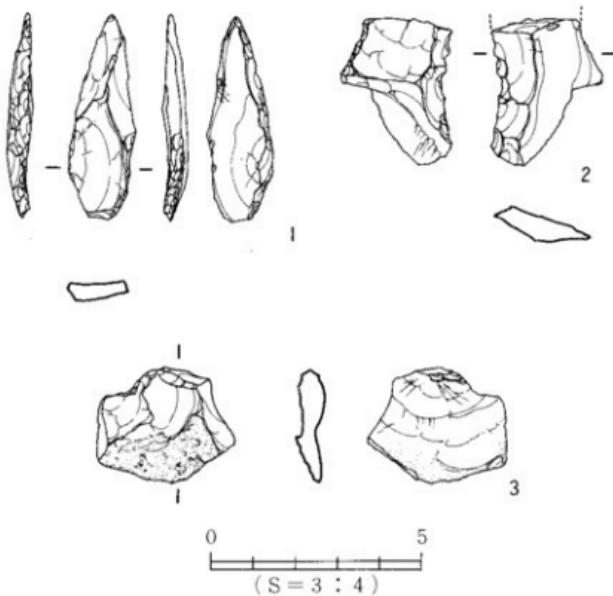
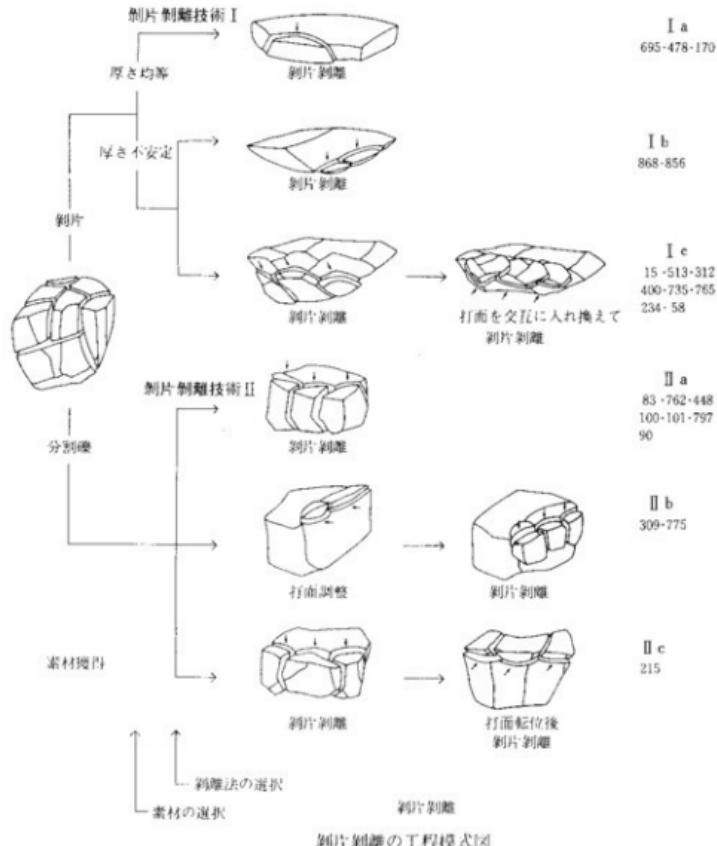


図9 旧石器時代の遺物

- 参考文献：多田 仁 1994年「宝ヶ口遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』VII 丹原町編
財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
- 沖野新一、重松佳久、多田 仁 1994年「愛媛県東峰遺跡の採集遺物」『旧石器考古学』48 旧石器文化総説会



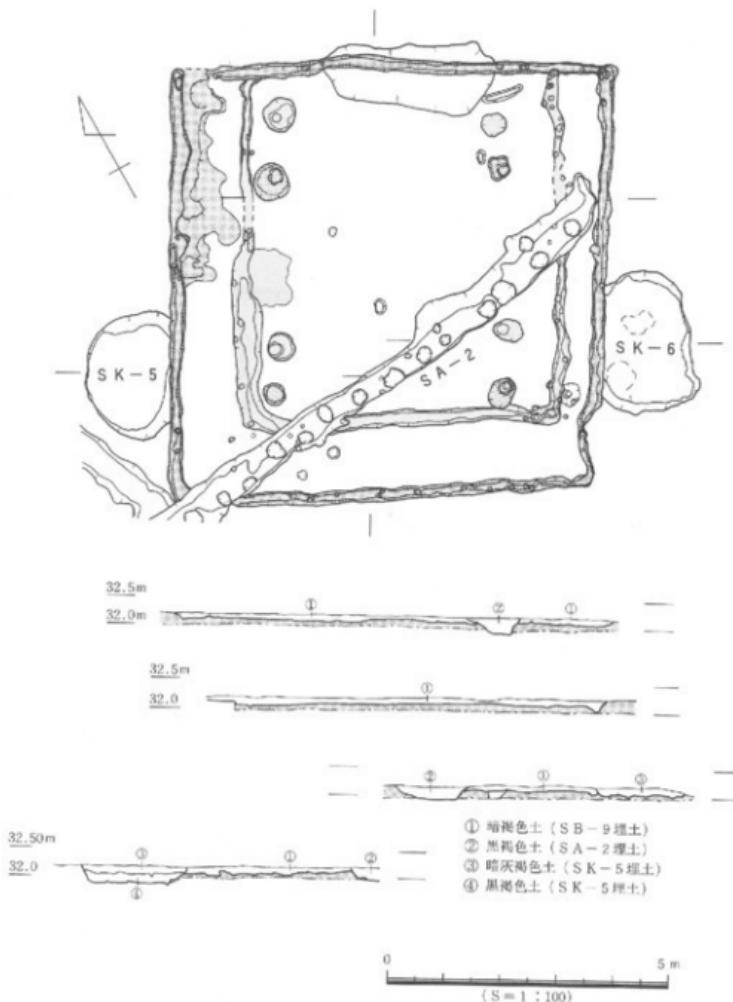
剥片剥離の工程模式図

引用文献：多田仁 1994年「宝ヶ口遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』VII
——丹原町編 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

図10 剥片剥離の工程模式図

3 古墳時代中期の遺構と遺物

当遺跡では、縄文時代、弥生時代と断定できる遺構はまったく検出されていない。すべての遺構は古墳時代中期以降のものである。



図II SB-9全測図・土層断面図

SB-9・拡張以前（図11・12、図版1・6） 拡張前のSB-9は、東西約5.9m、南北約6.5m、38.4m²の規模を測り、四本柱によって屋根を支えている。平面形状が正方形に成らず、長方形を呈する点が特徴的である。柱は壁溝と比較して、やや北西よりに位置している。壁溝は削平されているため遺存状況は悪いが、壁を補強するために打たれた細い杭の跡が確認できる。杭跡の配列に特に規則性は認められないが、北西壁の南部分で、壁溝の中心よりも外側に打ち込まれた状況を確認できる。壁溝の規模は、北東および北西壁の北側では幅約15cm、深さ3～7cm、北西壁のカマドの南側では部分的に幅50cmを測る。これは、カマドと何らかの関係があるかもしれない。北東壁は、拡張後の段階においても同じ壁溝が踏襲され

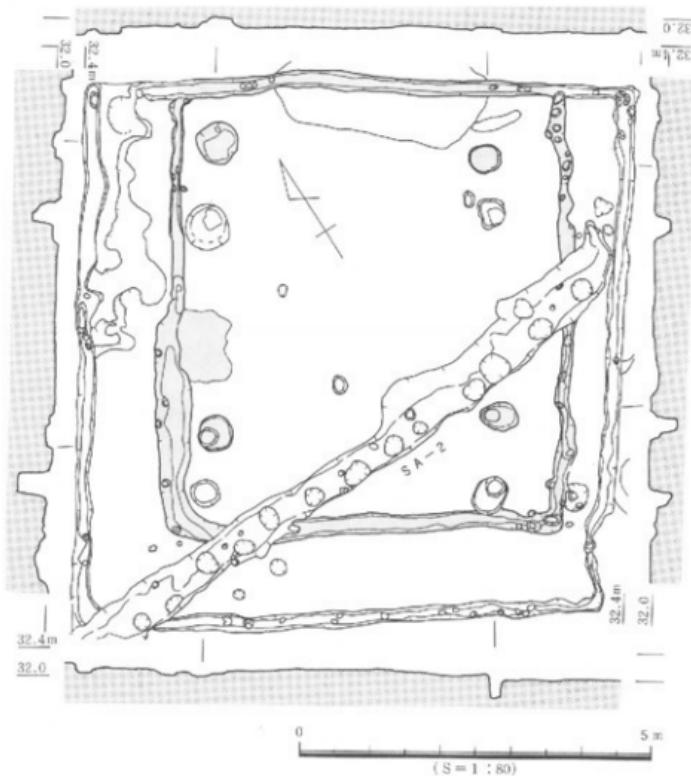


図12 SB-9（拡張前）

ているため、拡張前の正確な形状は失われているが、幅20cm、深さ12cmを越えない程度の規模であったと考えられる。

北西壁の中央南寄りの位置にカマドの基底部の痕跡が確認された。拡張後の住居によって削平されているため、周りの床面と比較してわずかに色調が異なる上が分布する程度であるが、奥行き約70cm、幅約1m、深さ数cmの規模を測る。カマドの基底部を僅かに掘りくぼめ、粘土を詰めて上部構造の土台とした部分が削平を免れて遺存したものと考えられる。この構造は、防湿機能も兼ね備えていたのかもしれない。焦土は確認されなかった。なお、煙道の痕跡はまったく確認できなかった。

拡張後の住居によって削平されているため、この段階にともなう遺物は確認できない。北西隅の柱穴から土師器片が出土したが、復元しえない。なお、住居の入り口の位置の特定は

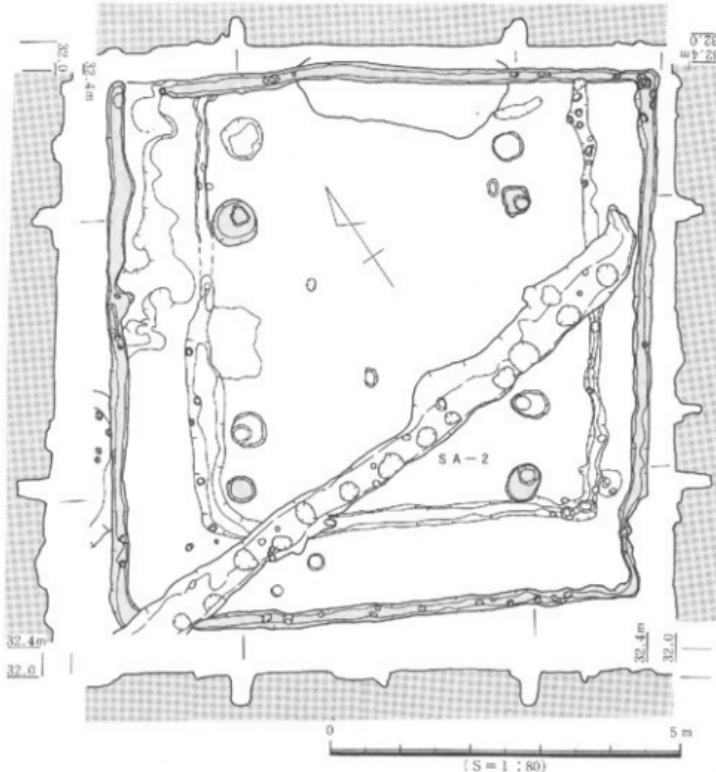


図13 SB-9 (拡張後)

できなかった。

時期は断定できないが、拡張後のSB-9が5世紀の中ごろを上限とすることが遺物から判明しているので、継続期間の一点が5世紀前半にあることはほぼ確実である。

SB-9・拡張後（図13～18・131、図版1～6） 北東壁の位置は変更せず、西に約1.25m、南に約1.35m、東に約0.7m拡張している。四本の柱も建て替えられている。拡張後の規模は東西約7.65m、南北約7.85m、面積は約60.1m²で、およそ1.6倍に拡大されている。

壁溝は、拡張前のものに比べてその深さがやや深く、杭の跡は、直径5～8cm、深さは深いもので20cmに達するものもある。南西壁では小ピットが比較的規則的に配置されており、この付近に深いものが多く認められる。

北西壁中央北寄りには、壁溝に接してカマドが造り付けられている。このように、カマドの位置が北西壁の中央よりも若干北寄りにずれる現象は、SB-5、6、7においても認められている（第3章　まとめ-3）。カマドの炊口部付近は削平されており詳細は不明であるが、燃焼部の奥壁付近の残りは比較的良好、土師器の裏の胴部片が外面を外側にして貼り付いた状態で検出されている。しかし、よく残っている部分で高さは15cmほどでしかない。残存部分の表面は焼けて焦土になっており、周囲には擾乱によって広範囲に焦土が散乱する状況が認められた。なお、灰や木炭は検出されていない。カマドの下部は、壁溝に接する半円形の範囲について、数センチ程度床面を掘り込んだ後、そこに粘土を貼って基盤としている。この構造は、床下からの温氣を防ぐことを意図したものであるかもしれない。なお、煙出しは確認できなかったが、カマドと壁溝が接する部分に舌状に黒色土が分布する部分が存在している。この埋土の状況は壁溝と同様であるのではっきりしないが、この部分が煙出しの下部にあたるのかもしれない。

この住居には、カマドの北側の壁溝沿いに、長さ2.4m、幅0.6～1m（一部削平）、高さ7～9cmの規模の台状の遺構が存在する。幅約1.3mのカマドに連結するこの遺構は、上下2層の灰褐色粘土を貼り付けて構築されており、その土質はカマド基底部の貼り土と基本的に同じものである。これは、カマドの基底部の構築と時を同じくして設置された施設であろうと考えられる。この台状遺構の南端のカマドに近い位置から、試掘時に完形に近い甕が出土している。この甕は、台状遺構を幅約45cm、深い部分で約8cmほど掘り窪めたうえで、直径約14cm厚さ約1～2cmの粘土の蓋土（灰褐色粘質土）を円形に貼り付けて設置されていた。これらの状況を総合すると、台状遺構はカマドのすぐ側に当初から甕を置くことを前提として構築された可能性も考えられる。甕の設置時期がカマドと台状遺構の完成から幾らか遅れたことも想定できるが、いずれにしてもこの遺構の機能は、カマドと密接な関係のもとにおいて、甕のような重要度の高い品物を設置することにあったと想定できる。さらにその甕は、カマドにきわめて近接した位置に置かれており、カマドに関わるなんらかの祭祀的な要素が

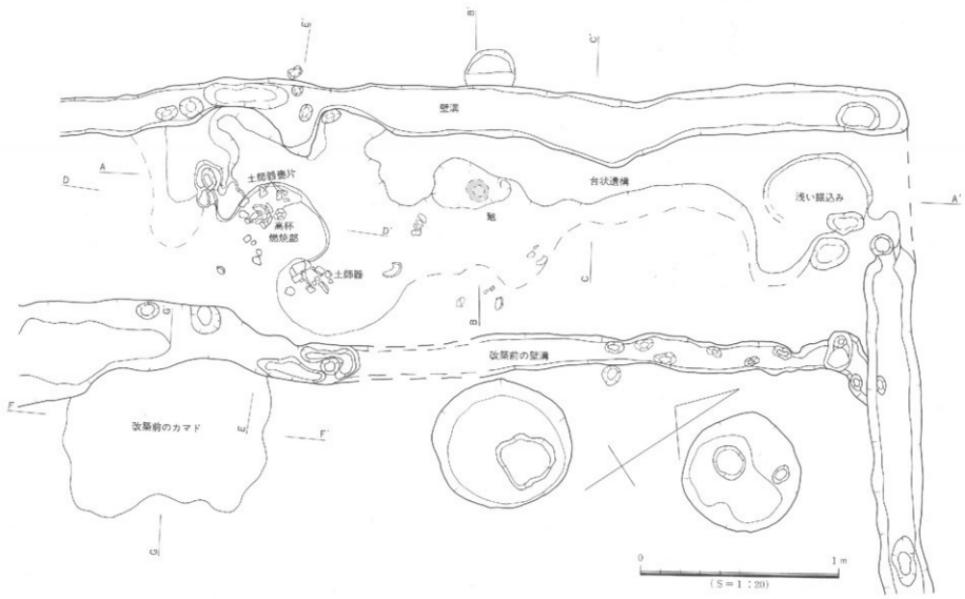


図14 S B - 9 カマド～台状造構

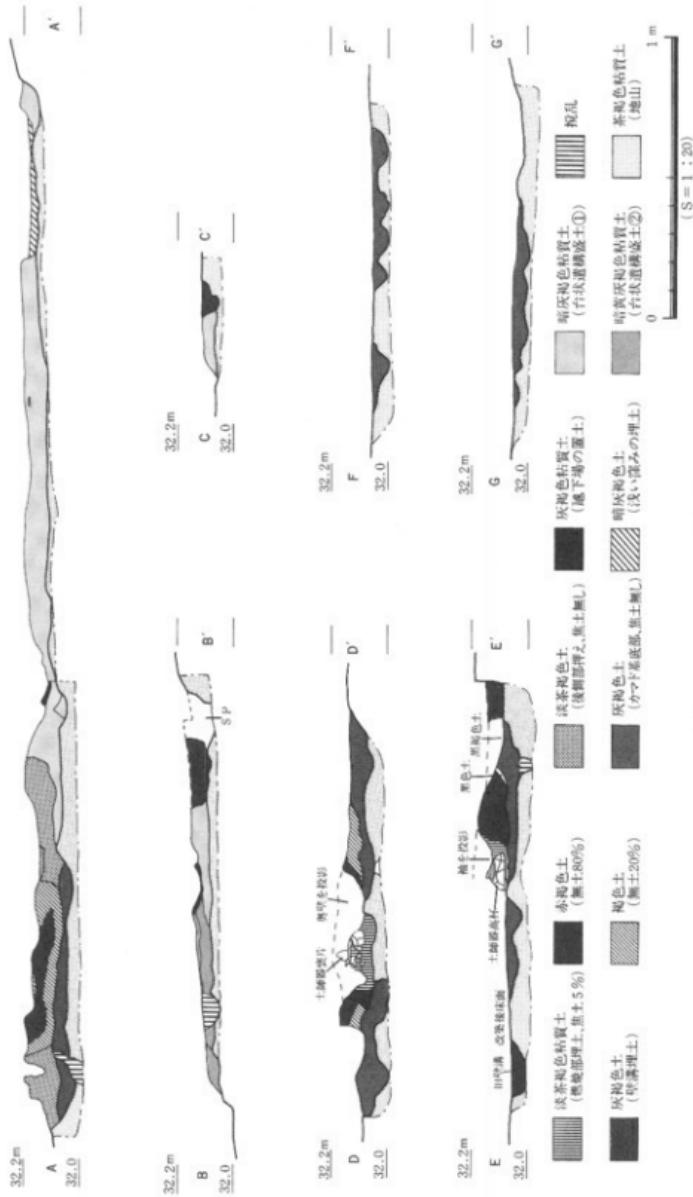


図15 S-B-9 カマド断面図

極めて濃厚であると指摘できる。もっとも重要なことは、この甌が住居の廃絶時、すなわちカマドの廃棄に際して外部に持ち出されることなく、元の位置に置かれたままであったことである。このことから、甌がカマドの廃絶、住居の廃棄の際に何らかの役割を果たしていた状況が想定可能かもしれない（第3章まとめ-4）。なお、台状遺構の北端において、深さ数cmの浅いピット状の遺構の痕跡を検出した。これは、甌など水を蓄える器を据えるためのものであったかもしれない。住居の壁溝がこの部分で完全に途切れていることと関わりがあるのかもしれないが、詳細は不明である。

出土遺物のすべては、SB-9の廃絶段階のものであろうと考えられる。ただし、台状遺構の上に設置されていた甌に関しては、その特殊な扱われ方から、制作段階から一定の期間が経過している可能性も考えられる。

4は、その特徴的な口縁端部の段の形状などから、TK216ないしON46に併行する時期のものと考えられ、愛媛県下出土の須恵器としては最も古い様相を示すものの一つである。口縁部は薄く作られており、胴部には櫛描文が施されている。口頸部に波状文等の文様は施されていない。底部内面には指頭圧痕が顯著であるが、胴部外表面は丁寧なナデ調整によって仕上げられている。5は甌に伴う把手付高杯の杯部である。甌と同じく、口縁部は非常に薄く作られており、明瞭な段がつく点なども共通している。胴部の突帯および段もシャープに作り出されている。脚部の形状は不明であるが、接合部分の痕跡から、長方形の透かしが4方向に施されていたことが確認されている。杯底部外表面には回転ヘラ削りが明瞭に認められる。これらの形状から、4に伴うことはほぼ確実であると考えられる。4と同じく廃絶時の住居内に残されていたことから、セットで使用された可能性が高い。6は口縁部の破片であると考えられるものの、器種は不明である。杯身の口縁部である可能性が考えられるが、立ち上がりが急で、端部が面取りされているなど異質な要素が目立つ。今後、当該期の初期須

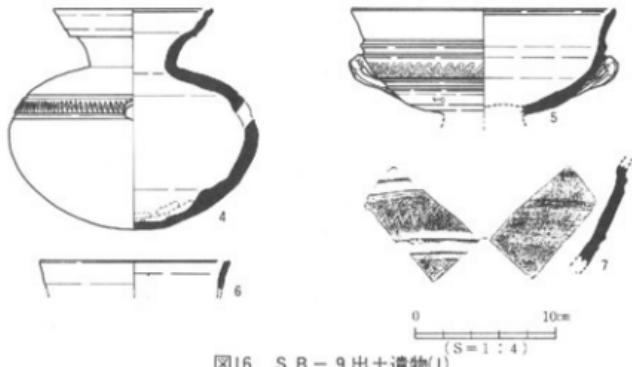


図16 SB-9 出土遺物(I)

恵器には、このような器種が加わる可能性を考えておく必要があろう。7は高杯形器台の口縁部の破片である。口縁端部は失われている。突帯によって区画された部分に、波状文が2単位施されているが、あまり明瞭なものではない。

以上の初期須恵器は、改築後のS B - 9 の床面上から出土したものであるから、改築前のS B - 9 は、ほぼ確実に5世紀前半代に位置づけられる。

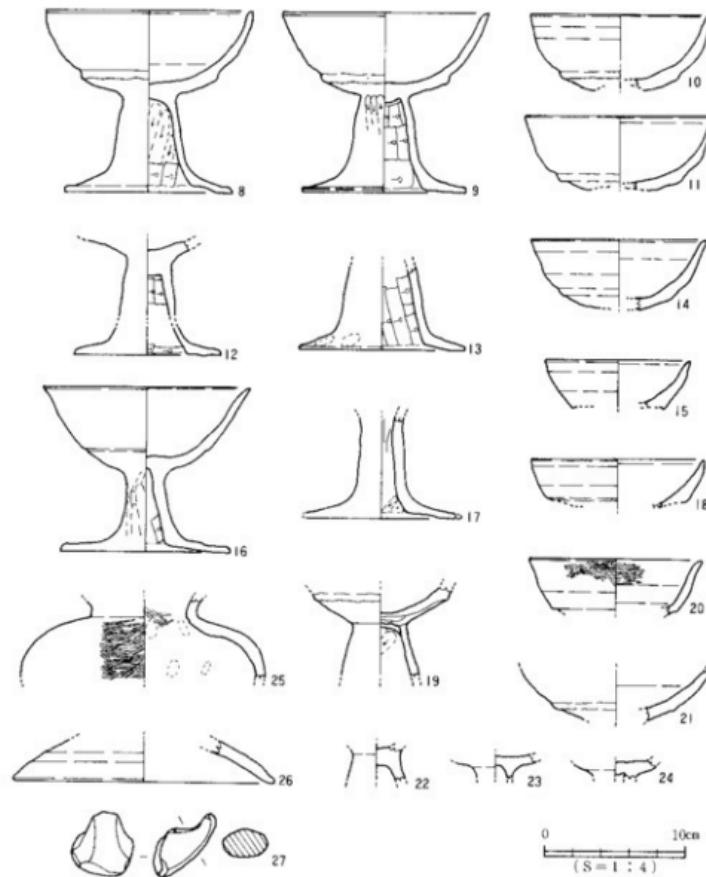


図17 SB - 9 出土遺物(2)

8～24は土師器の高杯である。高杯は8～10個体前後確認でき、大きく3種類に分類される。ここでは、8と9に代表されるものを1類、15、18などを2類、16のような形状のものを3類に分類する。1類は比較的直に立ち上がる杯部形態を呈し、口縁端部は僅かに摘み加減に外反する。段は比較的明瞭に認められ、軸部は中程がやや膨らんだ形状をしている。脚端部はナデ調整によって面取りされることが多く、接地部分の幅は総じて狭い。軸部と杯部の接合は、ねじ込む形を採用しており、軸部内に飛び出たヘソ状の粘土の盛り上がりを、最終的に丁寧に指先で撫で付けてつぶす調整を行っている。軸部内面の調整は、箒削りとナデ調整による。胎土のきめは細かく、器面はミガキに近い丁寧なナデ調整が施されている。焼成は良好で、オレンジ色を呈している。

2類は基本的には1類と同様の作り方をしているものと考えられるが、杯部の段から上位の立ち上がり部分の形状に違いが認められる。1類と比較してこの部分が短く、やや厚手に作られており、杯部が浅くなる点を特徴とする。また、1類に比べて径が小さい。焼成および器面の調整は1類と基本的に同様である。なお、軸部以下の特徴は不明である。

3類には16と17が該当する。杯部は緩やかに外反し、段の存在は不明瞭である。軸部は細く直線的に作られており、内面には絞った際のシワが認められる。脚部の接地部分の幅は広く作られている。また、器面の調整はあまり丁寧ではなく風化も進んでおり、胎土のきめは1類ほど細かいものではなく、白っぽい焼きになっている。なお、軸部と杯部の接合方法ははっきりしない。

以下、個別に検討する。

8は、改築後のカマドの燃焼部のほぼ中央付近において、伏せた状態で検出された。杯部の内側には、焦土を含む粘質土が充填されており、上方からの圧力に耐え得るように固定されていた。カマドの廃絶段階まで存在したことが明確であることから、なんらかの祭祀に関係するものである可能性も考えられるが、その設置状況から、支脚としての機能を考えるのがより自然であろう。ただし、この高杯の外面が二次的に火を受けて焼けたり、ススが付着した形跡は認められない。9は、改築後の南東の柱穴の中から、杯部を上に向けてほぼ完形の状態で出土した。住居廃絶時の祭祀の後、柱の抜き取り穴に埋納されたものと考えられる。よってこの高杯は、4及び8などとの同時性が保証された資料であると評価できる。この他、柱穴からの出土物としては19が一点ある。これは9と同じく、改築後の南西の柱穴から出土したものである。住居廃絶時に埋納されたものであるのか、改築時に混入したものであるのか不明である。12と13は、住居の南西部の上面付近で検出されたものである。その形態は、8、9に近似している。16と17は、住居の東端付近から出土した。16は南東の壁溝に接する場所において住居の床面から数センチ浮いた状態で確認された。杯部を上に向けて正位置で出土したことから、住居廃絶時に床面付近に置かれていたものと考えられる。数センチ貼床されていたにもかかわらず、調査時にこれに気付かず掘り下げてしまった結果、遺物が浮

いた状態で出土したものと認識した可能性も考えられる。同様のことは、5についても言える。16に関しては、その形態が他の高杯とはやや異なり、細身の軸に口縁部が大きく外反する杯部がとりつくものである。器面は風化が激しく、調整等は不明である。杯部の段はあまり明瞭ではない。この高杯は、東壁溝付近から元位置を保った状態で出土した。その他の土師器の高杯はいずれも破片であるが、14については、カマドの北東およそ1mの地点から出土しており注意を要する。8、9と比較すると杯部の段がやや不明瞭ではあるが、形態上、ほとんど違いは認められない。カマドの周囲からは、この他にも同化し得ない土師器の高杯や甕の破片が多数出土しており、比較的の密度が高い地点である。

20は口縁部外面にヘラ磨きが施されている。製作技法に着目すると、15と18については、段の接合部分で剝離した状況が認められる（破線）。

25は、土師器の壺の肩部、26は、高杯の脚部である可能性が高い。27は土師器の牛角状把手である。

28は16の側から出土した敲打痕が認められる石で、中央部はやや窪んでいる。29も同様の平たい石であるが、縁の部分は明らかに研磨を受けた痕跡が認められる。周辺部には、径数

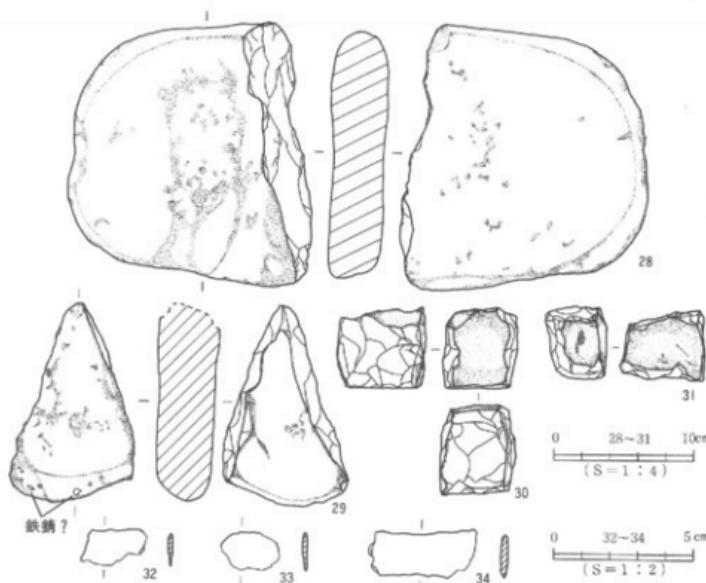


図18 SB-9 出土遺物(3)

ミリの鉄錫状のものが付着している。いわゆる金床石である可能性も考えられるが、この付着物は磁石に反応しないため詳細は不明である。ただし、この住居からは、砥石と鉄片も出土していることから、小鍛冶が行われた可能性も否定できない。30と31は石英粗面岩製の砥石である。ともに折れているが、その形が直方体に整っていることから、固定して使用されていたものを、後に手持ちの砥石として再度使用した可能性も考えられる。材質はいわゆる中砥である。これらはとともに、カマドの東側、住居のほぼ中央付近から出土している。この地点は土師器の破片などの遺物の密度が比較的高い場所であった。

32と33は鉄片、34は刀子あるいは鉄片である。32については、くの字形の直線的な部分が原形を保っている可能性が高い。28、29の存在と併せて、ともに小鍛冶の際に生じた鉄片である可能性が考えられたことから、調査の終盤に、住居床面付近の土を任意に採取（土嚢袋4個分程度）した上で、水洗して鍛造剝片等の検出を試みたものの、空振りに終わった。以上、SB-9において小鍛冶が行われたと断定するには至らなかったものの、その可能性を完全に否定できるものではない。小鍛冶が行われていたと仮定するならば、その熱源はカマドが有力であると考えられるものの、このような実例が実証されたケースはこれまでに知られていない。今後、検討すべき課題である。なお、この住居から鉄滓は出土していない。

なお34については、刃が付けられている可能性が高いことから、刀子の破片と考えておきたい。

SK-6（図11・19） SB-9の南東壁に接した位置に掘り込まれた土壙である。僅かにSB-9を切っている。35は土師器の高杯であるが口縁部がやや開き加減に外側に摘み出されている。基本的にSB-9の1類と同様のものである。36も高杯の杯部であるが、皿状の浅い形状を呈している。これは、2類に近いものに分類される。遺構の切り合い関係から、この土壙は、SB-6とはほぼ同時期、つまりSB-9廃絶後に掘り込まれたものと評価できる。



図19 SK-6 出土遺物

S B - 6 (図20~22、図版8・28) S B - 9 の北西、およそ10mに位置する竪穴住居である。規模は、東西約7.1m、南北約6.7mのはば正方形で、残りの良い部分の深さは約0.25mを測る。四本柱の柱穴は、直径およそ0.35m、深さ約0.4~0.6m。壁溝は、幅0.2~0.3m、深さは住居の床面からおよそ0.1mを測る。壁溝中にはS B - 9と同様に小ピットが存在し、特に北東壁では0.6~0.8m間隔で規則的に配列された部分もある。なお、カマドの北側においては壁溝は検出されなかった。

カマドの設置位置はS B - 9と同様、北西壁の中央であり、基底面の粘土層の上に焦土が分布する状況も共通である。擾乱が激しくカマドの正確な規模、構造の把握はできなかった。

遺物の出土量は極めて少ない。37は初期須恵器であると考えられる広口壺の口縁部の破片である。擾乱を免れた住居の南西隅から出土したものである。口縁部の直下には、丁寧な波状文が一単位施されている。口縁部の形状から判断する限り、T K216ないしT K208にあた

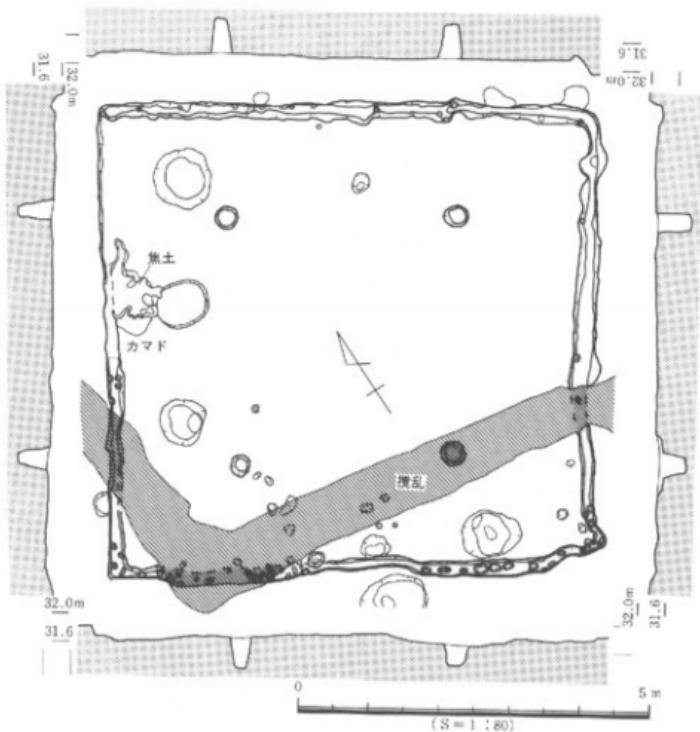


図20 S B - 6

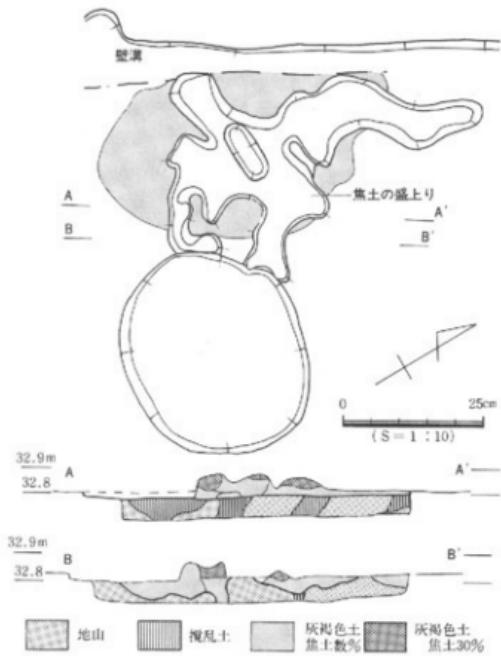


図21 SB-6 カマド

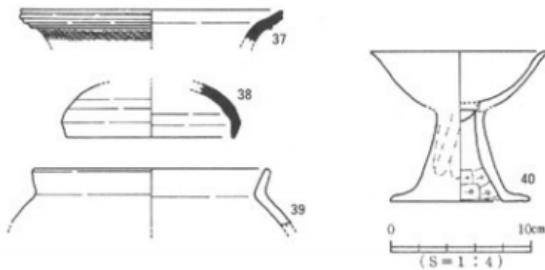


図22 SB-6 出土遺物

るものと判断され、SB-9出土の初期須恵器に比べてやや新しいものである可能性も考えられる。この須恵器と共に伴する土師器は、40が一点のみ確認されている。口縁部が摘み加減に外反し、脚部は末広がりに開く形状を呈している。この形態は、3類の杯部形態と1類の脚部形態が融合したものと理解可能であるが、1類の中太りの軸が変化してこの種の末広がり状の形を呈するに至ったものか、あるいは別系統のものであるかは不明である。軸部に関しては、接合部にヘソ状の粘土の塊が観察される。1類については、このヘソ状の粘土の塊を最終的に撫で付けてつぶす方法が採られていたが、40に関しては、これが省略されたものと理解される。この考え方によれば、40はSB-9出土遺物と比較して後出する可能性が高いといえる。

38と39は、ともにSB-6から出土した扱いとなっているが、その形態は6世紀末以降のものであることから、おそらく、SD-24などによる擾乱のため混入したものと理解できる。38は須恵器の杯蓋であるが、口縁部を摘み出している点が特徴的である。丸い形状は、6世紀代に属するものであり、当遺跡出土の6世紀後半以降の時期の杯蓋に共通する形態である。39は土師器の甕である。6世紀以降の段階のものと考えられるが詳細は不明である。

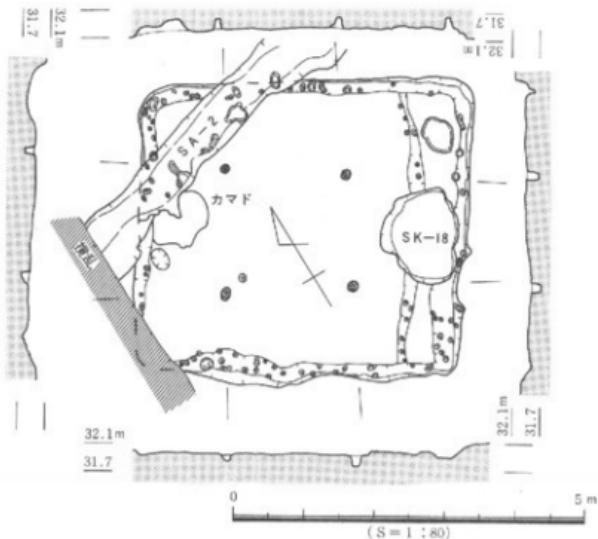


図23 SB-7

SB-7(図23~25、図版6・7) 住居の構造は基本的にSB-9およびSB-6と同様である。この住居は、四本柱の位置は変更することなく東に約0.9m拡張されており、拡張後の規模は東西約4.7m、南北約4.3m、深さ約0.1~0.15mを測る。壁溝中には、無数の小ビットが存在する。

カマドもSB-9などと同様、北西壁の中央に位置している。布掘りのSA-2の掘り方によって削平を受けているため定かではないが、基底面の粘土を貼り付けている部分で、その規模は幅約0.75m、奥行き約0.8mを測る。カマドの中央には、支えとして使用された花崗岩の円礫が1個、元位置から出土している。なお、この支えの石については、調査時の手落ちから取り上げをおこなっていないが、床面を掘り込んで設置された状況を確認している。

遺物に関しては、土器主体で、須恵器については破片が1点確認できた(切り合い関係にあるSA-2に由来する須恵器かもしれない)のみである。時期的には、住居の構造や方向性などから、須恵器を伴うSB-9と併行することが確実だと考えられるので、規模が小さいこの住居の住人は、須恵器を保有できない立場にあったものと理解できる。

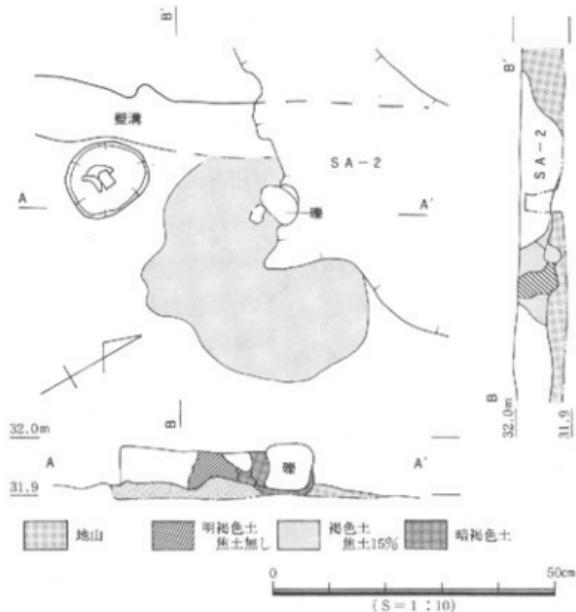


図24 SB-7 カマド

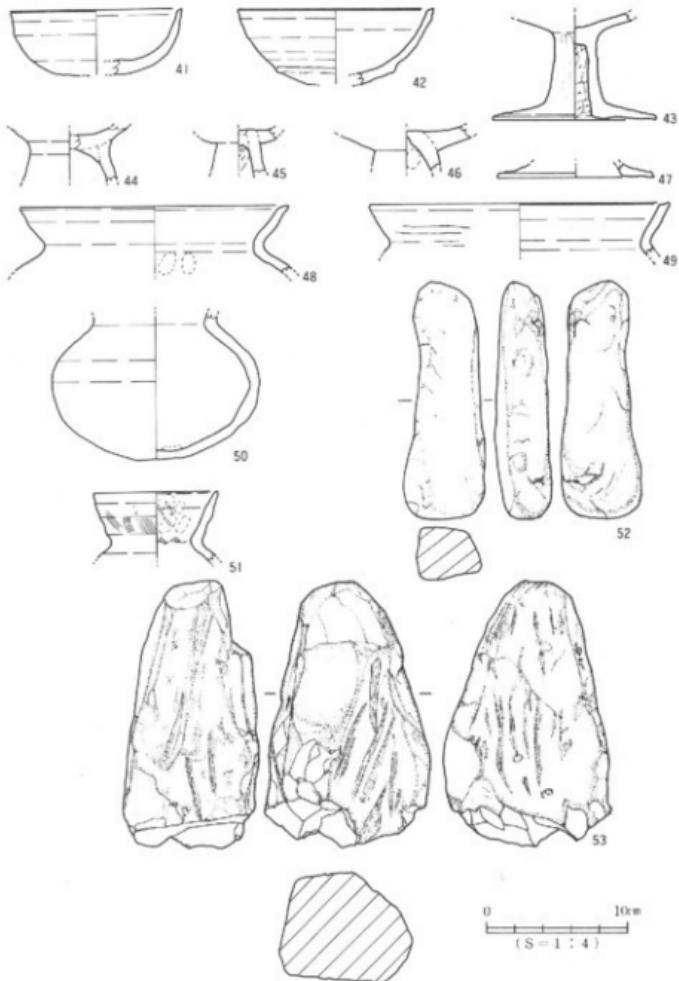


図25 SB-7 出土遺物

41は土師器の碗である。口縁端部の形状は高杯1類のそれと似かよっている。42-47は土師器の高杯である。42の形状は、SB-9出土の高杯1類と共に通している。一方、43は、3類の特徴を満たしている。細身の軸部に接地面積が広い脚が付く点が特徴的である。胎土、

焼成の状況も3類のそれと対応するが、色調がややオレンジ色に近い。44～46は、高杯の軸部と杯部の接合部分の破片である。いずれも、軸部の内側のヘソ状の粘土を指先で撫で付けることによって仕上げている。47については軸部をねじ込んだ状況、ヘソ状粘土を撫でてつぶした様子が明瞭に観察可能である。以上、土師器の高杯に関しては、2類が存在しない以外、SB-9の状況と完全に共通している。

48と49は土師器の甕の口頸部である。ともに口縁部の内外面には、横方向の指撫でによる段が認められる。やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を水平に近くなるように仕上げる点が特徴的である。50は土師器の壺である。底部内面に指頭圧痕が認められる。51も同じく壺である。口頸部のつくりは甕と共通しているが、指頭圧痕の存在が目立つ。外面と内面の一部には刷毛目調整の痕が認められる。

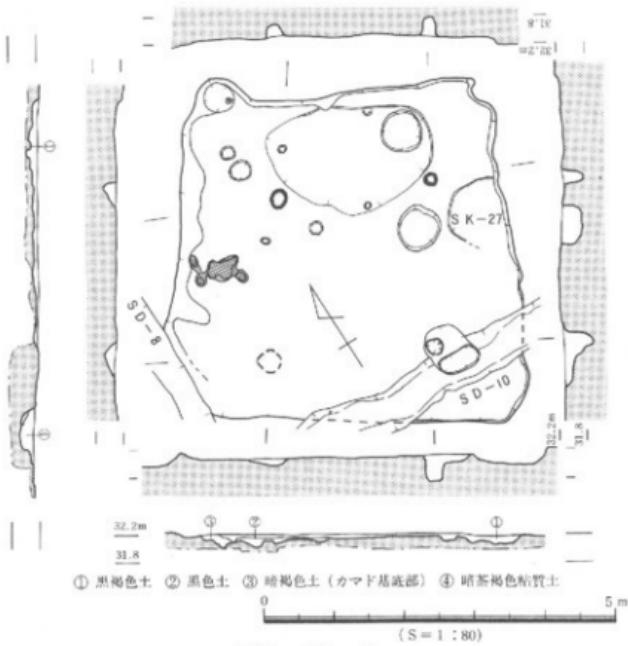
52は加工痕、使用痕とともに認められない甕である。表面は滑らかであることから、河原石であるとみられる。住居の北西壁の壁溝中から出土したもので、人為的に持ち込まれたものであることは確かである。石杵として使用されたものかもしれない。53は砥石である。材質は砂岩であると考えられるものの質は良くない。研磨の結果成立したと考えられる平坦面は少ないものの、刃物などの刃先を整える際に生じたと考えられる、断面三角形状の幅の狭い溝が多数削り込まれている。SB-9同様、この住居内においても、鉄器が使用されたことは確実である。

SK-18（図23、図版6） SB-7の北東壁に接する位置に住居埋没後に掘り込まれた遺構で、土師器の胴部片が出土している。堆積土は黒色土で、SB-7のものより黒い。

SB-5（図26・27） 住居の配置状況から判断して、SB-9などと集落を形成するものと考えられるが、その構造に若干の違いが認められた。住居の形状はやや変形しており、東西約4.3～5.2m、南北約4.4～4.8mの不整形な規模を測る。柱やカマドの構造は他の住居と同様であるが、壁溝が確認されなかった点が異なっている。なお、柱やカマドの一部は掘立一9の柱穴によって切られている。

カマドの中央からは、火に焼けた形跡が認められる砂岩の板石が2枚立った状態で検出されており、支えとして使用されたものと考えられる。このカマドは激しい擾乱を受けており、焦土の分布も希薄である。なお、調査時の不手際により、この板石の取り上げはおこなっていない。

この住居の床面上からは、遺物は一点も出土していない。替わりに、住居内の土壤であるSK-27から土師器の高杯が4個体ほど出土している。



SK-27 (図28、図版28) SB-5の北東壁に接して、住居の内側に掘り込まれた浅い土壇である。埋土はSB-5とほとんど同一で、住居の床面を精査した際に検出された。カマドの反対方向に位置することから、梯子などの出入口に伴う施設の固定のために掘り込まれた遺構である可能性が考えられる。

54~58は土師器の高杯であるが、その形状はSB-9出土の8などに極めて近似している。54は、脚部の接地面積はさほど広くはない、内側は若干浮いている。脚端部は撫でによって面取りされる。軸部の内面は箝削りが顕著で、杯部の底の外面は指撫でによって丁寧に調整されている。軸部と杯部の接合は、9などと同様に、粘土を指で撫で付けることによって仕上げを行っている。その形態が極めて似ていることなどから、SB-9の8及び9と同一の工人によって、SB-9における祭祀行為に際して製作された可能性が高い。57と58は、とともに土師器の高杯の破片である。軸部の直径が他のものと比較してやや太くなる可能性が高

い。これらの出土遺物の形状から、この土壇の年代がSB-9・SB-7と同時期であることを知ることができるが、仮に入り口に伴う施設であると考えると、これらの遺物は住居建設時に埋納されたものである可能性が高い。

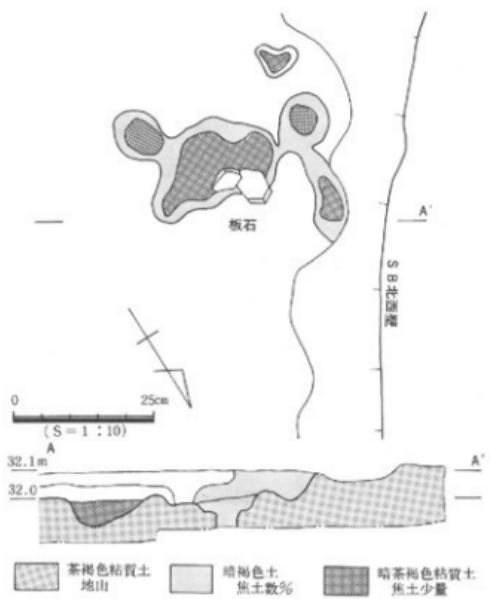


図27 SB-5 カマド

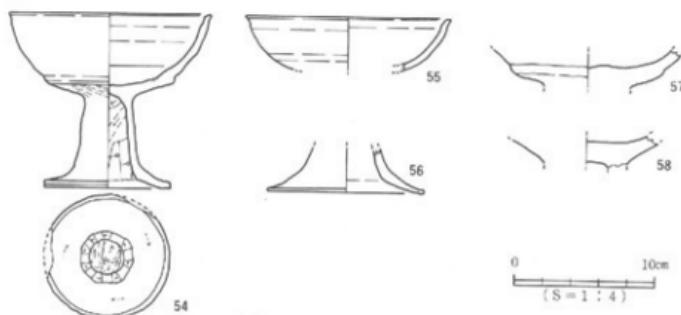


図28 SK-27出土遺物

掘立-8（図29） SB-6の北西壁に重複して平行な位置に建つ、梁間2間、桁行4間の掘立柱建物で、SB-6を切っている。方位は桁行軸線でN-28°-Eである。柱穴の形状はおおむね円形であるが、水田の段差にともなう削平によって、僅かにその痕跡を止めるのみのものもある。埋土は比較的均一で、柱痕の確認はできなかった。建物の方向性が一致することなどから、5世紀中葉に属するSB-6が廃絶した後に、この掘立柱建物に建て替わったものと考えられる。

掘立-9（図30） SB-5の南東壁に重複して平行な位置に建つ、梁間2間、桁行4間の掘立柱建物で、SB-5を切っている。方位は桁行軸線でN-23°-E。柱穴の形状は、掘立-8同様円形で、一部擾乱によって失われたものもある。削平を受けているため残りは悪い。規模、方向性ともに掘立-8と共通な要素が認められることから、この住居もSB-5廃絶後に建て替わったものと考えられる。重要な点は、各掘立の方向性が各SBと一致することである。SB-6と掘立-8、SB-5と掘立-9がともに密接な関係にあったことを示すものと言えよう。

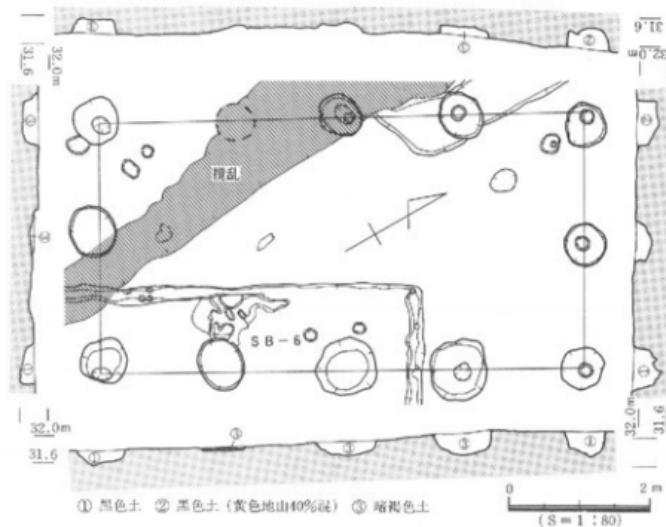


図29 掘立-8

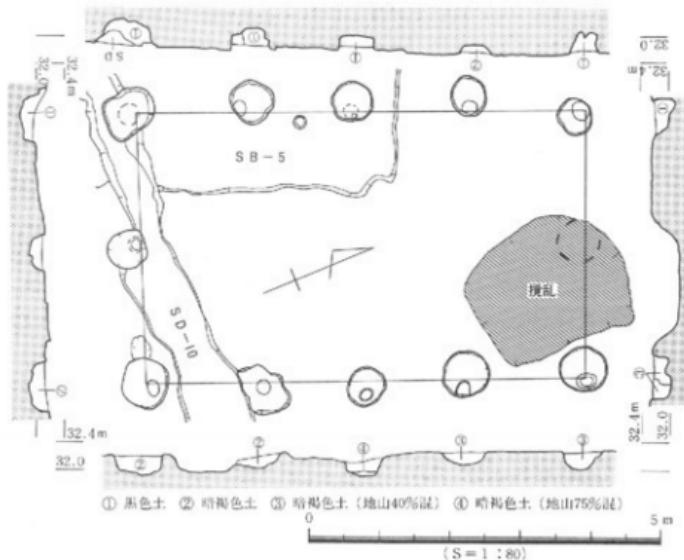


図30 挖立-9

掘立-1 (図31) 調査区北東部に位置する3間×3間の掘立柱建物で、ピットの一部は中世以降の段階のS D-2によって削平されている。柱穴の掘り方の直径は、大きいものでは0.8~1.2mで、当遺跡では最大規模を測る。柱穴は円形を基本としているが、柱設置位置の都合上、柱穴を部分的に掘り足して拡張したものが認められ、これらの柱穴は長方形を呈している。各ピットの下場には、柱の跡と考えられる直径20cm強の円形の窪みが検出されている。軸線は梁間方向でN-31°E。この方向性は南西に展開する5世紀前半から中ごろにかけての時期の集落と完全に一致するものであり、注目される。

年代の決め手となる遺物は出土していない。

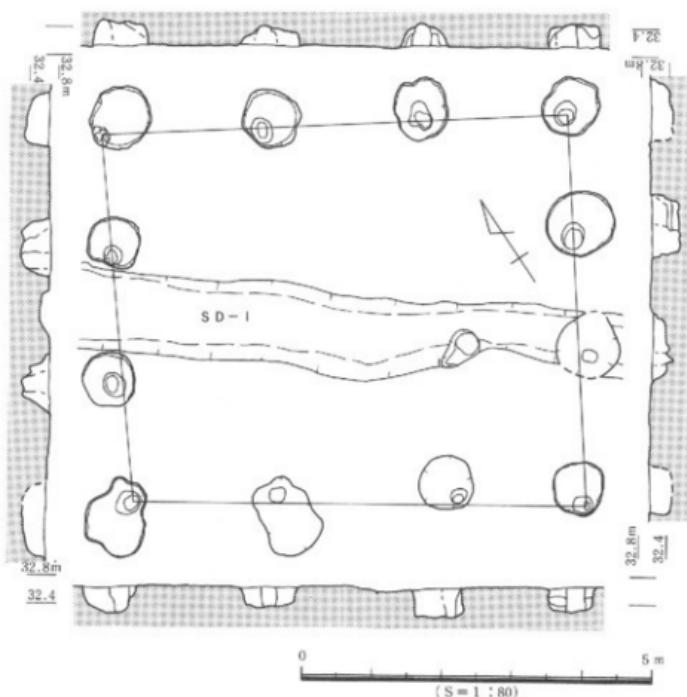


図31 堀立-1

堀立-2（図32・33、図版21・28） 堀立-1の東隣に位置する桁行3間、梁間2間の掘立柱建物で、堀立-1同様、中世以降のSDによって一部削平を受けている。柱穴の掘り方の大きさは堀立-1のそれに比べてやや小振りである。軸線は桁行方向でN-29°-Eである。堀立-1、3、4との密接な関係が想定できる建物である。

堀立-1からは、顕著な遺物は出土していないが、この堀立-2については若干出土している。

59と60は須恵器の甕の口縁部片である可能性が考えられる。ともに同一個体である。端部は失われているために、その形状は不明であるが、断面三角形状の突帯を境として、端部の器壁の厚みが半減するようである。内面には、回転鋸削りに伴う稜線が顯著である。形態的には、SB-11出土の101との共通性を指摘できる。5世紀後半のものである可能性が考えら

れるが、その場合掘立-2は、SB-9、SB-6などの竪穴住居と比較してやや遅れて出現するものと理解できる。61は外面に繩蓆文叩きが施された大甕の胴部の破片である。59の胴部である可能性もあるが、詳細は不明である。以上の遺物は、同一ピット中から出土している。62は、ピットの検出面で出土した7世紀中葉の杯蓋の破片である。この掘立柱建物と直接の関係にあるものではない。

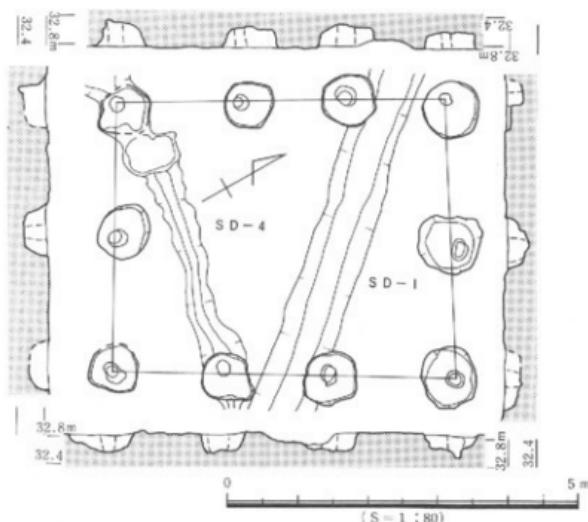


図32 掘立-2

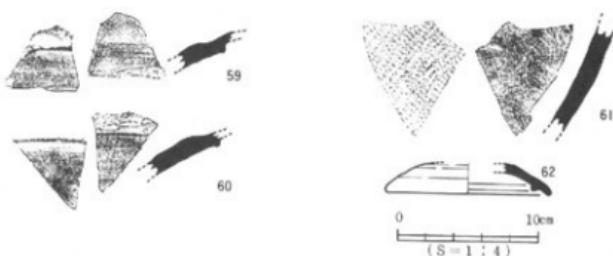


図33 掘立-2 出土遺物

掘立-3（図34）　掘立-1の真南に平行な位置に建つ、桁行3間、梁間3間の建物である。柱穴の掘り方の直径は30cm～40cmで、掘立-1、2と比較してかなり小さい。水田の段差による削平によって、柱の一部は失われている。軸線は梁間方向でN-36°-Eである。

掘立-4（図35）　掘立-3の東に隣接する2間×2間の総柱建物である。当調査地には24棟の掘立柱建物が存在するが、総柱建物はこの1棟のみである。東柱はライン上に等間隔で2本配置されておりその深さは側柱に比べて明らかに浅い。軸線は梁間方向でN-39.5°-Eである。

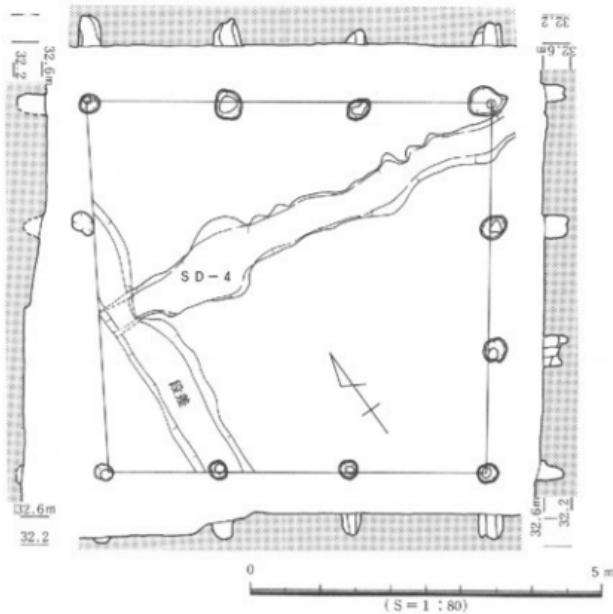


図34　掘立-3

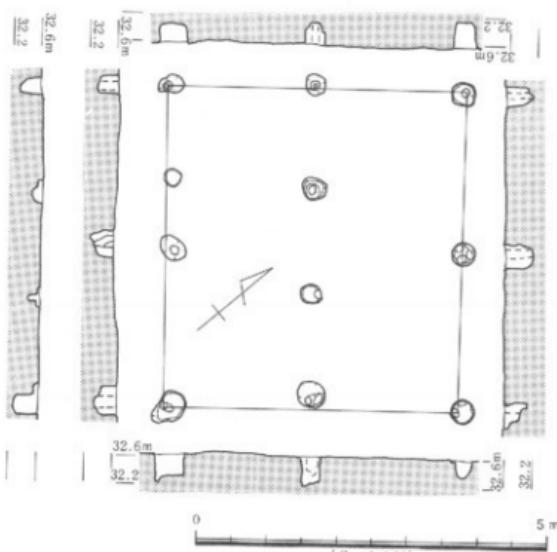


図35 掘立-4

SK-1～3（図36・37、図版23・30）　掘立-4の南に位置する埋土が黒色の土壤群である。SK-1とSK-2、SK-2とSK-3は互いに切り合い関係にある。出土遺物の大半は土師器片であるが、若干量の須恵器片も含まれている。これらの遺物は5世紀中葉から後半のものと考えられるので、掘立-1、SB-9を中心とする集落に属するものと判断される。

63～79は土師器の高杯か、もしくは椀である。63は杯部の破片であるが、深さの割に口径が大きく、口縁端部を擒み出している。64は口縁端部を欠いている。脚部はスカート状に広がる形態をとり、その内面は箝削りによって調整されている。杯部の内面には刷毛目調整が施されているが、これは、SB-9出土の高杯1類～3類にはまったく認められない特徴である。緩やかに外反する杯部の立ち上がりは3類に共通しているが、器そのものが一回り大きい。この種のものを、4類に分類したうえで検討する。軸部内側の粘土の盛り上がりをそのまま残す点は、SB-9に後出するSB-6出土の40と同様である。丁寧に調整を行う1類に比べて、この種の高杯はやや後出する可能性もある。

69は椀である可能性が高い。口縁端部は直に立ち上がる。65から68についても椀になる可能性が高いものの、67については、高杯の杯部になることも考えられる。いずれも、口縁端

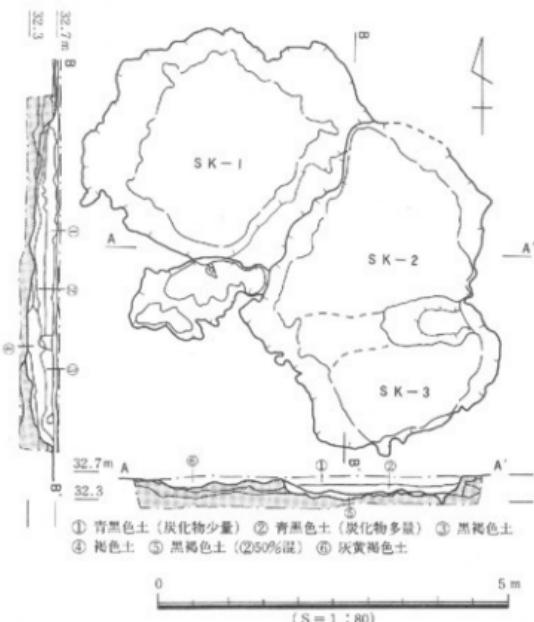


図36 SK-1～3

部を外に摘み出している点が特徴的である。70は高杯の受部の破片である。71～79は土師器の高杯の軸部ないし脚部である。72については、軸部の中程が僅かに膨らみを持っており、ミガキ状の丁寧なナテ調整が施されている。そのほかの脚部の破片については、接地面積が狭い1類の特徴を示す。ただし、79に関しては、他のものとその形状がことなっているほか、外面に箋磨きが施されているなど異質な要素が認められる。80と81は土師器の壺の肩部である。同様のものはSB-7においても出土している。

82は須恵器の高杯の脚部である可能性が考えられる。端部を巡る一条の突帯の存在が特徴的である。高杯であれば、かなり大型のものとなる。83は須恵器の高杯の杯部である可能性が高い。外反気味に摘み出された口縁端部の形状は、当該期の土師器の高杯と共通しており注目される。84は口縁部の破片であると考えられるものの、どのような器種のものか不明である。端部を撫でることによって面を作り出している点が特徴的である。同様のものは、S

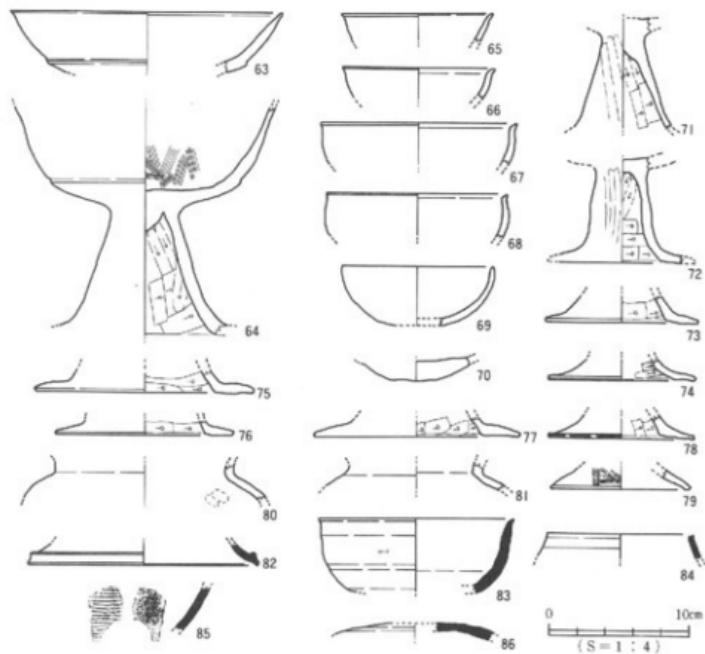


図37 SK-1~3出土遺物

B-9などでも確認されており、当該期の初期須恵器にこの種の器が含まれる可能性を想定しておくべきであろう。85は甕もしくは壺の胸部片で、外面には叩きが施されている。86は杯蓋の破片ではないかと考えられるがはっきりしない。以上、SK-1~3出土の遺物について検討したが、土師器の高杯4類の存在を新しい要素とみるか、1類に伴うものと判断するかによって、所属年代に若干のずれが生じる。ここでは、ヘソ状の粘土の塊を撫で付けずにそのまま放置していることから、1類より後出するものと考えて、この造構の年代をSB-9より新しい段階に位置づけておきたい。

SK-26(図38) SB-5の西に位置する不整形な土壤である。SD-2、SD-7に切られていることから、その形状は不明である。埋土が黒色であること、方向性がSB-5と一致することなどから、1~2期に属する可能性が高いものと考えられる。

SK-28(図39、図版28) 堀立-2の東方に位置する土壤であると考えられる遺構である。深さが5ないし10cm程度しか遺存していないため、詳細は不明である。87は把手付高杯の破

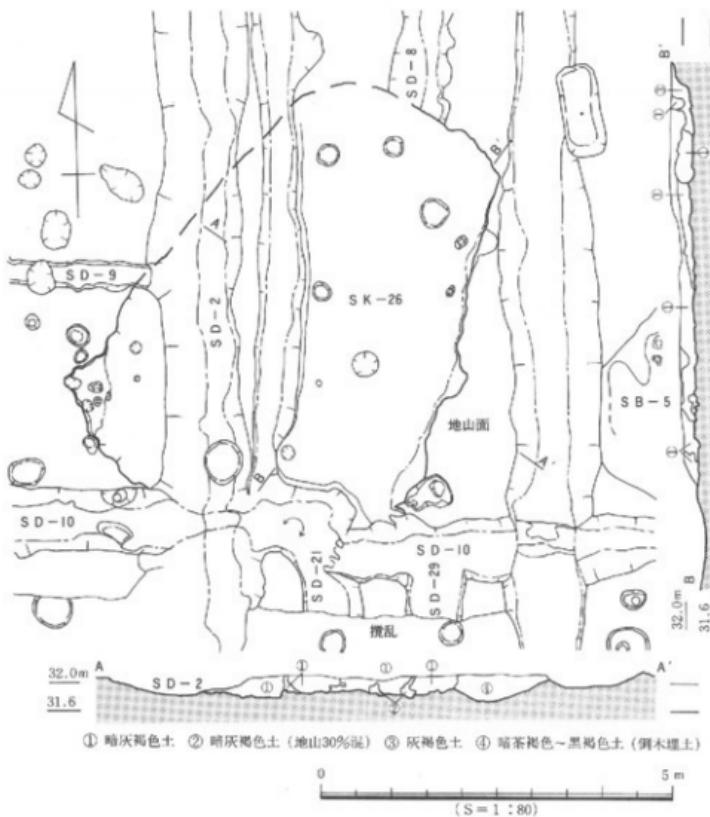


図38 SK-26

片である。波状文が施されているが、文様帶を区画する突帯は一条も認められない。この状況は、SB-9出土の把手付高杯と比較して明らかに新しい段階であることを示している。器形の全形を復元できないのではっきりしないが、TK208の後半期ないしTK23以降の段階のものであると考えられる。88は土師器の小型の甕である。内面には指頭圧痕が認められる。須恵器の高杯と共伴関係にあるものと理解できる。

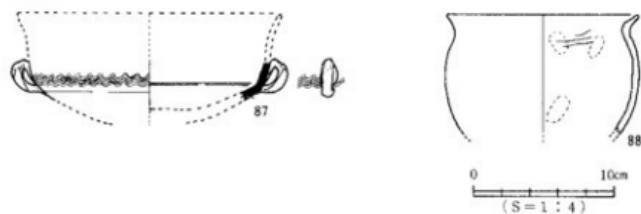


図39 SK-28出土遺物

4 古墳時代後期の遺構と遺物

先に調査の概要を説明した際、当調査地の遺構の変遷を13期に区分して概説したが、これから述べる古墳時代後期に属するのは、6期から11期である。以下、古い段階から順次、各遺構と遺物について説明する。なお、末尾で述べるSD、SKについては、古墳時代中期に属する可能性があるものも含まれているが、決め手に欠くことからこの項で扱うこととする。

S B-II (図41~43、図版19・31) 調査区南東部の竪穴住居が重複する箇所にあり、同じ重複箇所の他の住居に比べてその床面のレベルが最も低くなっている。規模は東西約6.8m、南北約6.5m (推定) を測り、壁溝は検出されなかった。1、2期の竪穴住居と違ってカマドは北壁の中央に設置されているが、柱穴などによる擾乱のため焦土が散漫に分布する程度で、その規模は明確でない。このカマドの位置関係は、ほぼ同段階であると考えられるS B-2などと共に通している。

出土遺物としては、98が該当する可能性が高い。

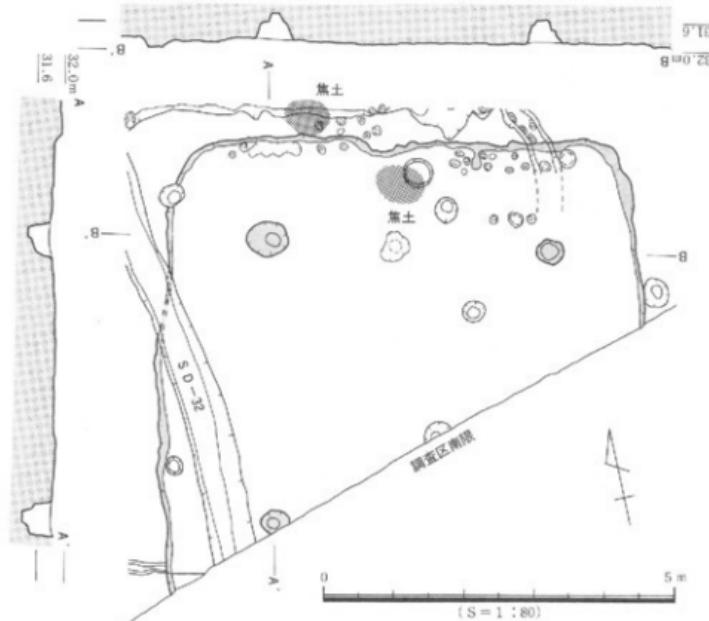


図40 S B-II

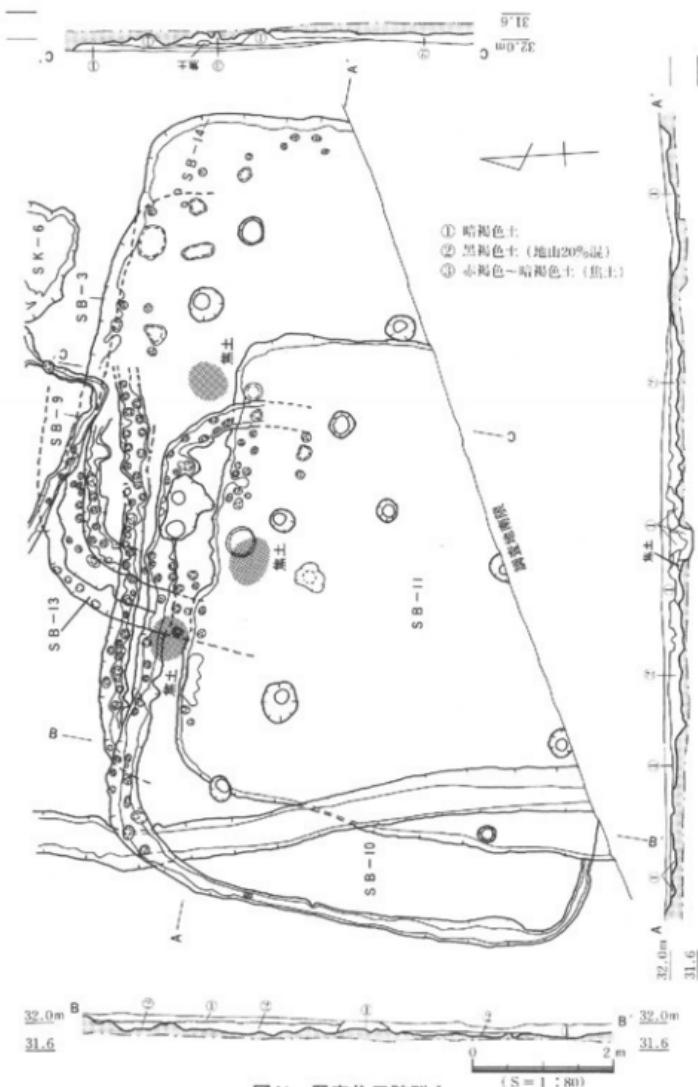


図41 竪穴住居跡群Ⅰ

豊穴住居跡群Ⅰ出土遺物（図42・43、図版31） この住居が重複して存在する部分については、調査技術が未熟であったため、各住居の床面を確実に捉えることができなかった。そのため、出土遺物で住居との関係が明確に捉えられているものはほとんど無い。よって、該当箇所からの出土遺物については、まとめて記述するものとする。

89はS B-10の北壁壁溝中から出土したものである。口縁端部を摘み出す技法は、6世紀後半段階以降の遺構から出土する杯蓋に認められる特徴である。89～94は概ね、重複部分の

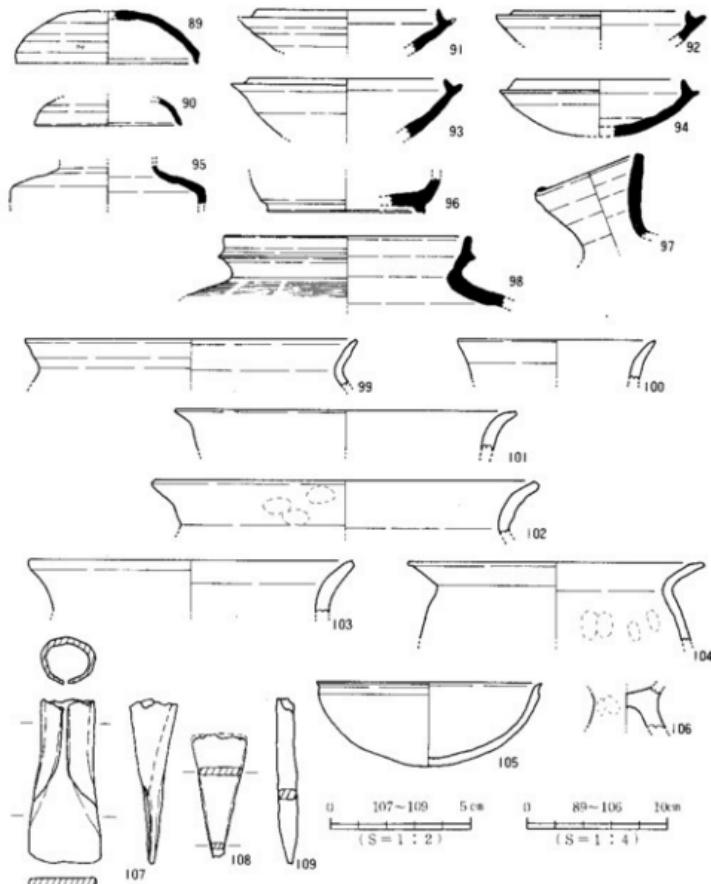


図42 豊穴住居跡群Ⅰ出土遺物(I)

比較的上面近くから出土しており、その形状から、これらの住居の最終段階が6世紀末から7世紀初頭の時期であることがわかる。95は薄手の口縁部が直に立ち上がる形状の短頸壺である。96は7世紀後半以降に下る高台付杯の底部である。これは、97とともに、住居検出段階に出土したものである。98は口縁部に突帯がめぐらされた短頸壺である。当該箇所出土の須恵器の中では最も低い位置から出土したもので、おそらくSB-11に伴うものであろうと考えられる。これに類似するものが隣接する東山古墳群において出土しており、5世紀末に位置づけられている。当該箇所における最初の住居であったSB-11の所属時期も概ねこの段階に求められよう。したがって、前段階の集落との時期的な隔たりは、さほど大きくはないものと理解できる。

99~104は土師器の甌である。この中では102が最も古い時期の特徴を示している。比較的薄手で、口縁端部は細く掘り出されている。これは、SB-7の49などに後続する段階のものであろうと考えられる。104は口径と比較して胴径が小さく、胴部が縦長な器形を呈する点が特徴的である。これは6世紀末から7世紀初頭の段階に属するものであろう。100~103は、おそらく99と104の間を埋める資料であろうと考えられる。5世紀代のものと比較して厚手であることが特徴的である。

105は土師器の瓶である。5世紀中葉のものと比較して浅い器形を呈している。106は土師

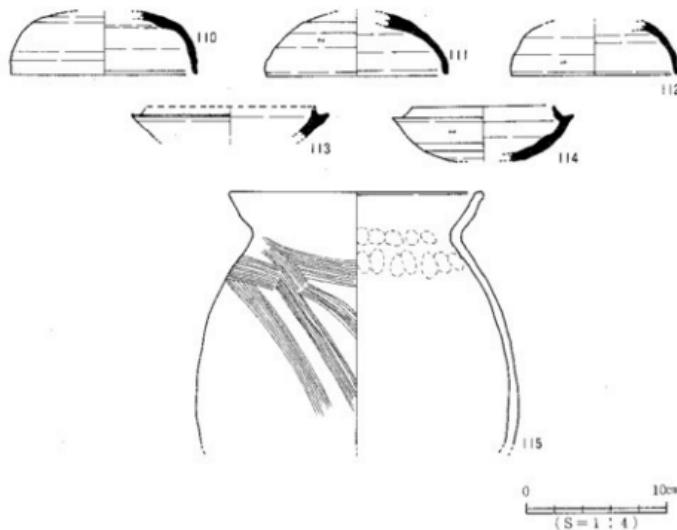


図43 積穴住跡群I出土遺物(2)

器の高杯の軸部である。

107は小型の鉄斧である。住居重複部分の比較的上層より出土した。その大きさから、手斧として作られたものであろうと考えられるが、実用の道具としては小さすぎることから、祭祀にまつわるものであったかもしれない。同様のものが、掘立-10の柱穴から出土している(130)。掘立-10の年代は、7世紀第1四半期頃と推測されるので、107も概ね6世紀末から7世紀はじめ頃のものであろうと考えられる。108は鉄鎌、109はおそらくその柄である。関は退化しており、段も認められない。鉄斧同様、その大きさは通常のものと比較して小さい。この鉄鎌についても、SB-11の床面よりはかなり高いレベルから出土しているので、107同様、6世紀後葉以降の段階に属するものと考えられる。

なお、この住居が重複している部分からは、鉄滓が数点出土している。土の洗浄は行わな

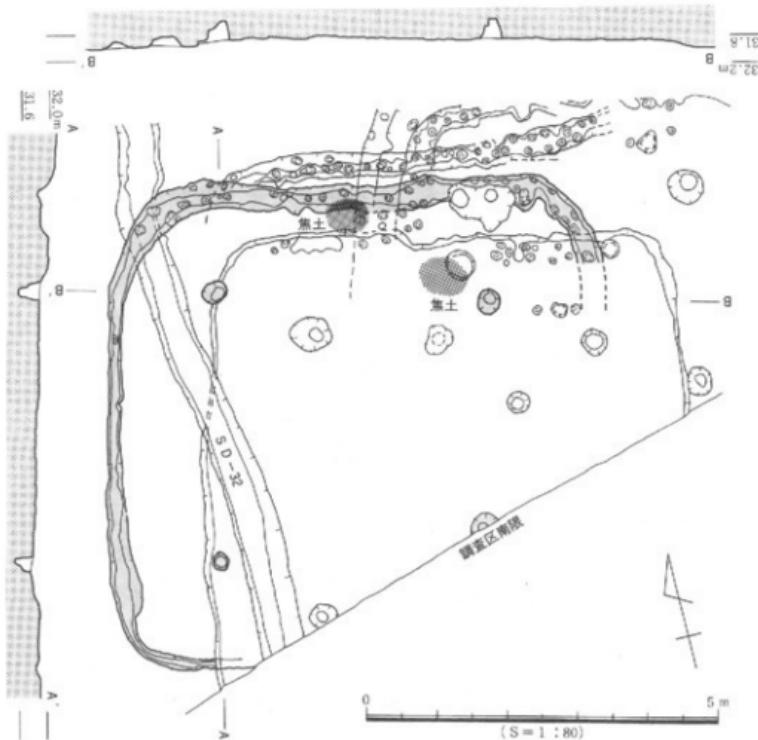


図44 SB-10

かったため、鍛造剝片は検出していないものの、小型の鉄製品の存在と併せて考えると、住居内ではないとしても、当該箇所の近くにおいて製鉄もしくは小鍛冶が行われた可能性も否定できない。

110から114は、この住居重複部分から北隣のSB-9の上面付近より出土したものである。いずれも6世紀後葉から7世紀初頭にかけての時期に属するものである。この地点の堅穴住居群の最終段階を示すものと理解できる。115はSB-14から出土した土師器の裏である。内面には指頭圧痕、外面には刷毛状工具による調整痕が認められる。前述の須恵器とはほぼ同じ段階に属するものと考えられる。

SB-10(図44) SB-11と重複して建つ堅穴住居で、その規模は東西約7.1m、南北約7.0mを測る。床面のレベルはSB-11に比べて高い。壁溝が存在しており、小ピットは北壁に多く分布している。北壁溝中から須恵器の蓋杯が1点出土している(89)。

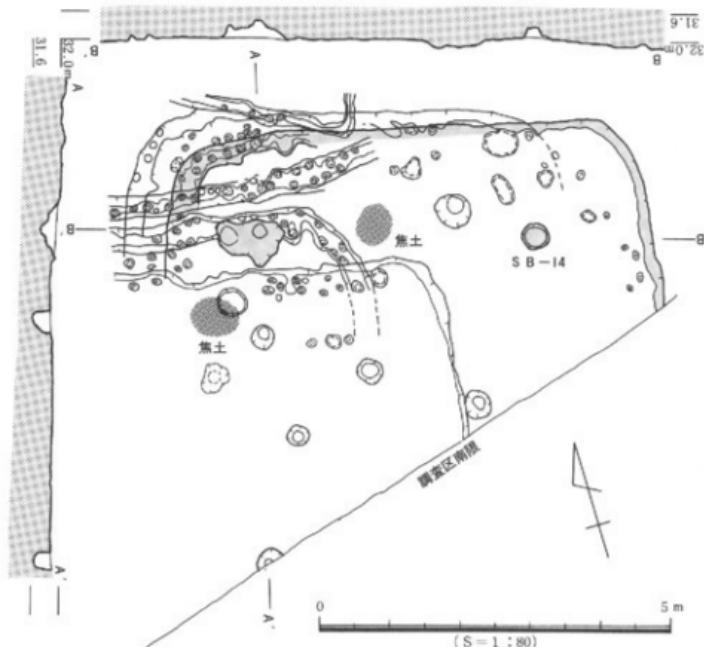


図45 SB-14

S B - 11同様、北壁中央にはカマドが設置されていたものと考えられる。削平を受けておりその規模ははっきりしないが、焦土が疎らに分布する範囲が確認されている。

S B - 14 (図45) 7棟重複部分において、最も東に位置する住居である。その大部分がS B - 3の住居域と重複している。規模は、東西約7mを測る。住居構造はS B - 10などと変わりないが、壁溝は北西コーナー付近でしか確認できず、僅かな段差と小ピットの痕跡などから復元した。なお、カマドは検出されなかった。II5はこの住居の床面付近から出土したものとみられる。

S B - 3 (図46) S B - 17のすぐ西に位置する。規模は、東西約6m（推定）を測る。僅かな段差によって住居の範囲の推定は行えるものの、壁溝は検出されなかった。なお、北壁がS B - 9の一部を切っている。この住居についてもカマドは検出されなかった。



図46 S B - 3

SB-13（図41） SB-3、SB-14の北西に位置し、その大部分がSB-3と重複している。北西コーナーにおいて僅かな段差と壁溝の痕跡を確認したのみである。カマド、柱穴等はまったく確認できなかった。床面のレベルはこの住居が最も高く、この地点の竪穴住居の中では一番新しいものである可能性が考えられる。そのため、他の住居の埋土（貼床）がこの住居の床面になっているため、調査時に検出されにくかったものと考えられる。

SB-12（図41） SB-10から僅かに北に位置しており、SB-10の壁溝と平行な壁溝の痕跡が確認されている。カマドは検出されておらず、柱穴も特定できなかった。規模は東西4mを越えるものとみられるが定かでない。

SB-8（図41） SB-3のすぐ内側に位置している。北西コーナーの壁溝を確認したのみで、カマド、柱穴は検出されなかった。柱穴は他の住居の埋土中に掘り込まれていたために、調査時にこれに気づかずして掘り下げてしまったものと推定される。規模は不明である。

掘立-20（図47・48、図版20・38） 調査区西部に位置する梁間3間×桁行5間、軸線の方向はN-22°-Eの掘立柱建物で、掘立-15とSD-10に切られている。掘立-18とともに、3間×5間の大型建物の出現期に当たるものと解釈される。削平を受けているものの、ピットの平面形状は方形に近いものが多い。コーナーのピットはしっかりしているが、その他の中には浅く痕跡的なものも含まれている。妻側の柱穴が特に貧弱である。柱痕は比較的分かりやすいが、これは抜き取り跡である可能性も考えられる。

116と117は、ともにこの掘立柱建物の南西コーナーの柱穴の埋土中から出土したもので、ほぼ完形である。116の口縁端部は、指先で摘み加減にナデ調整を行っている。117は116とセットになるものと考えられる杯身である。受部の端部は、くの字形に外反している。外面は回転削りによって丸味を持った形に仕上げられている。116の口径が、117と比較してやや小さいものの、一对のものとして使用されたものであろう。その出土状況から、建物を建てる際の祭祀に関わる遺物である可能性が考えられる。ともにTK209に属するものと考えられる。この遺物の存在から、掘立-20の所属年代は、6世紀末から7世紀初頭前後に比定される。

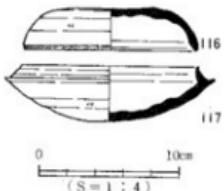


図47 掘立-20出土遺物

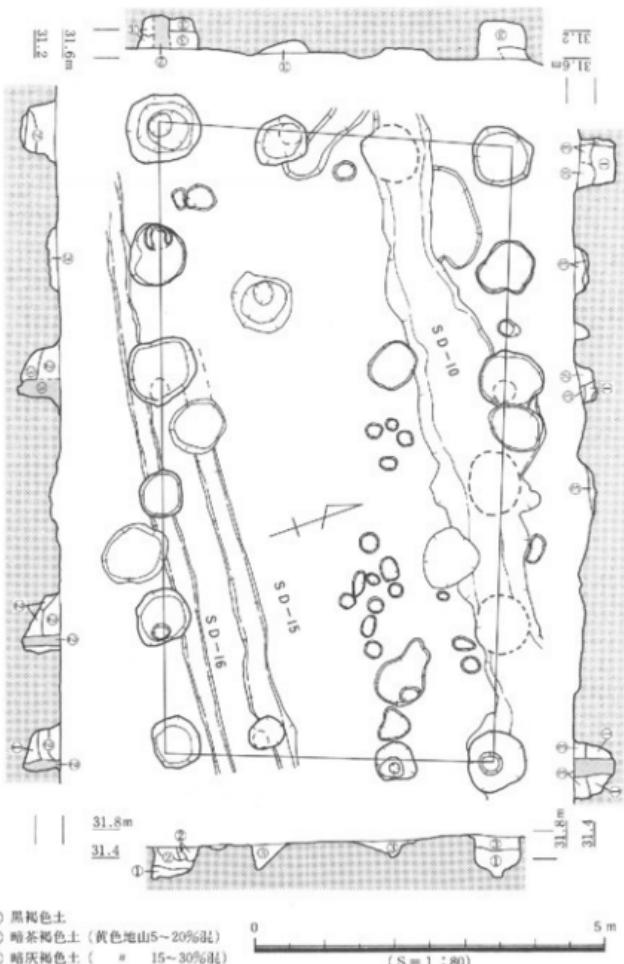


図48 掘立-20

掘立-18(図49)　掘立-10と掘立-11に挟まれた位置にある梁間3間×桁行4間、軸線は桁行方向でN-8°-Eの掘立柱建物である。東辺、西辺ともに柱の間隔が著しく広い部分があり、桁行は5分間に相当する距離がある。削平が著しく、各ビットの残りは悪い。SD-2、SK-8、SK-9などに切られている。SK-8からTK217後半期に属する杯身が出土していることなどから、この遺構の年代は、7世紀の中葉よりも遅るものと考えられる。

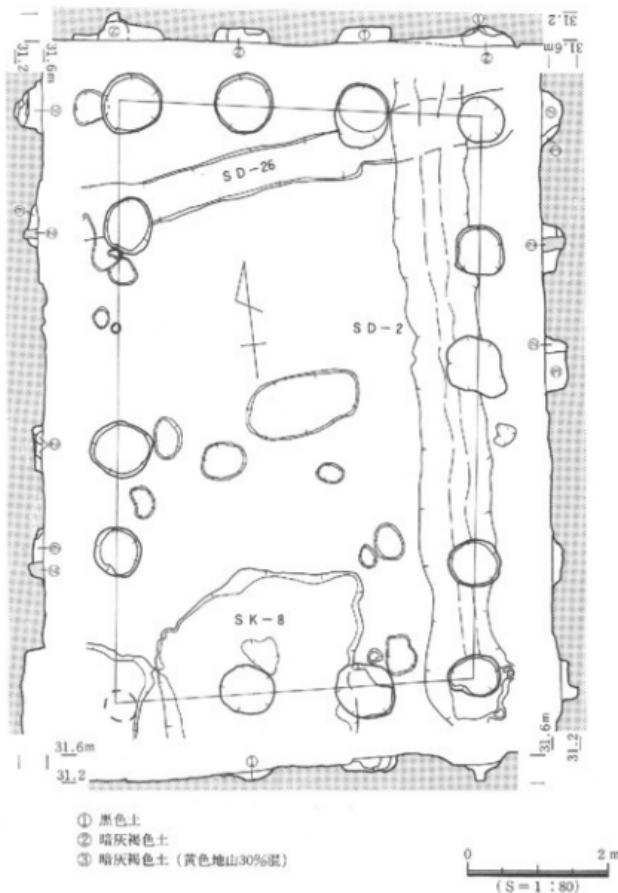


図49　掘立-18

S B - I (図50、図版20) 調査区北西部の遺構が多数重複している箇所（竪穴住居跡群II）に位置する。古いものから、S B - 1、S B - 2、掘立-22、S B - 4、掘立-14、掘立-23の順に建てられたものと推測されるが、各建物の軸線の方向性などから、S B - 2と掘立-22については同時並存の可能性も考えられている。S B - 1の年代は定かでないが、建物の軸線が真北から東におよそ10度前後振る6期に後続する、7世紀初頭に設定しておきたい。

この建物の基本構造は、前段階のS B - 10などとまったく共通であるが、建物の軸線方向が、真北からやや西に振った方向（磁北）に変更されることが特徴である。規模は東西6.2m、南北約5.9mを測る。壁溝中には目立った小ピットは認められず、柱の直径は太く見積もって

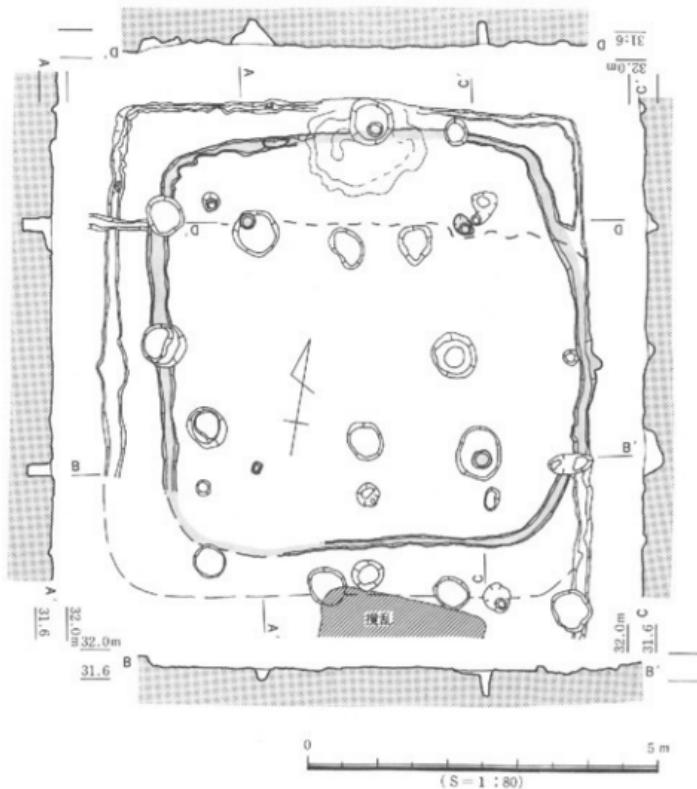
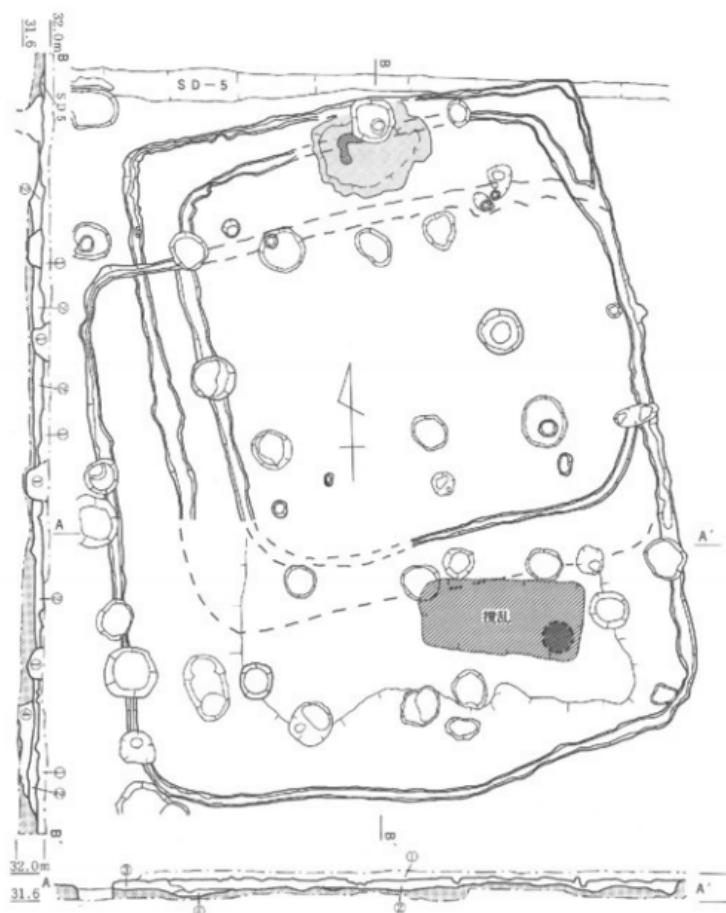


図50 S B - I



- ① 線状褐色粘質土（耕作土）
- ② 線状褐色土（S B 墓土・地山25%混）
- ③ 線状褐色土（S B 墓土）
- ④ 灰褐色土（S B 4 断溝状・地山40%混）

図51 竪穴住居跡群Ⅱ

も10cmほどと考えられる。軸線の方向は、N-14°-Wである。北壁中央に灰を伴うカマドが存在するが、これはSB-2に属するものと考えられる。

SB-2(図51~53、図版18・32) SB-1に比べてひとまわり大きく、東西約6.9m、南北約7.0mの規模を測る。壁溝中には小ピットが存在するものの、あまり明瞭ではない。柱穴の直径はSB-1同様、太くないが、深さはしっかりしている。軸線の方向は、N-9°-Wである。北壁中央に灰を伴うカマドが存在する。掘立-23のピットに切られているが、一部、燃焼部奥壁付近にあたると考えられる焦土が密に分布する箇所が検出された。このカマドからは、灰層にパックされる形で、土師器の甕が出土している(126)。

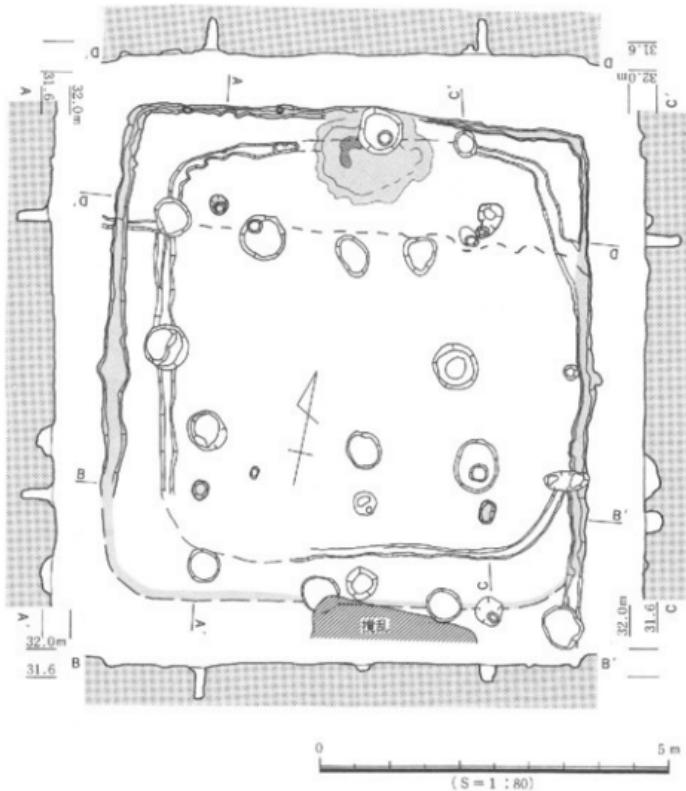


図52 SB-2



図53 S B - 2 カマド

カマドの基底部はやや掘り進められており、暗赤褐色土（③層）が充填されている。本来の構造に関係する土層としては、②層が該当すると考えられる。麥片はこの層にパックされる形で出土しているが、カマドの壁内部に埋め込まれたものであったかもしれない。①層はカマドに伴う灰層であると考えられるが、分析を行っていないため、その成分は不明である。

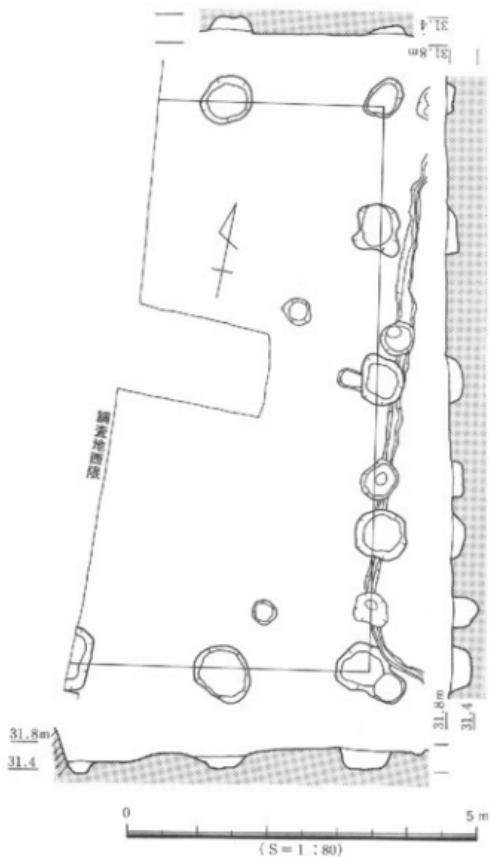


図54 掘立-22

掘立-22(図54) SB-2と平行、すぐ西に位置する掘立柱建物で、一部調査区外へ続いている。梁間2間以上、桁行4間の規模を測る。軸線の方向は桁行方向でN-10°-W、ピットの一部がSB-4の西壁溝と切り合い関係にある。その前後関係は明確でないが、SB-4が後続する可能性が考えられる。各ピットの残り具合は良くない。削平を受けているにもかかわらず、掘り方の形状が方形に近いものもあることは注意を要する。方向性および規模においてSB-2との共通性が認められるので、同時並存も考えられる。

S B - 4 (図55、図版20) 東西約8.0m、南北約8.2mの規模を測る。壁溝中には目立った小ピットは認められない。柱穴の直径は0.6m前後を測り、S B - 1、2に比べてかなり大きいが、南東角のピットは擾乱によって失われている。建物の軸線の方向はN-7°-Wで、これは、ほぼ磁北と対応する。なお、カマドの痕跡は認められなかった。埋土の土質が同じた

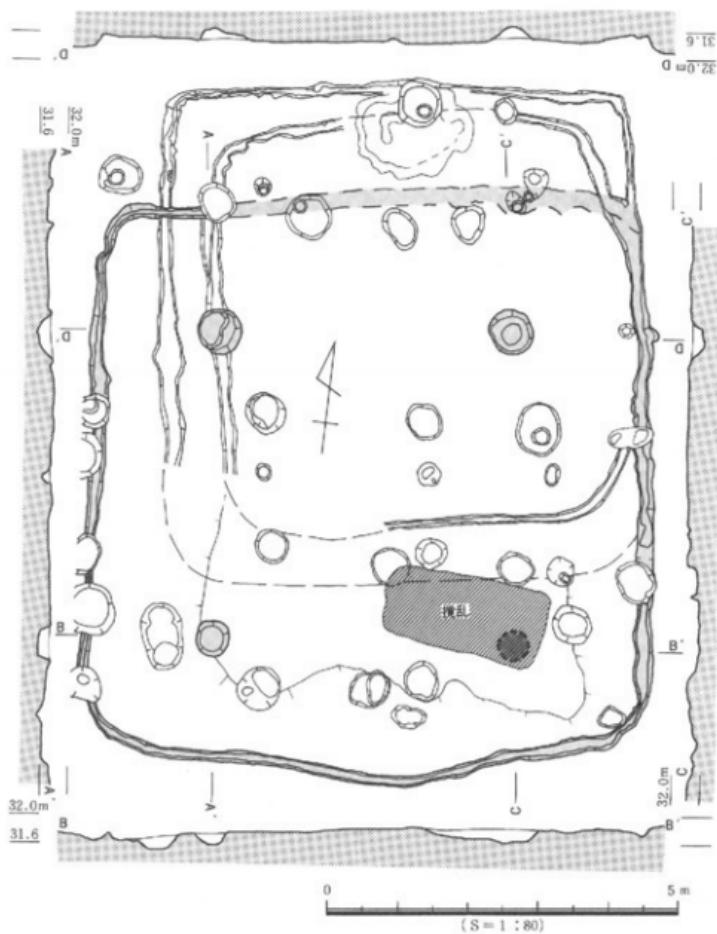


図55 S B - 4

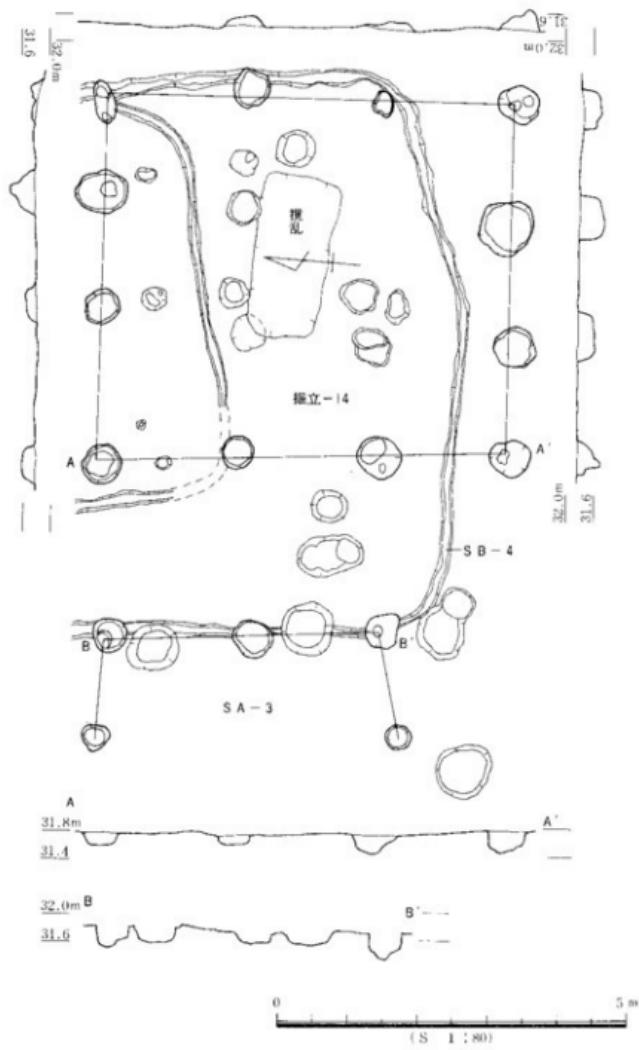


図56 掘立-14・SA-3

めはっきりしないが、この住居の北壁溝がSB-1とSB-2を切っていると考えられる状況が認められた。

なお、この豊穴住居と掘立-14の方向性が一致することは、豊穴から掘立への転換の問題を考える上で重要な視点である。

掘立-14（図56、図版20） 梁間3間、桁行3間、軸線の方向は桁行方向でN-4°-Wを測る掘立柱建物である。各SB検出当初からピットの確認が可能だったので、掘立-14は各豊穴住居に後続する段階のものと考えられる。この建物と掘立-22が、東西棟でなく南北棟であることは、北にカマドが設置され、南に出入りの位置が想定される豊穴住居の形状を反映したものと理解できる。おそらく、これらの掘立柱建物は、豊穴住居と共通の使われ方をされていたものと考えられる。以上の理由から、少なくとも掘立-14と掘立-22に関しては、倉としての利用は想定できないのである。なお、掘立-14の西壁と平行に、およそ2.5m離れた位置に南北2間分のSA-3が存在している。これは、その方向性などから、掘立-14に伴う目隠しの板塀である可能性が最も高いと考えられる。

SA-3（図55） 掘立-14の目隠し施設である可能性が高い柵列である。軸線の方向はN-5°-Wである。ここでは、仮に板塀のような構造を想定しておきたい。この板塀の北端のピットと南端のピットの西、およそ1.5mの位置に、形状が極めて近似した直径0.3mほどの小ピットが位置しており、ともにこの板塀を支える添木を固定するための杭の跡である可能性が考えられる。以上の復元案に基づくと、板塀と添木の角度がともに97°になるが、これは、板塀を支える添木を板塀の南北両端の柱の外側、添木を固定する杭の内側に挟み込む形で固定することによって、ほぼ直角になることを意図したものと理解できる。

豊穴住居跡群Ⅰ出土遺物（図57） I18-I22は、6世紀後葉に属する須恵器の蓋杯である。その形状から判断して、比較的一括性は高いものと考えられる。I23は高台付杯の底部である。これは7世紀の後半以降のものと考えられるが、攪乱によって混入した可能性も否定できない。したがって、この遺物が住居跡群の所属年代の上限を示す可能性は少ない。I24は須恵器の小壺、I25は短脚の高杯の軸部である。I25の焼成は不良で、灰白色を呈している。I26はSB-2のカマド中から出土した土師器の裏である。胴部が細長く、屈曲がきつい字形口縁をもつ7世紀の裏と比較すると、胴部に張りがある点など、やや古手の要素が認められる。I26は土師器の高杯の脚部であると考えられるが、詳細は不明である。攪乱によって混入したものかもしれない。I28はSB-4の南壁近くから出土した石英粗面岩製の砥石の破片である。横方向の使用痕が認められることから、定置式として用いられた後、手持ちの可動式として再度使用されたものであることも考えられる。I29は小型の石突である。先端部がやや折れ曲

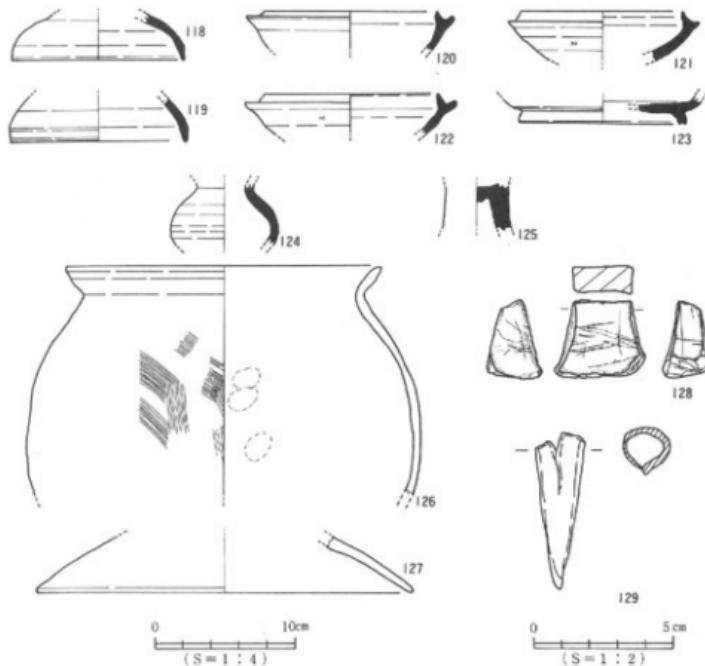


図57 竪穴住居跡群Ⅱ出土遺物

がっていることは、この遺物が実際に使用されたものであることを示すものかもしれない。全体として粗雑な作りであるが、ほぼ原形を保っている。この種の遺物は、一般的には、古墳出土の副葬品として目に留まることが多いが、住居から出土する例はかなり稀なことと考えられる。この住居跡群とはほぼ同段階にあたるSB-10を中心とした竪穴住居跡群からも小型の鉄器が数点出土している点との類似性が認められる。須恵器から時期的には、6世紀の後葉～7世紀の初頭段階にあたるものと考えられる。

掘立-10（図58・59、図版8・19・34）　掘立-12、掘立-11などとともに、掘立-18に後続する段階に属している。これらの掘立柱建物は、調査区北西部の掘立-22、掘立-14とはほぼ同じ段階に当たるものと考えられる。掘立-10は、梁間3間、桁行5間、軸線の方向は梁間方向でN-5°-Wを測る東西棟である。柱穴は削平を受けており、その残りは良くない。直

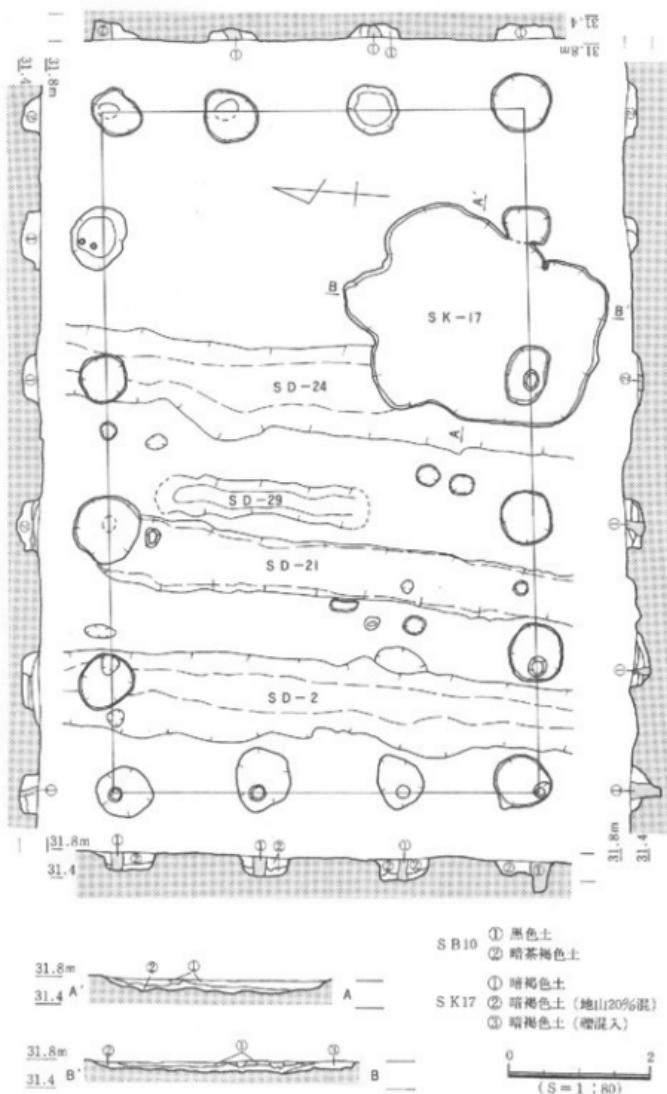


図58 掘立-10・SK-17

径は小さいもので0.7m、大きなものでは0.9mに達する。一部柱痕が確認されたが、これは後述するように柱の抜き取り跡である可能性が高い。この掘立柱建物は、SD-2、SD-21、SD-24、SK-17によって切られている。年代が特定できる遺物が出土していないため断定できないが、SD-21が7世紀中葉に属するものと考えられるので7世紀前半に当たることは確実と考えられる。

遺物としては、柱の抜き取り跡と考えられる部分から出土した小型鉄斧（I30）があげられる。薄手で小さすぎることから、実際に使用された可能性は少ない。なんらかの祭祀にともなうもので、掘立-10の廃絶に際して埋納されたものと考えられる。これと比較してやや大きな小型の鉄斧が、SB-10を中心とする竪穴住居跡群から出土している。この他に、土師器の胸部片が数点出土したが、図化できなかった。

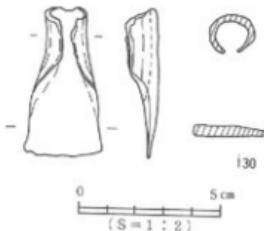


図59 掘立-10出土遺物

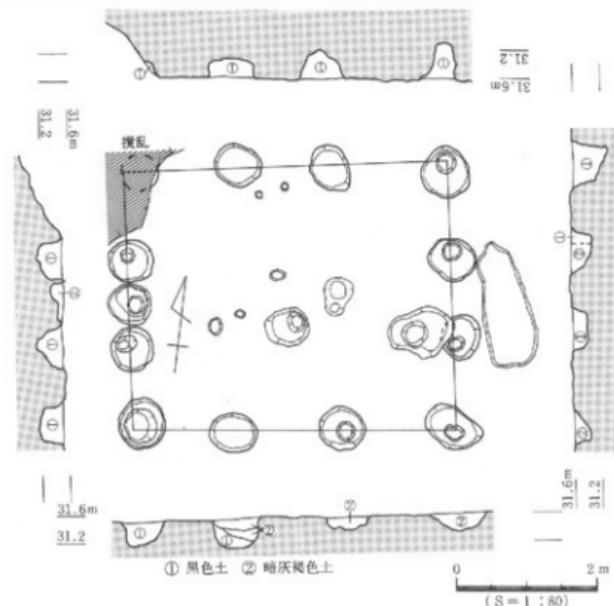


図60 掘立-12

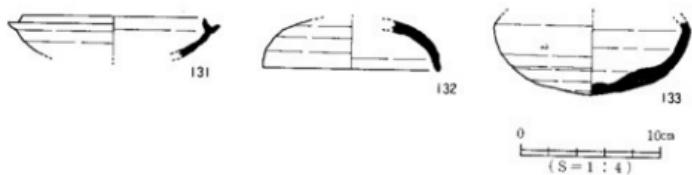


図61 挖立-12出土遺物

掘立-12（図60・61、図版9・19）　掘立-10の西に位置する、梁間3間、桁行3間、軸線はN-9°-Wの筋殿的な建物である。北西角のピットは最近の擾乱によってほとんど失われている。柱痕はほとんど確認できなかった。なお、この建物は、軸線が異なる掘立-21によって、極僅かであるが切られている。

131から133は、柱穴中から出土した須恵器である。131、132の形状は、掘立-20出土の116、117と比較してほとんど同様の形状を呈している。133は壺の洞部であると考えられる。これらの遺物から、この遺構の年代の上限を6世紀末から7世紀初頭に置くことができる。

掘立-11（図62、図版19・34）　掘立-10の南、調査区の南端に位置する桁行6間の掘立柱建物である。梁間方向については、1間分のみ確認している。軸線は、桁行方向に直交するラインでN-2°-Wであるが、全容が明かでないので断定できない。ピットの一部はSD-21とSD-24によって切られており、この点は掘立-10と共通である。各ピットの残存状況は悪いが、柱痕は比較的残りが良い。桁行方向の両端の柱の間隔が、中央の4間分の間隔の平均と比較してかなり広く取ってあることが特徴的である。この点は、この建物の構造と関係があるものと判断されるが、詳細は不明である。

S A - 2（図63～65、図版1・6・32）　掘立-10の南辺を東に延長した位置にある布堀りの柱列である。溝の底に直径0.15～0.4m、深さ5～10cmほどの柱の下場の痕跡が25個ほど列んでいる。軸線の方向は、N-6°-W前後で、掘立-10、掘立-12とほぼ一致している。ただし、SA-2をそのまま西に延長すると、掘立-10の南東コーナーと切り合い関係が生じてしまう。よって、この柱列が掘立-10などに伴うものであるのかどうかはっきりしない。

柱列の掘り方の東端はSB-9の南東の壁溝付近である。西端はSB-7付近で擾乱のために失われていることからはっきりしないが、場合によってはSD-26がこれに当たる可能性も考えられる。ただし、SD-26においては柱の跡は確認されていない。

134から143は、SA-2から出土したものに加えて、重複関係にあるSB-9の検出面付近から出土したものを含んでいる。134から138、141から143は、SA-2から出土したもの

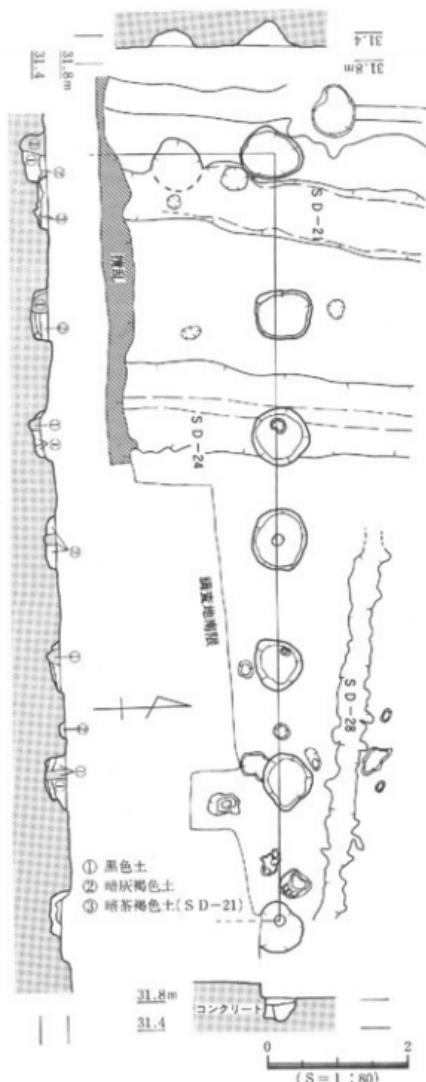


図62 掘立-11

であるが、他のものは、遺構の検出面付近から出土したことから、厳密に SA-2 からの出土とは認定しづらい。

I34からI38は6世紀末から7世紀初頭にかけての時期の蓋杯である。この遺物の存在から、SA-2の所属年代の上限を判断してよいと考えられる。I39は口縁部であると考えられるが、器種は不明である。I40は高台付杯の底部であるが、SA-2に伴うものではないと考えられる。I43は大甕の胴部片である。

I44からI48は、SA-2とSD-32の交点付近から出土した遺物である。いずれの遺構に伴うものか不明である。概ね、6世紀末から7世紀前葉にかけての時期に属する遺物である。

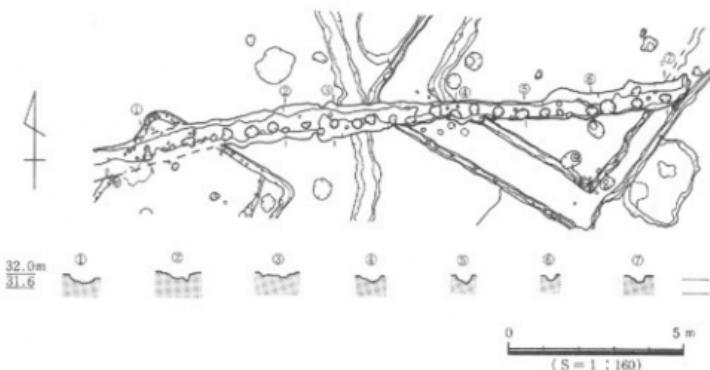


図63 SA-2

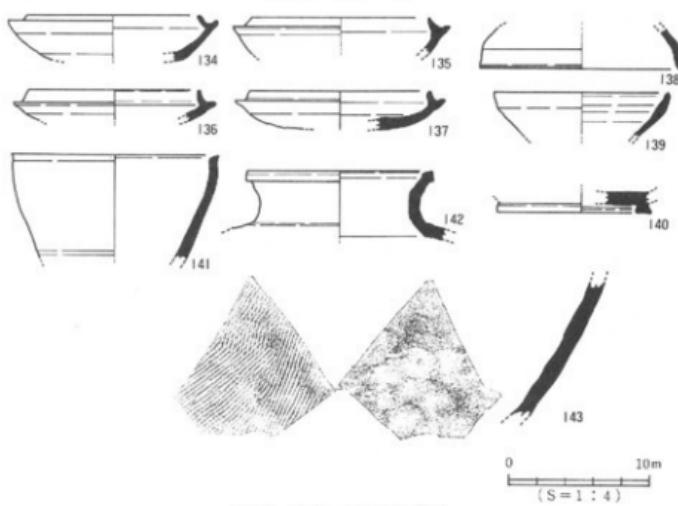


図64 SA-2 出土遺物



図65 SA-2～SD 32出土遺物

掘立-5 (図66・67、図版10・20) 調査区西部に位置する梁間2間以上(おそらく3間)、桁行5間の南北棟の掘立柱建物である。掘立-23、掘立-17、掘立-19と1つのグループを形成するものと考えられる。軸線は桁行方向でN-4°-Wである。ピットの残りは悪いものの、柱底の遺存状況は比較的良好。各ピットは概ね方形である。

北西角のピットから、器種不明の鉄製品の破片が1点出土したほか、北東角のピットの埋土中には、多数の土師器片が含まれていたが、その時期は不明である。唯一149が、建てられ

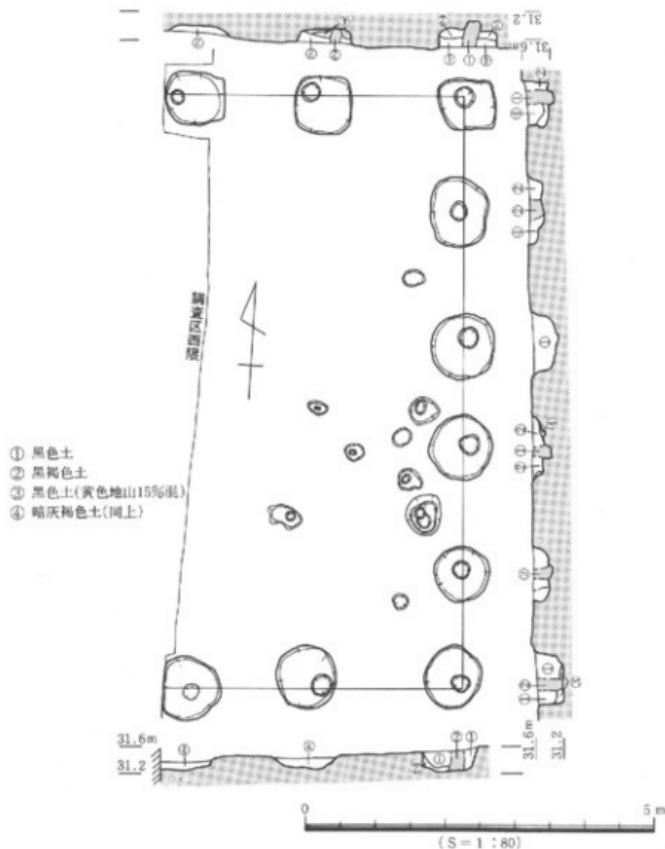


図66 掘立-5

た時期に近い段階の遺物である。破片のため詳細は不明であるが、概ね、6世紀末から7世紀初頭のものと考えられる。

これとはば同段階に所属する掘立-10などにおいても、鉄器が出土していることから、当該期の住居に鉄製品が伴う事実は、かなり普遍的な事項として認定できる。

掘立-17（図68、図版18・20） 梁間3間分、桁行4間、軸線の方向は梁間方向でN-3°-Wの東西棟である。梁間には柱穴の痕跡はまったく残されていない。浅かったため削平されて失われたものと推測されるが、この部分のみ礎石が用いられていた可能性も考えられる。同じグループに属する掘立-19の形状から判断して、前者の可能性が高いものと言えよう。

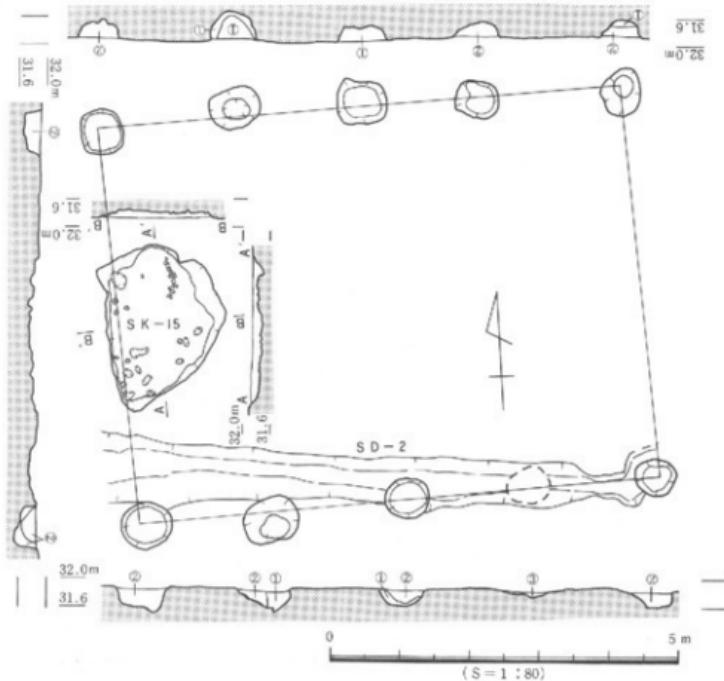


図68 掘立-17・SK-15



図67 掘立-5 出土遺物

柱穴の形状は概ね方形に近いものである。掘立-19と共に、掘立-22に後続する掘立-5の
脇殿的建物という評価を与えておきたい。なお、この掘立柱建物は、中世の区画溝である S
D-2 によって切られている。

掘立-19 (図69、図版20) 梁間3間、桁行4間、軸線の方向は梁間方向でN-8°-Eの東
西棟で、真北を基準としたSD-10に切られている。掘立-17と比較して、軸線の方向性が
かなり異なるものの、建物の位置関係、規模などから考えて、掘立-5を中心とするグル
ープに属することは確実と判断される。柱穴は方形のものもあるが、円形を主体とする。

掘立-23 (図70、図版20) 梁間3間、桁行3間以上、軸線の方向は桁行方向でN-2°-E
の南北棟である。各ピットの遺存状況は悪く、確認し得ないものもある。柱の掘り方は方形
に近いものが多い。掘立-5を中心としたグループに属するものと考えられる。

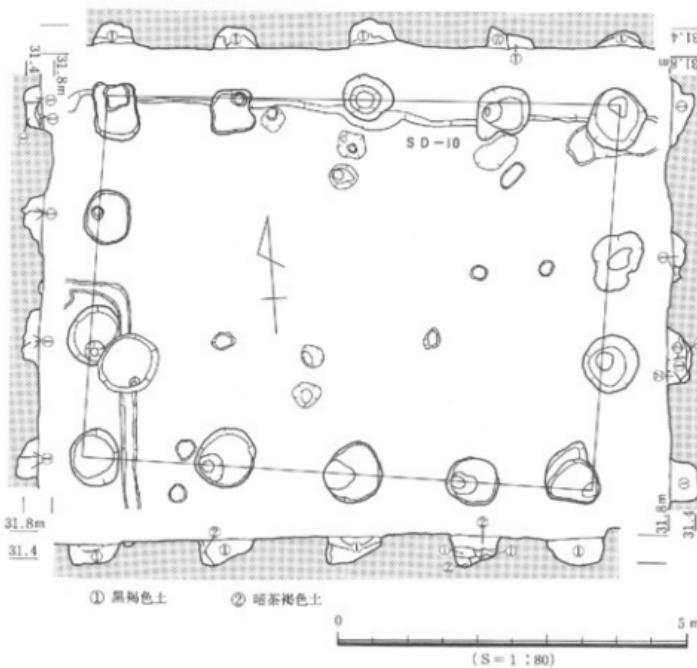


図69 掘立-19

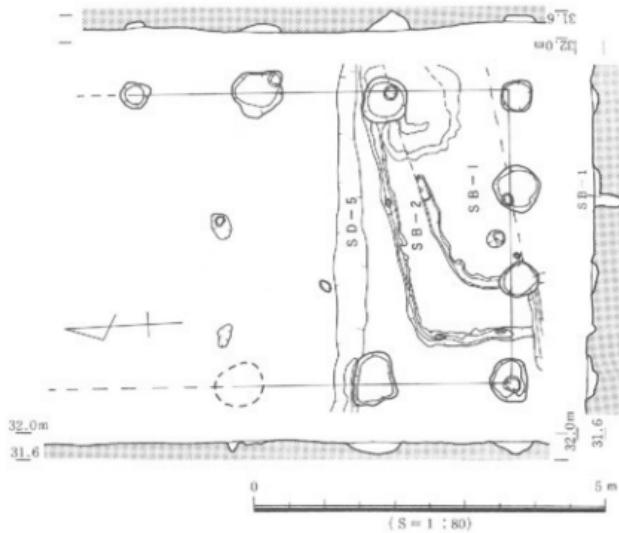


図70 掘立-23

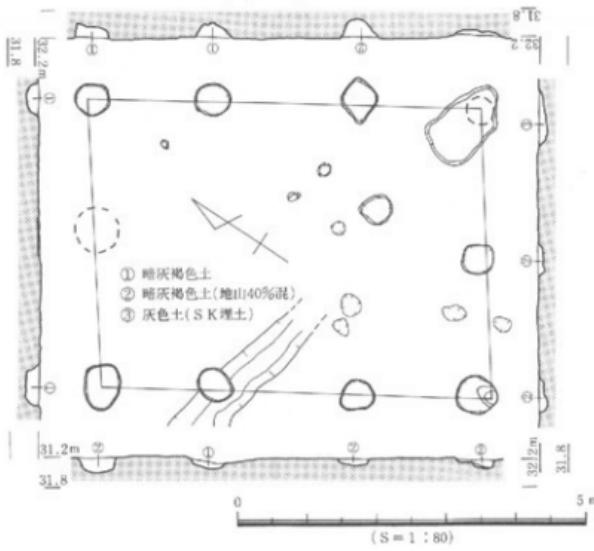


図71 掘立-13

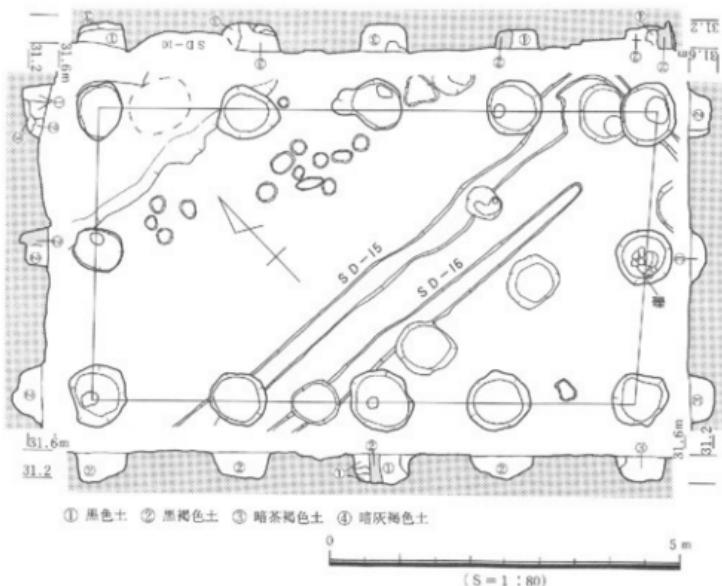


図72 掘立-15

掘立-13（図71、図版20） 梁間2間、桁行3間、軸線の方向は梁間方向でN-32°-Eの掘立柱建物である。ピットの一部は、SD-6などによって削平されている。北西壁中央のピットについては痕跡すら確認されていない。その方向性、平面形状などから、掘立-15、掘立-16とグループを形成するものと考えられる。

掘立-15（図72・73、図版20） 梁間2間、桁行4間、軸線の方向は梁間方向でN-44°-Eの掘立柱建物である。SD-10に切られる一方、掘立-20と掘立-19を切っている。また、中世の区画溝と考えられるSD-15とSD-16にも切られている。柱痕は部分的にしか確認できなかった。柱穴の掘り方は、方形に近いものが含まれている。

150と151は、柱穴中から出土した須恵器である。

150の形態は、掘立-20出土の117と比較すると、新

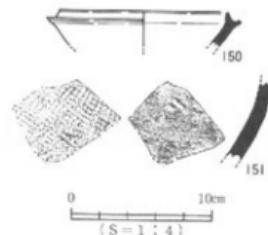


図73 掘立-15出土遺物

しい要素も認められる。この遺物の存在から、この遺構の所属年代の上限を7世紀の第1四半期に求めることが可能である。151は腰の胸部片であるが、叩き目の状況が掘立-2出土の61に類似している。5世紀の後半段階に属する遺物である可能性が考えられる。

掘立-16（図74、図版17・35） 梁間2間、桁行3間、軸線の方向は梁間方向でN-51°-Eの掘立柱建物である。ピットの一部はSK-20によって切られている。SK-20出土遺物の年代が、7世紀第3四半期を下限とする時期であることが明らかになっているので、この建物のグループは7世紀の中葉を下限とする時期に属するものと推測される。

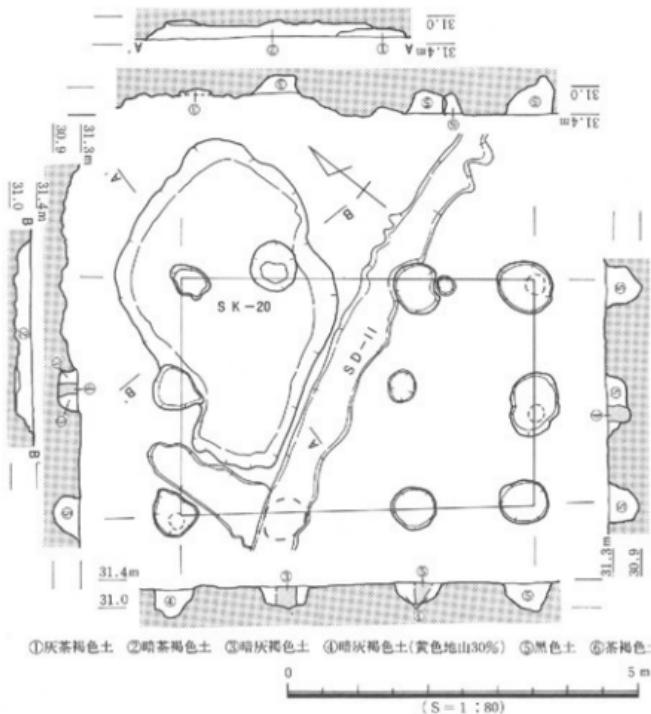


図74 掘立-16・SK-20

SD-10（図版75、図版12・33） 軸線の方向は、溝に直行する方向でN-5°-Eの区画溝である。この溝とSD-21は一連のものである状況が確認されている。2次調査によって、SD-10の延長部分が過去に確認されており、SD-24との接点から西へ約72mの所で南北方向の溝に接続する状況が認められている。このコの字形の区画の内部の状況はあまり明確ではないが、溝の形状から判断する限り何らかの区画施設である可能性が考えられる。この場合、近隣に存在する区画施設を伴う官衙関連施設との関係を想定する必要があろう。

溝の埋土は、黒色ないし暗茶褐色を呈し、重複関係を持つすべての掘立柱建物、竪穴住居を切っている。SD-10はその後東へ延長され、屈曲して、掘立-7の西、SD-31の北の地点に至る。この部分には、溝から約1m離れた位置に掘立-6と掘立-7が平行に建っている。この溝は区画施設としての性質の他に、掘立柱建物の排水施設としての機能も兼ね備えていたものと解釈できよう。

この溝からは、比較的多くの遺物が出土している。特に、東の屈曲部付近は遺物溜まりになっており、須恵器や土師器がまとまって出土している。152と153は、調査区中央部の15区から出土したものである。152は7世紀前葉、153は7世紀後半に属するものである。154から161は、15区の西隣の20区から出土したもので、161は弥生時代の遺物である。154は、152とはほぼ同段階のものであるが、155は7世紀中葉に属するものである。156は直口壺である。薄く丁寧に仕上げられている。157は壺であるが、口縁部内面にヘラ記号が認められる。158も壺であるが、軟質の焼きになっている。口縁部は直線的な形状をとる。159は158の胴部である。160は土師器の高杯の脚部である。この溝は、5世紀中葉のSB-5を切っていることから、混入した可能性が考えられる。7世紀代以降のものである可能性もある。

162から166は、東部の屈曲箇所からまとめて出土したものである。162は器種不明の須恵器である。口縁端部内面にかえり状の突起が付く点が特徴的である。蓋になる可能性もある。163は薄手の作りの壺の口縁部、164は壺ないし甕の底部である。165は高杯の脚部である。5世紀後半のものであろう。166は平瓶である。SD-21出土のものと比較すると、やや肩が張り、偏平な器形をしている。167は土師器の甕である。頭部は緩やかに屈曲し、綾長な胴部が特徴的である。内面には指頭圧痕が残され、粘土帶の接合痕跡を容易に観察することができる。時期は7世紀中葉以降と想定される。

SD-21（図76、図版8・18・36） 調査区中央部を南北に貫く溝で、掘立-10、掘立-11を切っている。軸線の方向はN-2°-Eで、SD-10に連結する部分を除いて、その北半部は水田の段差にともなう削平によって失われている。埋土の土色はSD-10に比べてやや黒みが強いが、土質そのものはほとんど同じである。先に述べた区画施設の東辺を形成するもので、その方向性は、後に続くSD-24（8世紀を上限）とSD-2（14～15世紀初頭を上限）に受け継がれていく。真北から東に2～4度振る方向性は、近隣の官衙関係施設の方向

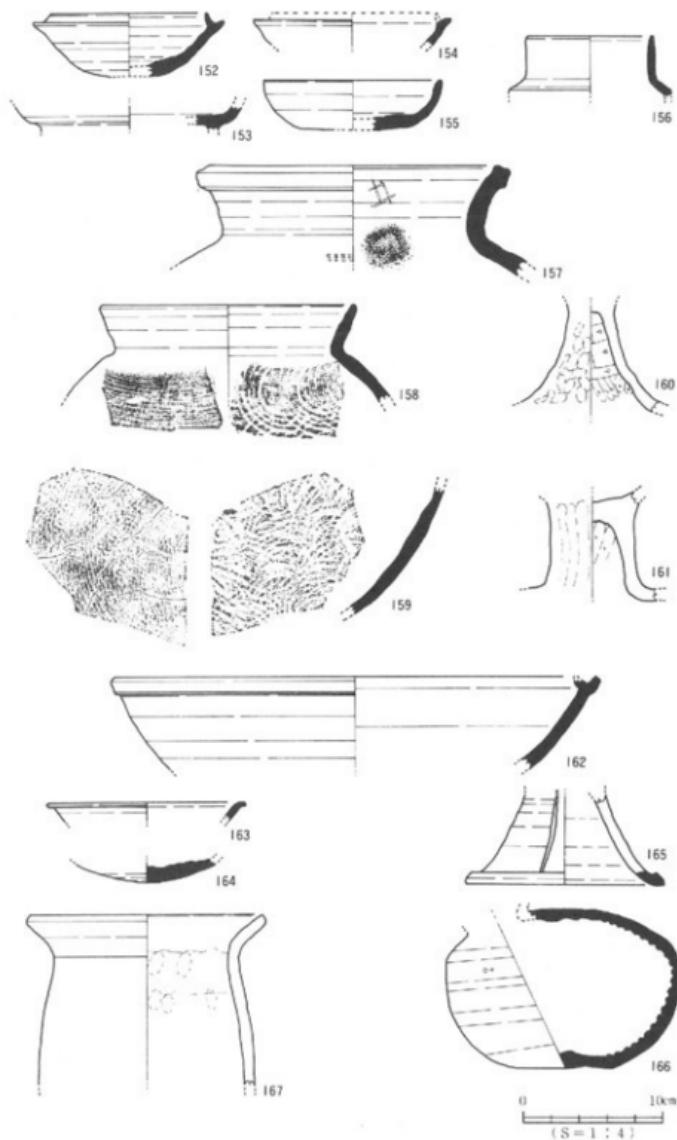


図75 S D-10出土遺物

性と一致するものであり、この区画溝の所属時期を考える上で注目すべき要素といえよう。

ちなみに、SD-21の掘り方西端のラインと、2次調査時の南北方向の溝の東端のラインの間隔は約71.2mで、これは高麗尺（約35.33cm）のおよそ200尺（201.5尺）に相当する。

I68は、7世紀第2四半期まで時期が下る可能性が考えられる須恵器の杯蓋である。I69は須恵器の平瓶である。口縁部を欠いているが、7世紀第2四半期に属する可能性が高いものとみられる。これらの遺物から、この遺構の年代は、7世紀第1四半期まで遡ることはなく、第2四半期を上限とするものといえる。

SD-29（図5、図版8） SD-21の東約0.4mに位置する溝である。水田の段差に伴う削平によって、その大部分はすでに失われているが、SD-10との分岐点と掘立一付近において僅かに残存している状況を確認した。本来はSD-21と平行な1条の溝であったものと考えられる。埋土の土色はSD-9同様、SD-10、21に比べて、やや明るい色調である。

SD-24（図77、図版8・36） SD-21、SD-29に平行な溝で、埋土の土色は中世のSD-2に近い暗褐色を呈する。方向はSD-21などと共に、拳大の角礫を多く含む。この埋土の特徴はSK-19と同様なものである。7世紀第2四半期を上限とするSD-21の堆積土と比較して明らかに異なり、その土質は中世の溝に近い性質を呈している。このことから、この溝の年代は、7世紀後半を上限とし、場合によっては、8世紀まで下る可能性もある。

I70は須恵器の杯身であるが、これは、SD-24のすぐ側の小ピットから出土したものである。I71は長頸壺の底部である。7世紀中葉を上限とする遺物である。I72は口縁部に波状文が施された壺の口縁部である。I73も、壺の口頭部である。口縁端部が玉縁状に肥厚している。この他にも、図化できない須恵器の破片が出土しているが、それらの形態から、概ね7世紀後半を上限とする遺構であると考えられる。

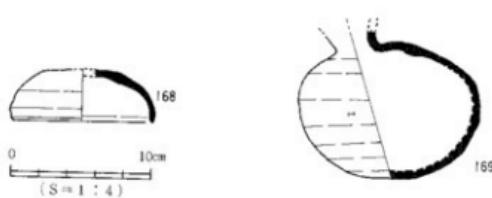


図76 SD-21出土遺物

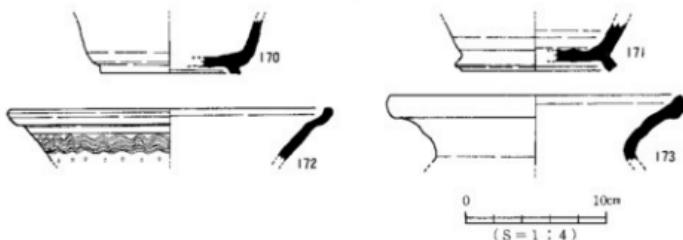


図77 SD-24出土遺物

SD-9 (図5、図版20) SD-10の北約3.6m、SD-10と平行に東西に走る溝である。SD-10に比べて浅く、幅も狭い。軸線の方向は、溝に直交する方向で、N-5°-Eであり、SD-10とはほぼ平行である。調査区西部において2条に分岐するが、この付近は削平を受けているため詳細は不明である。中世の区画溝であるSD-2によって切られた部分までしか確認できず、東端の位置は不明である。よって、断定はできないものの、SD-21と平行なSD-29と連結することによって、SD-10を北限とする区画施設に平行な、新たな区画施設を形成する可能性も考えられる。ちなみに、2次調査の際に、SD-9の延長部分を部分的に確認している。

SD-31 方向性から判断すると、掘立-10などに伴う可能性が考えられるが、確証はない。

掘立-6 (図78、図版10・11) 梁間2間、桁行3間、軸線の方向は桁行方向でおよそN-11°-Wの掘立柱建物である。いったん柱穴を掘った後、柱を建てる位置の関係から再度掘り足した状況が認められ、各ピットの形状は不規則なものとなっている。柱痕の認定は困難なもの、柱の下場が僅かに窪んでいることから、建物の形状を推定することが可能である。SD-10との位置関係から、区画溝の設定に先立つ9期後半には、掘立-6と掘立-7が建てられていたことが考えられる。

掘立-7 (図79、図版10・11) 梁間2間、桁行3間、軸線の方向は桁行き方向でおよそN-18°-Wの掘立柱建物である。掘立-6に比べて柱穴の形状は安定しており、方形に近いものも認められる。柱穴の残り具合は掘立-6に比べて良い。掘立-6との並存が想定される。

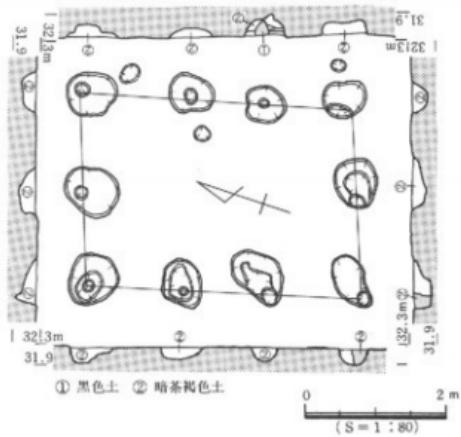


図78 掘立-6

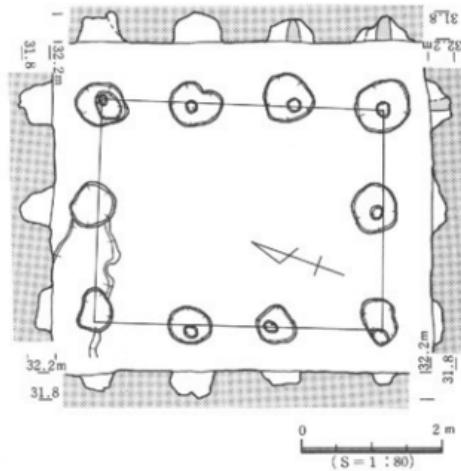


図79 掘立-7

掘立-21（図80、図版9） 梁間2間、桁行3間、軸線の方向はN-1°-Wの掘立柱建物である。各ピットの遺存状況は悪く、擾乱によってほとんど失われているものもある。僅かではあるが、掘立-18と掘立-12を切っている。切り合い関係と建物の方向性から、先に述べた区画施設に伴うものと考えられる。2間×3間の平面形状は、同時期と考えられる掘立-6と掘立-7とも共通するもので、この段階に先行する9期に属する掘立-13、15、16の形状を引き継いだものと理解できよう。

掘立-24（図81） 梁間不明、桁行3間、軸線の方向は桁行に直交する方向で、N-2°-Eの掘立柱建物である。南側の柱列は調査区外に存在するものとみられる。妻側の柱穴は検出されなかつたが、元々浅かったため、削平等によって失われた可能性が高い。建物の方向性などから掘立-21と同時期のものである可能性が考えられ、その場合、梁間は2間と考えて良かろう。柱穴の形状は不均一である。

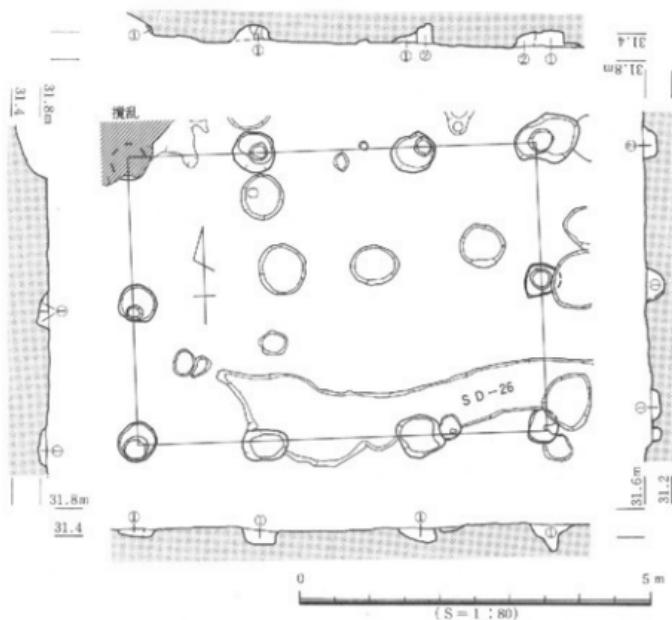


図80 掘立-21

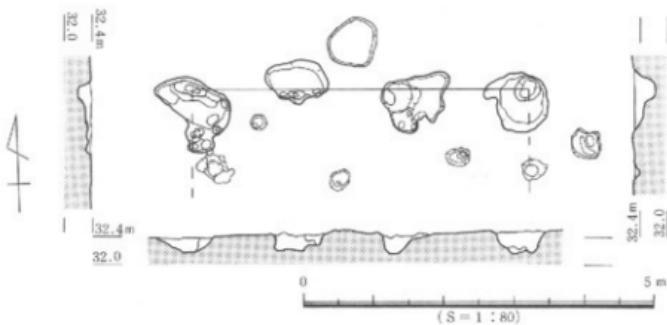


図81 掘立-24

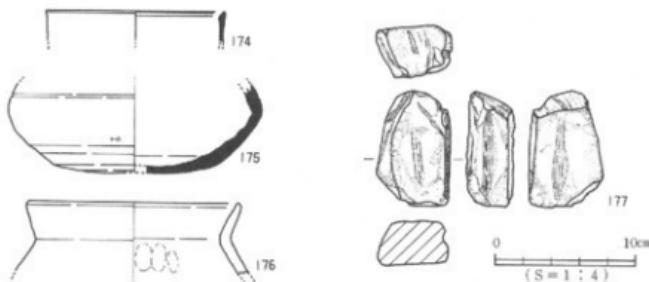


図82 SK-4 出土遺物

SK-4 (図82、図版19・34) 調査区の南西部、掘立12の北に位置する小規模な土壇である。深さは5cmほどしか遺存していない。堆積土は黒色土である。

174は、器種は不明であるが、初期須恵器の口縁部の破片であると考えられる。SB-9出土の高杯や甌と同様、口縁端部には明瞭な段が作り出されている。175は甌の胴部である。初期須恵器に伴うものではなく、時期が下ることが予想される。176は土師器の甌の口頭部で、内面には指頭圧痕が認められる。胴部がやや縱長になる器形を呈するものと考えられる。時期は、6世紀の後半期を上限とする可能性が高い。177は砂岩製の砥石である。この砥石は、SB-7出土の53とは異なり、玉砥石として認定され得るものである。

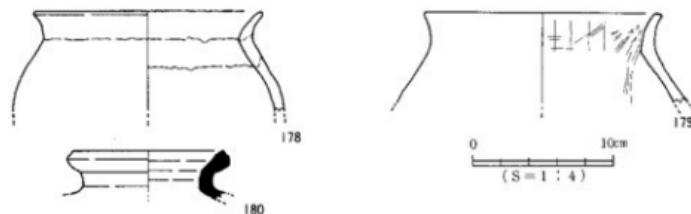


図83 SK-5 出土遺物

SK-5 (図83、図版1・34) SB-9の北西壁に接した位置にある土壌で、わずかに、SB-9を切っている。埋土は上下2層に分かれしており、土師器片が下層から出土している。178と179は土師器の縁である。179は磨きに近い丁寧なナデによって調整されているが、178は粗雑な作りで、粘土帯が容易に観察できる。180は須恵器の壺の口縁部である。これらの遺物は、6世紀後半以降の段階に属するものと考えられる。

SK-7 (図84、図版1) SB-9の西に位置する浅い土壌である。埋土は黒色で、SB-9とはほぼ同時期であると考えられる土師器が数点出土している。182は土師器の縁である。口縁部は摘み加減にやや外反しており、この特徴はSB-9出土の土師器と共通のものである。183も土師器の縁であると考えられる。底部外面には指頭圧痕が認められ、器壁は厚手である。181は6世紀末の須恵器の杯身の破片である。この遺物の存在によって、SK-7の年代の上限を、この時期に求めることができる。

SK-8 (図85・86、図版12・35) 調査区の南端に位置する土壌で、SK-9とともに掘立-18を切っている。SK-9を僅かであるが切っている。埋土は基本的に暗灰色を呈し、黄色の地山の土がブロック状に多く混じっている。埋土の土色で見る限りSK-9よりも新しい段階のものである可能性が高い。土壌の北西において灰と焦土が分布する範囲を確認した。これは、カマドそのものに伴うものではなく、竪穴住居のカマドの土を廃棄したもので

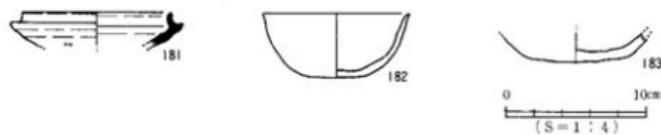


図84 SK-7 出土遺物

あると考えられる。このような、灰を伴うカマドはSK-2において検出されている。

184は、灰白色の須恵器杯身である。185は須恵器の長頸壺の底部である。杯身である可能性も否定できないが、内面の調整の状況などから、長頸壺である可能性が高い。いずれにしても、その時期は7世紀後半でおさえられる。

SK-9（図87、図版12） SK-8の西隣に位置する土壙である。大きさは、SK-8に比べて一回り小さい。埋土の土色はやや黒みが強いことから、SK-8に比べて古い段階に属する可能性も考えられるが、年代の決め手になる遺物に欠くことからはっきりしない。SK-8とともに、10期のゴミ捨て場と考えておきたい。

186は灰白色の須恵器の楕、187は土師器の甕の口縁部である。187は風化が激しいが、その形状はSK-5出土の178と共通している。186は丸底で、乳頭状の尖底になる器形のものである。焼成は不良である。この須恵器から判断する限り、7世紀中葉を上限とする時期に位置づけられよう。

SK-10（図88・89、図版19・35） SK-9の北西に位置する土壙である。埋土の土色は黒色で、SK-8、9と比較するとかなり黒味が強い。時期は、出土遺物から、8世紀を上限とするものと考えられる。

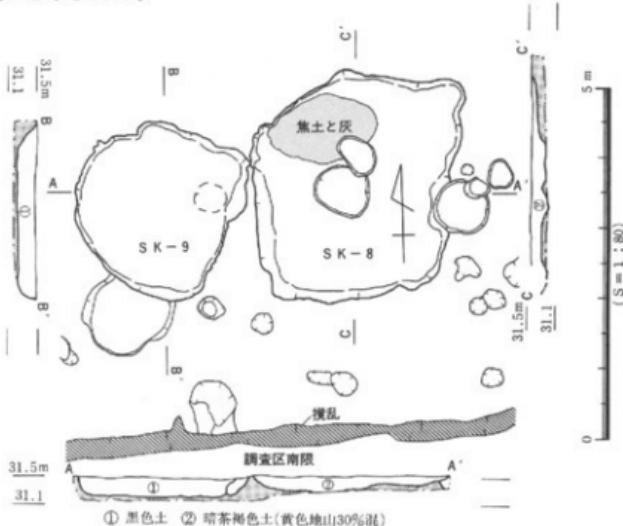


図85 SK-8・SK-9

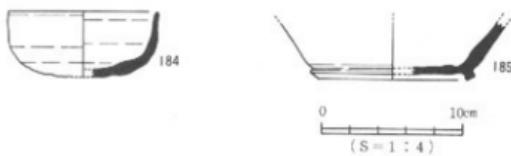


図86 SK-8 出土遺物

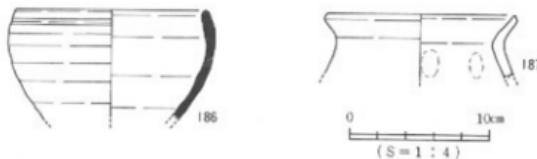


図87 SK-9 出土遺物

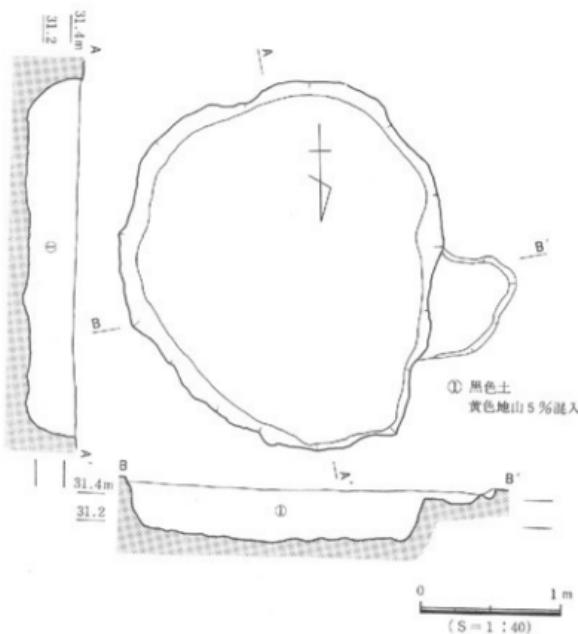


図88 SK-10

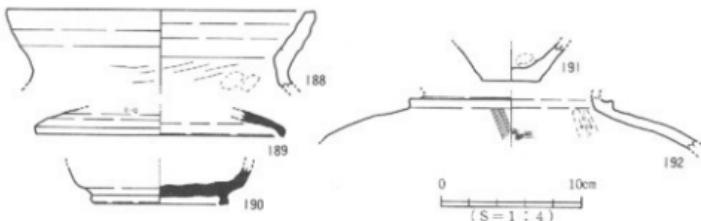


図89 SK-10出土遺物

188は土師器の甕の口縁部である。口縁部は厚手で、横方向に強く撫でつけることによつて生じた稜線が明瞭である。頸部内面には、指頭圧痕が認められる。8世紀代の厚手で胴部が継長な器形の甕である可能性が考えられる。189は須恵器の杯蓋、190は杯身である。ともに8世紀中葉から後半にかけての時期のものであると考えられる。191は弥生土器の底部である可能性が考えられる。内面に指頭圧痕が認められる。192は弥生後期の複合口縁の壺の頸部である。粘土の接合箇所で剥がれ、疑似口縁を呈する。ちなみにこの遺跡では、弥生時代の遺物は、この遺構出土のものを含めて数点しか出土していない。

SK-11(図90) 14区南東隅に位置する土壤である。堆積土の土色は黒褐色で、破片ながら比較的多くの遺物が出土している。調査進行上の都合により、完掘時の記録はない。深さは20cm程度であった。193はTK209の杯身である。受部の立ち上がり部分は非常に短い。

SK-21(図91、図版19) 方形の土壤であると考えられるが、搅乱によって大きく失われており詳細は不明である。埋土はSK-10と同じ黒色である。遺物が出土しなかつたため所属時期ははっきりしない。ほぼ垂直に近い掘り方が特徴的である。



図90 SK-11出土遺物



図91 SK-21・SK-27

S K - 27 (図91) S K - 21を僅かに切る小さな土壙である。埋土の土色はS K - 21に比べて明るく、暗灰褐色を呈する。遺物は出土していない。

S K - 22 (図92・93、図版35) 調査区の西壁沿いで確認された土壙である。埋土は黒褐色を呈している。出土遺物から掘立-20と同じ時期に属する可能性が考えられる。194は6世紀後葉頃の杯身である。

S K - 17 (図58・94、図版8) 掘立-10の柱穴を切り、SD-24によって切られている。掘り方東端において少量の焦土と鉄滓1点が確認された。SK-8同様、カマドの土が捨てられたものと考えられる。195は土師器の表である。6世紀末以降のものであろう。

S K - 14 (図95) 調査区の北端に位置する方形の土壙で、擾乱によって半分近くが失われている。堆積土は黒褐色で、196が出土している。破片であるため詳細は不明であるが、壺の口縁部ではないかと考えられる。調査進行の都合上、完擲時の記録を探ることができなかった。

S K - 20 (図96) 調査区南西隅に位置する土壙で、9期に属する掘立-16のビットを切っている。当遺跡としては比較的多くの遺物が出土している。堆積土は黒色である。

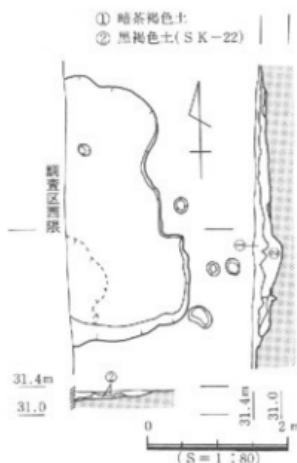


図92 SK-22

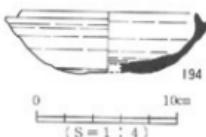


図93 SK-22出土遺物

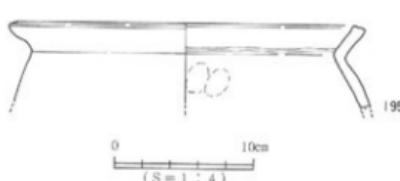


図94 SK-17出土遺物

197～201は須恵器の蓋杯である。199と200、201の3点は概ね7世紀の中葉に位置づけることができる。198については、6世紀の末まで遡るものかもしれない。202と203は楕形の器で、正確な形状は不明であるが、尖底に近い形態になる可能性も考えられる。口縁端部の形状に共通点が認められる。当遺跡において

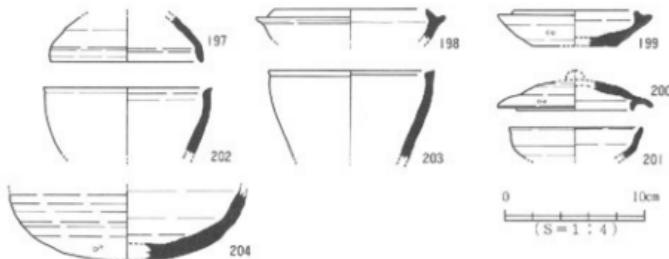


図95 SK-14出土遺物

では、6世紀末以降のSA-2など、複数の遺構から、同様の器種の破片が数点出土している。将来的には、当該期の基本的な器種として認定できるかもしれない。204は壺の底部であると考えられる。

これらの遺物から、この遺構は7世紀第2四半期を上限とするものと考えられる。したがって、SK-20に切られている掘立-16は、7世紀中葉以前の段階に位置づけ可能である。

SK-19 (図97、図版19) SK-10の西に位置する非常に浅い土壌で、SD-24同様角礫を多く含む。埋上の土色も暗灰褐色で、SD-24と共通である。この遺構からは遺物はまったく出土していないが、埋土の特徴等から、SD-24と同時期のものであろうと考えられる。



図97 SK-19

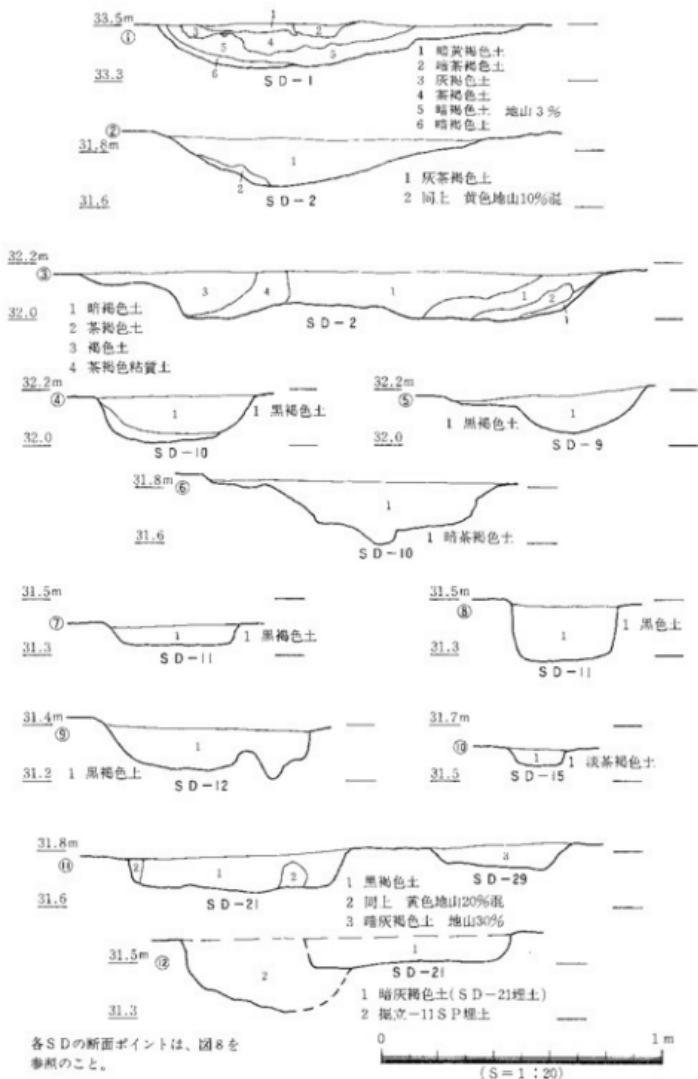


図98 S D断面図

S D - 18 中世の区画溝である S D - 2 の屈曲部分に位置する幅の狭い溝で、その埋土は黒褐色を呈している。この特徴は、古い時期に属する可能性があることを示すものと言える。遺物は出土していない。

S D - 13 (図5・8) S B - 6 の北に位置し、S D - 32によって切られる溝である。S D - 31を切っていることから、6期よりは新しい時期に属する可能性があるが、黒褐色の埋土であることから、10期以前のものであると考えられる。

S D - 32 (図5・8) S B - 9 の西の位置から南に続く溝で、1次調査の際にこの溝の延長部分を確認している。S A - 2 に切られるものと判断したが確証はない。埋土は概ね黒褐色である。南に位置する掘立-10と11を切ることから、7期以降に属するものと考えられる。

S D - 19 (図5・8) S D - 32から枝分かれして西にむかう浅く痕跡的な溝である。S A - 2、S D - 31などと平行であるが、詳細は不明である。S D - 32との切り合い関係もはっきりしない。埋土の土色は暗灰褐色である。

S D - 11 (図5・8・98・99、図版36) 調査区南西部の掘立-21の西に位置する溝で、擾乱によって切られている。S A - 2、S D - 26と何らかの関係があるかもしれないが、はっきりしない。205は須恵器の短頭壺である。肩部に施された一条の沈線が特徴的である。

S D - 26 (図5・100) 調査区南部のS D - 11とS A - 2 の延長線上に位置する溝である。水田に伴う削平のため、S A - 2 との関係は不明であるが、S D - 11とは連結しないことを確認している。

206と207は、ともに6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる須恵器の蓋杯である。この年代は、概ねS A - 2 の遺物と対応するものである。

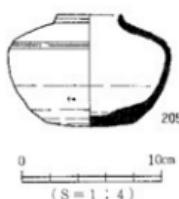


図99 S D - 11出土遺物



図100 S D - 26出土遺物

S D - 25 (図 5) S K - 21 によって切られている。埋土の土色は黒色に近く、S K - 21 と共通である。S D - 12 との関係は不明である。

S D - 22 (図 5・101、図版36) 調査区の南西端において僅かに確認することができた溝で、S D - 23 を切っている。埋土は黒褐色を呈している。208は6世紀末から7世紀初頭の蓋杯である。209は土師器の杯であるが、所属年代は不明である。

S D - 23 (図 5) 埋土の土色は黒褐色を呈している。S D - 22 同様、その性格など詳細は不明である。

S D - 12 (図 5・102、図版36) S D - 11 の北に位置する溝で、埋土は S D - 11 と同じ暗黒褐色を呈している。この特徴は10期以前のものであることを示しているが、他の遺構との関係など詳細は不明である。しかし、出土遺物から、およそその年代推定が可能である。

210は、土師器の高杯の杯部である。口縁端部は摘み加減に面取りされ、その直下に、横方向の浅い沈線がめぐる。また、かなり密な暗文の存在が特徴的である。割れ口は凝口縁状を呈している。7世紀後半以降のものであると考えられる。口縁部の形状については、畿内地域出土の資料と比較すると、やや異なっている。この点と、胎土が在地のものと変わりない点などから、畿内製品を模倣した在地の土師器である可能性も考えられる。松山平野においては、これまで当該期のこの種の高杯は確認されていない。

211は、須恵器の壺の口頭部である。口縁端部外面を斜めに面取りし、やや内傾気味に屈曲させた口縁端部の形状が特徴的である。肩部内面には、同心円状の当て具の痕跡が認められる。同様のものは、来住廃寺 5 次調査など、周辺の遺跡においても確認されている。概ね、7世紀第2四半期以降の時期のもので、210と共伴関係にあるものかどうか不明である。



図101 S D - 22出土遺物



図102 S D - 12出土遺物

5 中近世の遺構と遺物

SD-2 (図5・98・103、図版8・20・36) 中世の区画溝であり、同じく区画溝であるSD-15と同時期のものであると考えられる。一部、2条に分かれている所がある。埋土の土色は10期以前のものに比べて確実に明るく、当遺跡の遺構ではもっとも新しい段階のものである。遺物は少ないが、屈曲部分の南から、埋土の上面に食い込む形で、14世紀から15世紀初頭を下限とする時期の土師質の羽釜の脚部が3点出土している。このことから、廃絶の時期は中世段階以降であると考えておきたい。軸線の方向はN-1°-Eで、7期のSD-21以来の方向性をほぼ踏襲している。

212と213は、6世紀末から7世紀初頭にかけての時期の杯身である。214は壺の口縁部、215から217は中世の土師器羽釜の脚部である。羽釜はいずれも、SD-2の屈曲地点付近の堆積土上層から出土している。

SD-7 (図5) ほとんど遺物が出土していないため断定はできないが、埋土の土質、方向性などから、SD-2と同時期に属する可能性が考えられる。SD-2、SD-8に比べて浅く残りが悪い。

SD-8 (図5・104) SD-7同様、中世以降の段階の溝であると考えられる。掘立一の柱穴を切っている部分で西に屈曲している。同じく中世以降の溝であるSD-16と同一のもので、L字形の区画溝を形成する可能性も考えられるが、詳細は不明である。

218は須恵器の壺の口縁部であるが、時期は不明である。

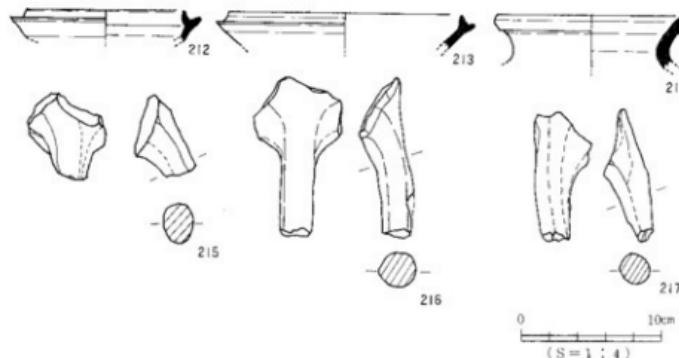


図103 SD-2 出土遺物



図104 SD-8 出土遺物

SD-16 (図5) 浅く痕跡的な溝である。SD-8と連結する可能性もあるが詳細は不明である。埋土の土質は中世以降の特徴を示している。

SD-1 (図5、図版22) 調査区北東部に、調査の直前まで存在していた用水路とほぼ平行に走る溝で、掘立-1、掘立-2の柱穴を切っている。瓦片などが少量出土しているが時期は不明である。埋土の土色、土質などから中世以降の段階に属するものと考えられる。

SD-3 (図5、図版22) SD-1とほぼ平行に走る溝で、ほとんど現在の用水路と重複している。SD-1と同様の性格を持つ溝であろう。

SD-5 (図5) 調査区北端を西流する溝で、おそらくSD-3と同一のものと考えられる。水田の段差に伴う削平を受けているため依存状況は悪く、深いところで5cmほどでしかない。

SA-1 (図5) SD-5と平行な溝である。4間分を確認したが、調査区外に延びる可能性もある。暗茶褐色の埋土はSD-5と同じものである。直径10cmほどの柱痕が比較的容易に確認できた。方向性などから、中世以降のSD-5に伴うものと考えられる。

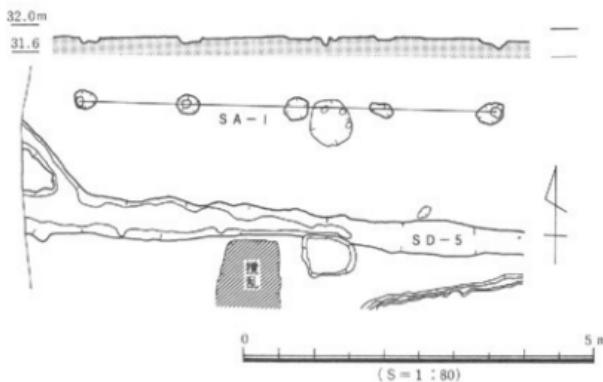


図105 SA-1

S D - 4 (図5、図版21) 調査区東部を西流する溝で、S D - 1に切られている。時期は不明であるが、掘立-2と掘立-3の柱穴を切っている。

S D - 6 (図5) S D - 4と同一の溝であると考えられるが詳細は不明である。水田に伴う削平のため残りは悪い。埋土の特徴から中世以降の段階に属することは確実である。

S D - 27 (図5) 掘立-7、S D - 13などを切る溝であるが、その性格は不明である。

S D - 17 (図5) 浅く痕跡的な溝で、詳細は不明である。埋土の状況などから、S D - 2と同じ中世段階のものと考えられる。

S K - 24 (図106・107、図版14・35) 土壙墓である。埋土の下部において人骨が粘土化したものを見た他、土壙北端において、底面からかなり浮いた位置から17世紀前半の有田焼の皿が1点出土した(219)。これは棺上に供されたものと考えられる。削りだし高台を伴い、内面には全面的に、外面には上半部のみ乳白色の釉がかかっている。

S K - 23 (図107) S K - 24同様、土壙墓であると考えられるが、掘り方の深さが非常に浅く詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

S K - 25 (図5) これも土壙墓である。調査区中央部に位置するこの土壙は、擾乱によって上面が削

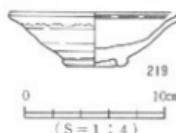


図106 S K - 24出土遺物

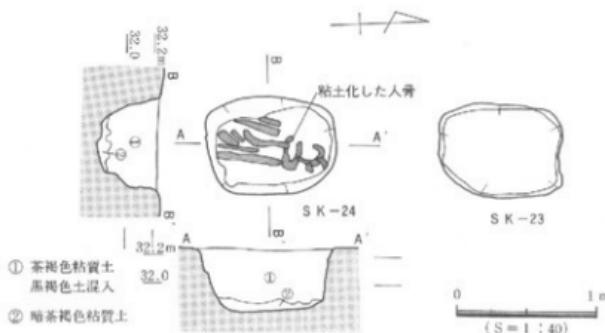


図107 S K - 24・S K - 23

平を受けている。調査進行の都合で掘りあげるには至っていない。検出時に古銭が1点出土しているか詳細は不明である。形状等からSK-24などと同時期の墓であると考えられる。

便所-1・便所-2(図5) 調査区北東端でSD-3を切っている遺構で、ともに便所と考えられる。ほぼ円形の便所-1を隅丸方形の便所-2が切っている。両者とも掘り方の内側を厚さ5cmほどの黄白色の漆喰によって固められている。調査進行の都合上、調査は行わなかった。

野壺-1(図5) 調査区西部でSD-10を切っている遺構で、野壺ではないかと考えられるものである。便所-1、2とは異なり漆喰は認められなかった。調査進行の都合で調査は行わなかったため、その詳細は不明である。

6 遺構に伴わない遺物

遺構検出作業中に出土した遺構に伴わない遺物の概略を記す(図4・108~120、図版37)。220は4区出土の青磁碗の底部、221は8区の調査区東壁近くから出土した土師質の杯蓋である。221は、カマドの残骸である可能性も考えられる焦土が密に分布する部分から出土している。8世紀後半以降のものであろうと考えられる。222と223は7区から出土した。223は中世の土師器羽釜の口縁部である。突帯と口縁端部が一体化しており、15世紀前半に属するものであろうと考えられる。

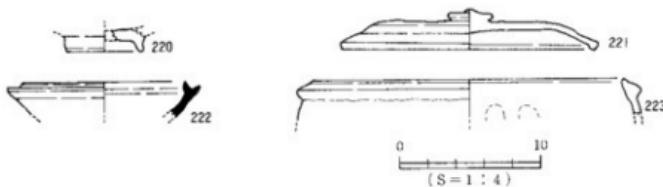


図108 4区・7区・8区出土遺物



図109 11区出土遺物

224と225は11区から出土したものである。石庵丁に関しては、遺存している側の穴の左右に、小さな窪みが認められる点が特徴的である。石材は砥部川流域で産する緑色片岩が用いられている。225はTK217後半期の杯蓋である。かえりは口縁端部の内側に隠れている。

226と227は13区から、228から232は14区から出土した須恵器である。11区出土の225などを含めて、当該区域においては、TK217に属する須恵器が比較的目につく。特に、口縁部にかえりを持ち、宝珠摘みが付けられるタイプの杯蓋は、11区、14区と15区においてしか確認されていない。このことは、7世紀第2四半期から中葉頃に位置づけられている掘立-13および6、7の存在と無関係ではないかもしれない。

233は、18区、234は24区から出土したものである。233は短頭壺の蓋になる可能性がある。234は滑石製の有孔円板である。表面はよく研磨されており、側面は多角形に面取りされている。もとは、5世紀の遺構に伴うものであった可能性が高い。235から237は、19区から出土したものである。235は7世紀後半期、236は甌の口縁部である可能性も考えられる。237は土師器の高杯の脚部である。5世紀中葉のものであろう。



図110 13区出土遺物

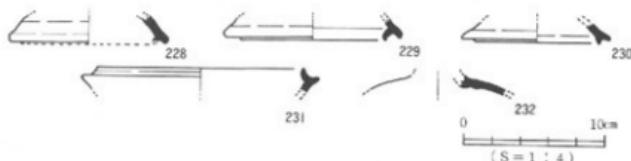


図111 14区出土遺物

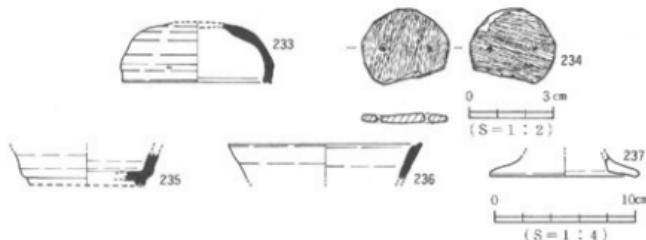


図112 18区・24区・19区出土遺物

238から241は15区から出土した遺物である。238については蓋であるとの判断を下したもの、杯身である可能性も考えられる。240は8世紀まで下る杯蓋の摘みである。241は小型の直口壺で、薄手に仕上げられている。肩部がくの字形に屈曲する点が特徴的である。

242から247は、16区から出土したものである。245は5世紀中葉から後半の土師器高杯の脚部、247は青磁碗の底部である。246はT K 217の短脚高杯、244は8世紀まで下る杯身である。242と243は、6世紀後半から7世紀初頭頃のものであろう。

248から253は、17区から出土した。250は土師質の高台付杯の底部である。8世紀の後半期まで下るものと考えられる。248は7世紀前葉、249は杯身の底部である。251についても、7世紀中葉に属する高台付杯である可能性が高い。252は、8世紀の肩が張らないタイプの長頸壺であろう。



図113 15区出土遺物

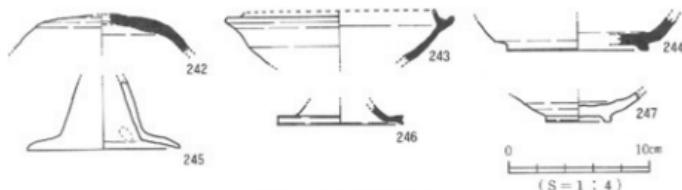


図114 16区出土遺物

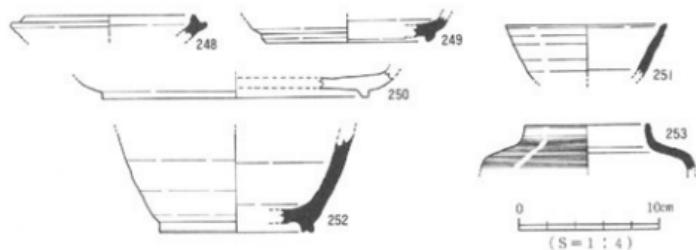


図115 17区出土遺物

254から256は22区、257は12区、258は27区から出土したものである。254は251と同様の杯身であろう。255は7世紀後半以降の杯身底部、256は7世紀中葉の壺の頸部である。257は8世紀後半まで下る大型の杯身もしくは皿の底部である。258は小壺であるが、6世紀後半から7世紀前半段階のものであろう。

以上のように、17区、22区をはじめとする当該地の南辺区域においては、7世紀中葉以降、8世紀まで下る遺物が多く出土している。これは、掘立-24、S K-8~10、S D-24などの存在を反映したものであろう。当該区域については、他の区域と比較して黒色の包含層の残りが比較的良かったが、これらの遺物の多くは、その上面ないし層中から出土したものである。徹底した精査を行えば、地山面に到達する以前に、これら7世紀後半期以降の遺構検出が可能であったかもしれない。

259~262は、20区から出土した須恵器である。261は長頸壺の底部であろうと考えられる。17区出土の252と同様の形状をとるものであろう。262は大壺の口縁部であるが、時期は不明である。

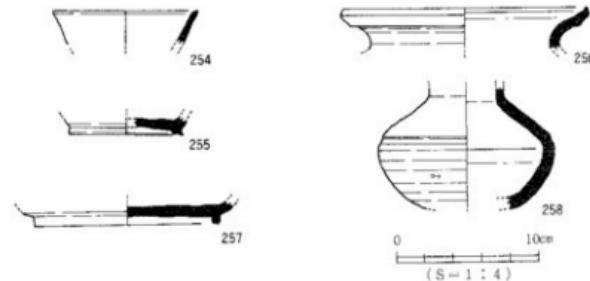


図116 22区・12区・27区出土遺物

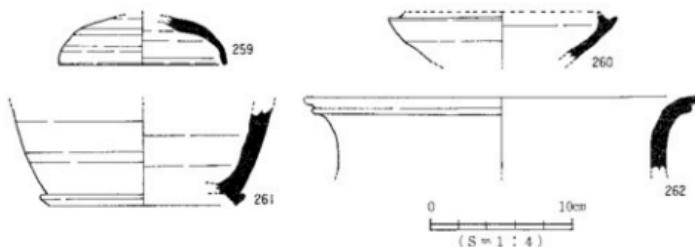


図117 20区出土遺物

263と264は、25区出土の遺物である。263は土師器碗である。白色の精製された胎土が特徴的である。

265から267は21区、268は26区から出土した。須恵器は概ね6世紀末から7世紀初頭頃のものである。267は、土師器の斐の口縁部である。7世紀代に属するものであろう。

269から274は、出土地点が明確でない遺物である。271は土師器の杯である。摩滅のため調整は不明である。7世紀中葉以降に属するものと考えられるが、詳細は不明である。SD-12の210と関わりがあるのかもしれない。273は須恵器の破片を研磨することによって、円盤形に整えたものである。用途は不明である。270は須恵器の長頸壺の底部、274は背磁碗の底部である。



図118 25区出土遺物



図119 21区・26区出土遺物

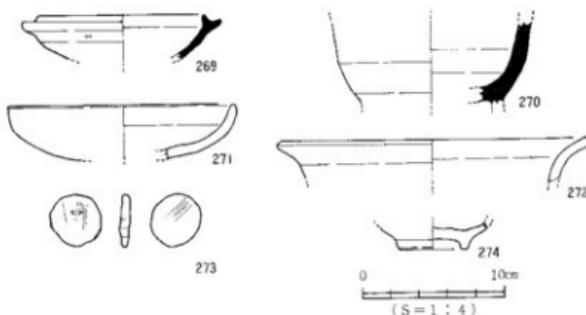


図120 出土地点不明の遺物

7 倒木痕跡

時期は明確でないが、当調査地において多数の倒木の痕跡を確認した。この「遺構」は、これまでにも周辺の遺跡においてたびたび検出されていたのだが、どのような「遺構」であるのかその性格は不明であった。今回、当遺跡の調査に際して、自然科学分析を含む詳細な観察を行った結果、風などの影響で倒れた木の根元の痕跡であることが判明した。当初は遺構であるとの判断のもと、調査の対象としたが、後にこれが考古学で言うところの遺構には該当しないとの判断を下した時点で、調査進行の都合もあって詳細な調査は打ち切ることとした。そのため、当遺跡における倒木痕跡の情報をすべて記録に残すことはできなかった。丁寧に精査を行うと、無数の倒木痕跡が検出されるため、すべてについて同一条件の元に記録をとることができない状況であったので、配置図の提示は行わない。この「遺構」に関する具体的な報告を行うには、いかなる過程を経て倒木の痕跡と認定するに至ったのか、自然科学分析の成果もふまえてその過程を詳細に述べる必要が生じる。当然、過去における他地域における調査事例、研究成果を考慮する必要もあり、当遺跡の状況を述べるだけでは不十分である。よって、具体的な内容は「第3章　まとめ」に盛り込むこととしたい。

8 出土遺物観察表

表1に旧石器、表2に石製品、表3に土製品に関する観察結果をまとめておく。

Ⓐは須恵器、Ⓑは土師器、Ⓒは軸部を意味する。色調は新版標準土色帖 1989年版による。焼成に関しては、良好○、普通○、やや不良△、不良×の4段階に分けて記入した。備考には法量を計測したものについて、破片の大きさを記入した。各番号は、本文中及び図版の遺物番号と対応している。なお、磯、砥石に関しては、表を省略した。

表1 石器観察表

番号	器種	石材	残 在				備 考	出土地
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)		
1	ナイフ形石器	赤色頁岩	49.0	16.3	3.9	4.36	先形	11区A S-13グリッド地山直上
2	石核	赤色頁岩	35.3	26.2	3.1	6.08	一部欠損	15区地山直上
3	刮片	頁岩	27.1	32.6	4.1	5.14	タール状付着物	15区地山直上

表2 石製品観察表

番号	器種	石材	残 在					備 考
			長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	穴の径 (mm)	
40	石包丁	緑色片岩	65.3	48.3	5.7	33.3	8.8- 3.0	-
288	有孔刃板	滑石	30.7	24.8	3.0	4.35	1.8- 1.6	-

表3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外側)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
4	④ 風	口径 11.2 器高 15.8 底径 17.8	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ 底部指捺痕	内 オリーブ灰色 (25GY 5/1) 外 灰色ない、暗い褐色 (N 6/0-N 3/0)	径0.5mm-1mm程度の中砂を多量に含んでおり、直径0.5-1mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	はは光形	
5	⑤ 高杯	口径 18.8	回転ヘラケズリ 回転ナデ 波状文	回転ナデ	内 灰色(5Y 5/1) 表面 暗赤色 (2.5YR 5/2) 外 対青色ないし青灰色	径0.2-0.5mm程度は白色細砂が多く、また径0.5-1mm程度の中砂、径1-2mm程度の粗砂を少量含んでいる。 ◎	脚部は円方向に台形しない長方形のすきが入る。	
6	⑥ ?	口径 13.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.2-0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	口縁部 剥取り 1/32	
7	⑦ 留台	—	波状文 2半位	回転ナデ	内 灰色(7.5Y 5/1) 外 灰色(7.5Y 4/1)	径0.3-0.5mm程度の白色細砂を多量に含んでいる。 ◎		
8	① 高杯	口径 14.8 器高 13	回転ナデ	ナデ ヘラケズリ	内 棕色 (5YR 6/8) 外 棕色 (5YR 7/6)	径0.3-0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	内外面付 帶物 7/8	
9	② 高杯	口径 14.8 底径 11.3 器高 12.8	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	内 にじむ褐色 (5YR 6/4) 一部深褐色5YR 8/3 外 にじむ褐色 (5YR 6/4)	径0.5-1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる。径4mm程度の細砂も含んでいる。 ◎	S P 中	
10	③ 高杯	口径 12.8	回転ナデ	回転ナデ	内 にじむ黄褐色 (10YR 7/4) 外 にじむ黄褐色 (10YR 7/4)	径0.3-0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。径3mm程度の黒色細砂を少量含んでいる。 ◎	1/8	
11	④ 高杯	口径 13.6	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (2.5YR 6/8) 外 棕色 (5YR 7/6)	径1-2mm程度の白色細砂を少量、径0.3-0.5mm程度の白色細砂を多量に含んでいる。 ◎	カマツ内 1/5	
12	⑤ 高杯	底径 10.4	—	—	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.1-0.5mm程度の白色細砂を多量、径1-2mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	マツツ 1/3	
13	① 高杯	底径 11.8	ナデ	ナデ ヘラケズリ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	2/5	
14	④ 高杯	口径 12.6	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色(5YR 6/6) 外 棕色(5YR 6/6)	径1-2mm程度の白色細砂を含み、径0.3-0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	1/5	
15	④ 高杯	口径 10.4	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (7.5YR 6/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.3-0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	1/9	
16	⑤ 高杯	口径 14.8 底径 12.2	ナデ	ナデ	内 にじむ黄褐色 (10YR 7/4) 外 明黄色 (10YR 7/6)	径0.2-0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。径1-2mm程度の石英、長石を多く含んでいる。 △	一部欠損	
17	⑥ 高杯	—	ナデ	ナデ 破り底跡	内 にじむ褐色 (7.5YR 7/4) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	径0.3-0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 △		
18	⑦ 高杯	口径 12.4	ナデ	ナデ	内 棕色 (5YR 7/6) 外 棕色 (5YR 7/6)	径0.5-1mm程度の白色中砂を少量、径0.2-0.3mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	段付剥 1/6	

表3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
19	② 高杯	—	ナデ	ナデ	内 に赤い褐色 (7.5YR 7/3) 外 紅色 (7.5YR 7/6)	径0.5mm~1mm程度の白色粗砂を多量に含んでいる。 ◎	段有り	
20	② 高杯	口径 12.2	圓転ナデ →ミガキ	圓転ナデ 一部ミガキ	内 褐色(5YR 6/8) 外 褐色(5YR 6/8)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を少量含んでいる。 ◎ 精製土	1/6	
21	② 高杯	—	ナデ	—	内 紅色(5YR 7/4) 外 褐褐色(5YR 8/4)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
22	① 高杯	—	ナデ	ナデ	内 淡黄褐色 (7.5YR 8/4) 外 に赤い褐色 (7.5YR 7/4)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
23	② 高杯	—	ナデ	ナデ	内 褐色(5YR 7/6) 外 褐色(5YR 6/6)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
24	① 高杯	—	—	—	内 淡黄褐色 (7.5YR 8/3) 外 紅色 (7.5YR 7/6)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
25	④ 壺	口径 17.6	ミガキ	圓転ナデ 指彌江瓶	内 紅色(5YR 7/6) 外 に赤い褐色 (5YR 7/4)	径0.5mm程度の粗砂を含んでいる。 ◎	1/3	
26	④ 高杯	底径 18.6	ナデ	ナデ	内 貝殻色および褐色 (7.5YR 7/8~ 2.5YR 6/8) 外 褐褐色 (7.5YR 7/8)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/5	
27	④ コシキ	—	ナデ	ナデ	内、外 褐色および明褐色 (7.5YR 6/6~ 7.5YR 5/6) 断面 黑褐色 (7.5YR 3/1)	径2~3mm程度の白色粗砂を少量、径0.5~1mm程度の白色粗砂と径0.2~0.3mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	把手	
35	④ 高杯	口径 約14	ナデ	ナデ	内 褐色 (7.5YR 7/6) 外 褐色 (7.5YR 7/6)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂ないし径2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/10	
36	④ 高杯	口径 15.4	ナデ →タテハケ	ナデ	内 に赤い褐色 (5YR 7/6) 外 褐色 (5YR 5/8)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を少量、径0.2~0.3mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/9	
37	④ 壺	口径 18.6	圓転ナデ 波状文	圓転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 灰色 (N 5/0)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/7	
38	④ 杯盤	口径 約12	圓転ナデ	圓転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/8	
39	④ 壺	口径 16.4	ナデ	ナデ	内 に赤い黄色 (10YR 7/4) 外 に赤い褐色 (7.5YR 6/4)	径1~2mm程度の白色粗砂ないし径2~3mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/10	
40	④ 高杯	口径 12.8	ナデ	ヘラケズリ →ナデ	内 淡黄褐色 (7.5YR 8/4) 外 淡黄褐色 (7.5YR 8/4)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/14	

表3 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (内面) (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
41	④ 瓢	口径 12.2	ナデ	ナデ	内 にふい褐色 (7.5YR 7/4) 外 棕色および褐色(5 YR 6/8~5YR 3/2)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量、徑 0.2~0.3mm程度の白色細砂を多量に含んで いる。	1/10	
42	④ 高杯	口径 約14	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色およびにふい褐色 (5YR 6/6~ 10YR 7/4) 外 棕色および褐色 (5YR 7/6~ 7.5YR 8/4)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含 んでいる。 ◎	2/5	
43	④ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでい る。 ◎		
44	④ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 にふい褐色 (7.5YR 7/4) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでい る。 ◎		
45	④ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 棕色 (7.5YR 6/8) 外 棕色 (7.5YR 6/8)	径0.5mm程度の白色細砂ないし径2mm程 度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
46	④ 高杯	—	⑥ハケメ →ナデ	ナデ	内 にふい褐色 (7.5YR 7/4) 外 にふい褐色 (7.5YR 7/4)	径0.5~1mm程度の白色中砂ないし径1 ~2mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎		
47	④ 高杯	底径 11.2	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ◎	1/8	
48	④ 壺	口径 19.2	ナデ	ナデ	内 棕色およびにふい褐色 (2.5YR 6/6~ 10YR 7/4) 外 明赤褐色 (2.5YR 3/8)	径1~2mm程度の白色粗砂と径0.5~1mm 程度の白色中砂を多量に含んでいる。 石英、長石を含んでいる。 ◎	2/5	
49	④ 壺	口径 21.2	回転ナデ	回転ナデ	内 にふい褐色 (7.5YR 7/4) 外 にふい褐色 (7.5YR 7/4)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎	1/8	
50	④ 壺	銅径 14.8	ナデ	ナデ	内 棕色および黒褐色 (2.5YR 6/6~ 7.5YR 2/2) 外 棕色およびにふい褐色 (2.5YR 7/6~ 7.5YR 7/4)	径0.2~0.5mm程度の白色細砂を多く含ん でいる。 ◎	3/5	
51	④ 壺	口径 8.8	ハケメ 回転ナデ	ハケメ →ナデ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多く含ん でいる。表面が少しきずされている。 ◎	1/5	
54	④ 高杯	口径 14.4 脚高 12.5	回転ナデ セラフケズリ	回転ナデ セラフケズリ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕褐色 (7.5YR 8/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでい る。 ◎	1/2	
55	④ 高杯	口径 14.6	L字状のナデ	回転ナデ	内 深赤褐色 (10YR 6/4) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ◎	1/9	
56	④ 高杯	底径 11.2	マメツ	マメツ	内 にふい褐色 (10YR 7/4) 外 にふい褐色 (7.5YR 5/4)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を多く含ん でいる。 ◎	1/8	

表3 出土遺物観察表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
57	⑤ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 棕色(5 YR 7/6) 外 棕色(5 YR 6/6)	径0.5~1mm程度の白色粗砂ないし径1~2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
58	④ 高杯	—	回転ナデ	回転ナデ 一部ヘラ	内 棕色 (2.5 YR 7/6) 外 棕色 (2.5 YR 6/6)	径1~2mm程度の白色粗砂ないし 径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
59	⑥ 大甌	—	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(3 Y 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 内 3~0.5mm程度の黒色粗砂も少量含んでいる。 ◎		
60	⑦ 甌	—	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(5 Y 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 内 3~0.5mm程度の黒色粗砂も少量含んでいる。 ◎		
61	大甌	—	タキ	円窓のあて鼻孔跡	内 棕色 (7.5 Y 5/1) 外 棕色 (7.5 Y 5/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎		
62	⑧ 杯蓋	口径 11.6	回転ナデ	回転ナデ	内 黄色 (X 7/0) 外 黄色 (X 6/0)	径0.5mm程度の白色粗砂を多く含み径1~2mm程度の白色中砂を少量含んでいる。	1/6	
63	⑤ 高杯	口径 19.4	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (5 YR 7/6) 外 棕色 (5 YR 7/6)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/7	
64	① 高杯	口径 17.7	回転ナデ	回転ナデ ハケメ	内 棕色 (7.5 YR 6/6) 外 に赤褐色 (7.5 YR 7/4)	径0.2~0.5mm程度の白色粗砂を少量、径0.5~1mm程度の白色中砂を少量含んでいる。石英、長石も含んでいる。 ◎	1/3	外周に一部すが付着している
65	⑦ 高杯	—	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (5 YR 7/6) 外 棕色 (5 YR 6/8)	径0.1~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/20	
66	④ 高杯	—	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (7.5 YR 7/6) 外 に赤褐色 (7.5 YR 7/4)	径0.2~0.3mm程度の白色粗砂を少量含んでいる。 ◎	1/20	
67	① 高杯	口径 約14	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (7.5 YR 6/6) 外 棕色 (7.5 YR 6/6)	径0.2~0.5mm程度の白色粗砂を少量含んでいる。 ◎	1/13	
68	④ 高杯	口径 約13	回転ナデ	回転ナデ	内 に赤褐色 (7.5 YR 6/4) 外 棕色 (7.5 YR 6/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎	1/16	
69	④ 甌	口径 10.8	ナデ	—	内 棕色 (7.5 YR 7/6) 外 棕色 (7.5 YR 7/6)	径0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/6	
70	⑤ 高杯	—	—	ナデ	内 実褐色 (7.5 YR 8/8) 外 実褐色 (7.5 YR 8/8)	径0.3~0.5mm程度の粗砂を含んでいる。 ◎	—	
71	⑤ 高杯	—	ナデ	ヘラケズリ →ナデ	内 棕色 (5 YR 6/6) 外 棕色 (5 YR 6/6)	径1mm程度の中砂を含んでいる。 ◎	—	

表3 出土遺物観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (内面) (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
72	④ 高杯	—	ミガキ状のナテ	ヘラケズリ →ナテ	内 にふい褐色 (5YR 6/4) 外 棕色 (5YR 6/6)	径1mm程度の小砂を含んでいる。 ○	粗フクタニ	
73	⑤ 高杯	底径 10.6	ナテ	●:ヘラケズリ 回転ナテ	内 棕色 (5YR 6/6) 外 明赤褐色 (5YR 5/6)	径0.3~0.5mm程度の細砂を含んでいる。 キメが細かい。 ○	1/10	
74	④ 高杯	底径 10.4	—	●:ヘラケズリ —	内 貫褐色 (10YR 7/6) 一部 黒褐色 (10YR 3/1) 外 制黄褐色 (10YR 6/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ○	1/8	
75	④ 高杯	—	ミガキ状のナテ	●:ヘラケズリ 回転ナテ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 にふい褐色 (10YR 7/4)	径0.5mm程度の細砂を含んでいる。 ○	—	
76	① 高杯	底径 12.8	回転ナテ	ヘラミガキ 回転ナテ	内 棕色 (7.5YR 6/6) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	キメが細かく白色細砂を含んでいる。 ○	1/10	
77	① 高杯	底径 14.8	ナテ	●:ヘラケズリ 回転ナテ	内 にふい褐色 (7.5YR 7/4) 外 にふい褐色 (10YR 7/4)	白色細砂を含んでいる。 ○	1/6	
78	④ 高杯	底径 10.4	ミガキ状のナテ	●:ヘラケズリ 回転ナテ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	径0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ○	1/7	
79	④ 高杯	底径 9.8	ミガキ	ミガキ状のナテ	内 にふい・黒褐色 (10YR 7/4) 外 明黄褐色 (10YR 6/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ○	1/9	
80	④ 盆	—	ヨコナテ	ナテ 指印压痕	内 制黃褐色 (10YR 4/2) 外 にふい・黒褐色 (10YR 6/4)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ○		
81	④ 盆	—	ナテ	ナテ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ○		
82	④ 高杯?	底径 16.2	回転ナテ	回転ナテ	内 灰色 (N 6/1) 外 灰色 (N 5/1)	径0.2~0.3mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ○	1/15	
83	④ 高杯	口徑 約14	回転ナテ	回転ナテ	内 灰色 (10Y 6/1) 外 灰色 (10Y 5/1)	径1~2mm程度の白色中砂を少量と径0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ○	1/6	
84	④ ?	口徑 約14	回転ナテ	回転ナテ	内 灰色 (N 5/0) 外 灰色 (N 4/0)	径0.5mm程度の細砂を含んでいる。 ○	1/7	
85	④ ?	—	タタキ	ナテ	内 増青灰褐色 (5PB 4/1) 外 増青灰褐色 (5PB 4/1)	径0.3mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ○		
86	④ ?	—	回転ナテ	回転ナテ	内 青灰褐色 (5PB 5/1) 外 増青灰褐色 (5PB 4/1)	径0.3~0.5mm程度の白色中砂を含んでいる。 ○		

表3 出土遺物観察表 土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
87	高杯	—	直底丸 把手	回転ナデ	内 灰色 (N 5/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		
88	⑤ 小形の 甕	口径 13.6	ナデ	ナデ 指擦压痕	内 粉色 (7.5YR 6/6) 外 棕色 (5YR 6/6)	径1mm程度の白色中砂を多量に含み、径 2mm程度の白色粗砂を少量含んでいる。 ◎	1/5	
89	⑥ 杯盤	口径 13.0	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色 (N 5/0) 外 灰色 (N 5/0) 斷面 灰褐色 (10R 6/2)	径0.2~0.5mm程度の細砂、径0.5~1mm程 度の中砂、径1~2mm程度の粗砂を多く含 んでいる。 ◎	2/3	
90	⑦ 杯身	口径 約10.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (N 7/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	1/13	
91	⑧ 杯身	口径 約13	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (3 Y 7/0) 外 明オーラー灰 (2.5GY 7/1)	径1mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/9	
92	⑨ 杯身	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5B 6/1) 外 青灰色 (5B 6/1)	径1~2mm程度の白色細砂を多く含んで いる。 ◎	1/9	
93	⑩ 杯身	口径 約14	回転ナデ	回転ナデ	内 淡青色 (3.5Y 6/3) 外 淡青色 (3.5Y 6/3)	径0.5mm程度の白色細砂と径1~2mm程度 の白色粗砂を含んでいる。 ×	1/8	
94	⑪ 杯身	口径 約12	ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (5Y 7/1) 外 灰白色 (5Y 7/1)	径0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 △	1/7	
95	⑫ 甕	口径 17.2	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5PB 6/1) 外 青灰色 (5PB 5/1)	径1~2mm程度の白色細砂を多く含んで いる。 ◎	1/9	
96	⑬ 杯身	直径 11.2	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 灰白色 (7.5Y 7/1)	径0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/8	
97	⑭ 平瓶	口径 7.6	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量、径 0.3~0.5mm程度の白色細砂を多く含んでい る。 ◎		
98	⑮ 甕	口径 17.6	回転カキメ	回転ナデ	内 灰色 (Y 6/1) 外 灰色 (Y 6/1)	径1mm程度の白色中砂を少量、径0.5mm程 度の白色細砂を多量に含んでいる。 ◎	1/6	
99	⑯ 甕	口径 20.6	ナデ	ナデ	内 棕色 (7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	径1~2mm程度の白色細砂と径0.5mm程度 の白色中砂を多く含んでいる。 ◎	1/18	
100	⑰ 甕	口径 約14	ナデ	ナデ	内 にふい青褐色 (10YH 5/3) 外 にふい青褐色 (10YR 5/3)	径0.5mm程度の白色細砂を多量に含んで いる。 ◎	1/14	
101	⑱ 甕	口径 24.2	回転ナデ	回転ナデ	内 粉色 (7.5YR 6/6) 外 粉色 (7.5YR 1.7/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量含んで いる。 ◎	1/16	

表3 出土遺物観察表 土製品

(7)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
102	① 鍋	口径 約27	ナデ	ナデ	内 棕色 (5YR 7/6) 外 棕色 (5YR 7/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多く含んでいる。 ◎	1/6	
103	① 鍋	口径 約23	ナデ	ナデ	内 明赤褐色 (5YR 5/6) 外 明赤褐色 (5YR 5/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる。 ◎	1/11	
104	② 嵌	口径 約21	—	—	内 棕色 (5YR 7/6) 外 棕色 (5YR 7/6)	径0.5~1mm程度の中砂、径1~2mm程度の細砂を含んでいる。石英、長石砂岩を多量に含んでいる。 ◎	1/2	
105	③ 瓶	口径 約16	ヘラケズリ →ナデ	回転ナデ →ナデ	内 にほい黄色色 (10YR 7/4) 外 黄褐色 (10YR 7/6)	径0.5mm程度の白色細砂を少量含んでいる。 ◎	1/7	
106	④ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 棕色 (7.5YR 6/6) 外 棕色 (7.5YR 6/6)	径0.5mm程度の白色細砂と1~2mm程度の白色中砂を多く含んでいる。 ◎		
110	⑤ 杯蓋	口径 13.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 青灰色 (5B 6/1) 外 青灰色 (5B 6/1)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/10	
111	⑥ 杯盤	口径 13	回転ナデ	回転ヘラケズリ 回転ナデ	内 灰色 (7.5Y 6/1) 外 灰色 (7.5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎	1/6	
112	⑦ 杯蓋	口径 12	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5B 5/1) 外 青灰色 (5B 5/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量、径0.3mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	1/4	
113	⑧ 杯身	口径 約12	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5BG 6/1) 外 青灰色 (5BG 6/1)	径0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	1/7	
114	⑨ 杯身	口径 10.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/4	
115	⑩ 壺	口径 約16	回転ナデ 回転:ハケメ	ナデ	内 にほい褐色 (7.5YR 5/4) 外 長粘土色 (7.5YR 5/6)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.3mm程度の白色細砂を多量に含んでいる。	1/4	
116	⑪ 杯蓋	口径 12.4 底面 2.9	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色 (10Y 5/1) 外 黑色 (10Y 6/1)	径2~7mm程度の白色粗砂を少量、径0.2~0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎	元形	
117	⑫ 杯身	口径 12.5 底面 約4	回転ヘラケズリ	回転ナデ →ナデ	内 褐灰色 (10GY 6/1) 外 綠灰色 (10GY 6/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂および径2~5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	完形	
118	⑬ 杯蓋	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5B 5/1) 外 青灰色 (5B 5/1)	径0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/13	
119	⑭ 杯盤	口径 12.6	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5B 6/1) 外 青灰色 (5B 5/1)	径1~2mm程度の白色粗砂ないし径2~3mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/9	
120	⑮ 杯身	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 黑色(7.5Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 6/1)	径0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎	1/8	

表3 出土遺物観察表 土製品

(8)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
121	⑤ 杯身	口径 11.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色 (N 6/1) 外 灰色 (N 6/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ○		1/9
122	⑥ 杯身	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(7.5Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。		1/5
123	⑦ 杯身	底径 約12	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 灰色 (N 5/0)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ○		1/8
124	⑧ 小壺	胴径 9.8	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (2.5Y R 6/6) 外 灰色 (7.5Y 6/1)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を少額含んでいる。 ○		1/6
125	⑨ 高杯	—	—	ナデ	内 灰白色 (7.5Y 8/1) 外 灰白色 (7.5Y 8/1)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ○		
126	⑩ 壺	口径 22.6	ハケメ	ナデ	内 棕色 (7.5Y R 6/6) 外 棕色および明黄褐色 (5 YR 7/8 ~ 10 YR 7/6)	径1~3mm程度の石英、長石、砂岩を多量に含んでいる。ザラザラしている。 ○	表面は 粗。内面は 5%厚底。 外側は20% 厚底。 1/4	
127	⑪ 高杯	底径 26.8	ナデ	ナデ	内 明褐色 (7.5Y R 5/8) 外 明赤褐色 (5 YR 5/8)	径1~1.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ○		1/11
131	⑫ 杯身	口径 約13	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (N 4/0) 外 灰色 (N 4/0)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ○		1/10
132	⑬ 杯身	口径 12.6	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 明オリーブ灰色 (2.5G Y 7/1) 外 オリーブ灰色 (2.5G Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ○		1/10
133	⑭ 壺	胴径 約14	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.2~0.5mm程度の白色粗砂と径1~2mm程度の白色粗砂、径3mm程度の細砂を多く含んでいる。内側の表面に孔隙が少量付着している。 ○		
134	⑮ 杯身	口径 約15	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(10Y 4/1) 外 灰色(10Y 4/1)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ○		1/8
135	⑯ 杯身	口径 12.6	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(7.5Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 5/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 △ 土質質		1/15
136	⑰ 杯身	口径 12.2	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (N 6/0) 外 黄褐色 (2.5Y 7/2)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を少額含んでいる。 ○		1/13
137	⑱ 杯身	口径 13.0	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ○		1/6
138	⑲ 杯壺	口径 14.0	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ○		1/15

表3 出土遺物観察表 土製品

(9)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
139	⑩ ?	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色 (5°F B 6/1) 外 黄褐色 (10Y R 7/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径0.2~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/9
140	⑪ 杯身	底径 約12	回転ナデ	回転ナデ	内 底内色 (N 7/0) 外 灰色 (N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる。 ◎		1/7
141	⑫ ?	口径 14.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色と灰褐色 (10Y 5/1~ 10Y 6/1) 外 灰色と灰褐色 (10Y 6/1~ 7.5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多く含んでいる。 ◎		1/10
142	⑬ 盃	口径 13.2	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (N 5/0) 外 黄褐色 (N 7/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる。径0.5mm程度の黑色粒を含んでいる。 ◎		1/2
143	⑭ 大甌	—	平行タキ	円形の凸て具痕跡	内 灰白色(N 7/0) 外 灰色(N 6/0) 黒褐色 (2.5Y R 4/2)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量含んでいる。径0.3~0.5mm程度の白色および黒色細砂を多く含んでいる。 ◎		—
144	⑮ 杯身	口径 約13	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 明オーラープ灰褐色 (2.5Y G 7/1) 外 綠褐色 (10G Y 5/1)	径0.5mm程度の内色細砂を少量含んでいる。 ◎		1/9
145	⑯ 杯身	口径 10.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径2mm程度の白色細砂を少量、径0.3~0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎		1/15
146	⑰ 壺	口径 10.8	回転ナデ	同心円凸て具痕跡	内 灰褐色ないし灰褐色 (10T 7/1~ 10Y 4/1) 外 灰色(10Y 5/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎		1/7
147	⑱ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 淡黄色 (2.5Y 8/3) 外 淡黃色 (2.5Y 8/3)	径1mm程度の白色中砂をごく少量含んでいる。		
148	⑲ 高杯	—	ナデ	ナデ	内 明黄褐色 (10Y R 7/6) 外 明黃褐色 (10Y R 7/6)	径1mm程度の白色中砂、径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 △ 土師質		
149	⑳ 杯身	口径 約12	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色 (N 8/0) 外 灰色 (N 7/1)	径0.5mm程度の白色細砂を多量に含んでいる。 ◎		1/10
150	㉑ 杯身	口径 約12	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 綠褐色 (10G Y 6/1) 外 綠褐色 (10G Y 5/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。黑色粒も含んでいる。 ◎		1/7
151	㉒ 壺	—	タキ	ナデ	内 灰色(7.5Y 5/1) 外 灰色(7.5Y 5/1) 断面 灰色ないしよい水褐色	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を多量に含んでいる。径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎		
152	㉓ 杯身	口径 11.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 明オーラープ灰褐色 (2.5Y G 7/1) 外 墨綠褐色 (7.5G Y 3/1)	径2~3mm程度の白色細砂を少量、径0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/4
153	㉔ 杯身	口径 12.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (N 7/0) 外 灰色 (N 6/0)	径1~3mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/8

表3 出土遺物観察表 土製品

(10)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
154	⑤ 杯身	口径 約12	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(N 5/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂および径1~2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/9	
155	⑥ 杯身	口径 12.8	圓軸ナデ 或:圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 所白色(5Y 8/1) 外 所白色(5Y 8/1)	径2~0.5mm程度の白色粗砂を含んでい る。 X	1/6	
156	⑦ 近頃盃	口径 約9	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色 (7.5Y 4/1) 外 灰色 (7.5Y 4/1)	径0.5mm程度の白色粗砂を多量に含んで いる。 ◎	1/8	
157	⑧ 甕	口径 20.8	圓軸ナデ タクキ	圓軸ナデ 同心円当て具痕跡	内 灰白色 (N 7/0) 外 灰色 (N 6/0)	径2~4mm程度の白色粗砂を少量、径 0.5~1mm程度の白色中砂を多く含んで いる。 ◎	1/3	
158	⑨ 甕	口径 16.2	タクキ →圓軸カキメ	同心円当て具痕跡	内 灰白色 (5Y 8/1) 外 所色 (5Y 5/1)	径2mm程度の白色粗砂を少量、径 0.5~0.5mm程度の白色粗砂を多量に含んで いる。 △	1/3	口頭部
159	⑩ 甕	—	タクキ →圓軸カキメ	同心円当て具痕跡	内 所色(10Y 5/1) 外 所白色および灰色(5Y 8/2~5Y 4/1)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 △	1/3	側部
160	⑪ 高杯	—	撥涙压痕	ナテ	内 棕色(7.5YR 7/6) 外 棕色 (7.5YR 7/6)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		
161	⑫ 高杯	—	ナテ	ナテ	内 棕色(5YR 6/6) 外 棕色(5YR 6/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂、径1~2 mm程度の粗砂、径2~3mm程度の白色粗砂 を多量に含んでいる。 ◎		
162	⑬ 甕	口径 34.6	圓軸カキメ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 4/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含 んでいる。 ◎	1/20	大型の甕?
163	⑭ 甕	口径 約14	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 暗青灰色 (5B 4/1) 外 暗青灰色 (5B 3/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径 0.3~0.5mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎	1/8	
164	⑮ ?	—	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 所白色 (N 8/0) 外 灰色 (7.5Y 5/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少しあり (0.5~1mm程度)。黒斑がある。 ◎		
165	⑯ 高杯	—	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 棕灰色 (2.5G Y 3/0) 外 所色 (2.5G Y 7/0) 所面 暗灰色 (7.5Y R 5/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を少量、径 0.2~0.3mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		
166	⑰ 平瓶	網径 17.0	圓軸ヘラケズリ →ナテ	圓軸ナデ	内 明緑灰 (7.5G Y 8/1) 外 明緑灰 (7.5G Y 8/1) (一部 浅緑色)	径0.5~1mm程度の白色中砂、径1~2 mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎ 上半部に自然縫	口頭語 欠失	
167	⑱ 甕	口径 16.8	ナテ	ナテ 粘土帶の痕跡あり	内 深葉綠 (7.5Y R 8/4) 外 にぼい 棕 (7.5Y R 7/4)	径2~5mm程度の白色粗砂を多量に、径 0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んで いる。 ◎	1/6	
168	⑲ 杯蓋	口径 約10	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(10Y 6/1) 外 灰色(10Y 5/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んで いる。 ◎	1/5	

表3 出土遺物観察表 土製品

(II)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
169	⑧ 平底	直径 約13	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色(5Y 7/1) 外 灰白色(5Y 7/1)	径0.1~0.2mm程度の黑色細砂と径1~2 mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	口縁部 欠失。 網部充形	
170	⑨ 杯身	口径 9.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 外 灰色 (5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んで いる。 ◎	表面に黒 斑がある。 1/6	
171	⑩ 長頸壺	直径 10.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 明オリーブ色 (2.5GY 7/1) 外 明オリーブ色 (2.5GY 7/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径 0.2~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/4
172	⑪ 盆	口径 約23	回転ナデ 波紋文	回転ナデ	内 灰白色 (10YR 7/1) 外 灰質褐色 (10YR 6/2)	径0.2~0.5mm程度の白色細砂を多量に、 径0.1~0.2mm程度の黑色粒を多量に含んで いる。 ◎		1/14
173	⑫ 壺	口径 20.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(10Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 6/1)	径3mm程度の白色粗砂を少量、径0.5~ 1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる径 0.5~1mm程度の黑色粒を含む。 ◎		1/7
174	⑬ 壺	口径 12.6	回転ナデ	回転ナデ 口縁部に段	内 灰色(N 5/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ◎		1/8
175	⑭ 壺	口径 約18	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰色(7.5Y 6/1) 外 灰白色 (7.5Y 7/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含 む。径1mm程度の黑色粒を含む。 ◎		1/8
176	⑮ 瓢	口径 約15	ハケメ ナデ	ハケメ ナデ	内 に赤い褐色 (7.5YR 5/3) 外 に赤い褐色 (7.5YR 5/3)	径1~2mm程度の白色粗砂ないし径2~ 3mm程度の白色面砂を多く含んでいる。 ◎		1/6
178	⑯ 瓢	口径 約16	ナデ マツツ	ナデ 粘土層接合痕跡あり	内 に赤い褐色 (7.5YR 6/4) 外 に赤い褐色 (7.5YR 6/4)	径1~2mm程度の白色粗砂、径2~4mm 程度の白色面砂を多量に含んでいる。 ◎		1/10
179	⑰ 瓢	口径 16.8	ミガキ状のナデ	ハケメ ナデ	内 に赤い褐色 (7.5YR 7/4) 外 に赤い褐色 (5Y 7/4)	径1mm程度の白色中砂を少量、径0.1~ 0.5mm程度の白色細砂を多量、径3mm程度 の白色面砂を含んでいる。 ◎		1/6
180	⑱ 瓢	口径 10.8	回転ナデ	回転ナデ 同心円凹凸具微跡	内 灰色 (7.5Y 6/1) 外 灰色 (7.5Y 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径 0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎		2/3
181	⑲ 杯身	口径 10.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 青褐色 (5B 6/1) 外 褐色 (5B 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、径 0.3~0.5mm程度の白色細砂を多く、径0.2~ 0.3mm程度の黑色細砂を含んでいる。 ◎		1/12
182	⑳ 瓢	口径 10.4	ナデ	ナデ	内 浅黄褐色 (10YR 8/4) 外 に赤い褐色 (10YR 7/4)	径0.1~0.5mm程度の白色細砂を多量に、 径1mm程度の白色中砂を少量含んでいる。 ◎		
183	㉑ 瓢	—	ナデ	ナデ	内 に赤い褐色 (7.5YR 7/4) 外 に赤い褐色 (7.5YR 6/4)	径0.1~0.5mm程度の白色細砂を多量に径 1~2mm程度の白色粗砂を少し含んでいる。 ◎		
184	㉒ 杯身	口径 10.6	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色(10Y 7/1) 外 灰白色(10Y 7/1)	径1~2mm程度の黑色粗砂を少量、径0.5 mm程度の白色細砂を含んでいる。 △		1/4
185	㉓ 長颈壺	直径 10.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(10Y 6/1) 外 灰色(10Y 5/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んで いる。 ◎		1/7

表3 出土遺物観察表 土製品

(12)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
186	⑥ 瓢	口径 13.6	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 灰白色 (10Y 7/1) 外 灰白色 (10Y 7/1)	径2mm程度の黒色および白色粗砂を少量含んでいる。 △ 土燒	1/11	
187	⑦ 瓢	口径 13.4	—	ナデ	内 にふい黄褐色 (10YR 6/3) 外 にふい褐色 (5YR 6/3)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎	1/5	
188	⑦ 瓢	口径 21.8	ナデ	ナデ ナデ	内 明赤褐色 (5YR 5/8) 外 明赤褐色 (5YR 5/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多く含み、 径0.2~0.5mm程度の白色粗砂も多く含んで いる。 ◎	1/11	
189	⑧ 杯蓋	口径 17.6	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 青灰色 (5B 6/1) 外 青灰色 (5B 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を含んで いる黒色粗砂を少量含んでいる。表面に黒斑が ある。 ◎	1/8	
190	⑨ 杯身	底径 9.8	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(5Y 7/1) 外 灰白色(5Y 7/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量含んで いる。 ◎	1/2	
191	⑩ 杯	底径 4.2	ヨコナデ	ナデ	内 棕色 (7.5YR 6/8) 外 明赤褐色 (2.5YR 5/8)	径2~3mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		
192	⑪ 杯	—	タテハケ →ナデ	タテハケ →ナデ	内 浅黃褐色 (10YR 8/3) 外 にふい黄褐色およびオリーブ黑色(10YR 7/3 ~5Y 3/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、徑 0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
193	⑫ 杯身	口径 約11	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 棕灰色 (5G 6/1) 外 緑灰色 (5G 5/1)	径2~3mm程度の白色粗砂を少量、徑 0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 径0.5~1mm程度の黑色中砂を少量含んで いる。 ◎	出典 1/17	
194	⑬ 杯身	口径 12.4	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色 (Y 7/1) 外 灰色 (Y 6/1)	径2mm程度の白色粗砂を少量。徑0.5~ 1mm程度の白色中砂を多量に含む。徑0.2~ 0.5mm程度の黑色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/2	
195	⑭ 瓢	口径 約24	ハケ目 ナデ	ナデ	内 にふい褐色 (7.5YR 5/4) 外 棕色 (7.5YR 4/4)	径1~2mm程度の白色粗砂ないし径2~ 3mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。 ◎	1/10	
196	⑮ 瓢	口径 約21	波状文	圓軸ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 黑色 (10Y 5/1)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。		
197	⑯ 杯蓋	口径 約11	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 扇色(N 6/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んで いる。 ◎	出典 1/5	
198	⑰ 杯身	口径 約11	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 桂葉色 (2.5Y 7/2) 外 灰葉色 (2.5Y 7/2)	径0.5mm程度の白色粗砂を含んでいる。 △ 土燒質	1/9	
199	⑱ 杯身	口径 8.8	ヘラケズリ →圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂および径2 mm程度の粗砂を含んでいる。 ◎	1/2	
200	⑲ 杯蓋	口径 8.4	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(N 7/0) 外 灰色(5Y 6/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量、徑 0.2~0.3mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎	1/5	

表3 出土遺物観察表 土製品

(13)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
201	④ 杯身	口径 9.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色(5Y 7/1) 外 灰色(5Y 5/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		1/6
202	④ ?	口径 約12	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		1/12
203	④ ?	口径 11.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (10Y 7/1) 外 灰色 (10Y 5/1)	径1~2mm程度の粗砂を少量含み、徑 0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 —部黒い付 着物あり ◎		1/9
204	鶴 ?		ヘラケズリ +回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(7.5Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 7/1)	径2~3mm程度の白色粗砂を少量、徑 0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
205	④ 短颈壺	口径 4.6 器高 約8 瓶径 11.6	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色(N 8/0) 外 灰色(N 6/0)	径1~2mm程度の白色粗砂と徑0.5mm程度 の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/3
206	④ 杯底	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 明オーブン色 (2.5GY 2/1) 外 オーブン色 (2.5GY 6/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多量に徑2 mm程度の白色細砂も含んでいる。 ◎		
207	④ 杯身	口径 11.2	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色(5PB 6/1) 外 青灰色(5PB 6/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		1/8
208	④ 杯垂	口径 約13	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 青灰色(5B 6/1) 外 増青灰色(5B 4/1)	(0.5mm程度の白色細砂を含んでいる (表面に黒斑がある)。 ◎		1/11
209	① 柄	口径 11.2	ナデ	ナデ	内 暗色 (7.5YR 7/6) 外 暗色 (7.5YR 7/6)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		1/4
210	④ 高杯	口径 15.2	横方向のヘラカキ 放射状の端火	放射状の端火	内 暗色 (2.5YR 6/8) 外 暗色 (2.5YR 6/8)	(0.2~0.5mm程度の白色細砂を少量、徑 0.5~1mm程度の白色粗砂を微量含んで いる。キメが細かい。 ◎		1/3
211	④ 壺	口径 10.8	回転ナデ	回転ナデ 同心円凸て具痕跡	内 灰色 (5Y 6/1) 外 灰色 (5Y 6/1)	(0.3~0.5mm程度の白色細砂を多く含ん でいる。 ◎		1/5
212	④ 杯身	口径 11.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 緑灰色 (5G 6/1) 外 緑灰色 (5G 6/1)	(0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ◎		1/8
213	④ 杯身	口径 16.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎		1/14
214	④ 壺	口径 13.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 灰色 (7.5Y 5/1)	(0.5mm程度の白色細砂を多く含んでいる。 ◎		1/13
215	④ 羽量	—	ナデ	ナデ	外 おひいき色 (5YR 6/4)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ◎		異

表3 出土遺物観察表 土製品

10

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
216	④ 羽蓋	—	ナデ	ナデ	外 明褐色 (7.5Y R 5/6)	径1~2mm程度の白色粗砂なし。ほり5~5mm程度の白色粗砂を多量に含んでいる。 ○	糊	
217	⑤ 羽蓋	—	ナデ	ナデ	外 棕色および橙色 (7.5Y R 4/6~7.5Y R 6/8)	径1~2mm程度の白色粗砂。ほり0.5mm程度の白色粗砂を多く含んでいる。		一部スス が付着して いる。
218	⑥ 大甌	口径 約23	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色(5P B 5/1) 外 黑褐色 (7.5Y R 6/2) 断面 にほい褐色 (5Y R 6/3)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んで いる。 ○		1/14
219	甌	口径 12.2 器高 3.8	回転ヘラケズリ 1/3 抹	輪 重ね巻き	内 黑白色(5Y 7/1) 外 棕色ないし灰白色 (2.5Y R 6/6~5Y 7/1)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んで いる。 ○	割り出し 馬穴 変形	
220	青磁	口径 5.4	胎	胎	内 黑オリーブ色 (5Y 6/2) 外 黑白色 (5Y 7/2)	径0.2mm程度の白色粗砂を多量に含んで いる。 ○		1/5
221	⑦ 杯皿	口径 約18	回転ナデ 丸株つまみ	回転ナデ	内 にほい黄色 (2.5Y 6/4) 外 明黄褐色 (2.5Y 7/6)	径0.2~1mm程度の白色粗砂および中砂を 多量に含んでいる。 ○ 土師質		
222	⑧ 杯身	口径 11.6	回転ナデ	回転ナデ	内 黑白色(10Y 7/1) 外 黑色(10Y 5/1)	径0.3~0.5mm程度の白色粗砂を含んで いる。黒斑がある。 ○		1/7
223	⑨ 羽蓋	口径 約22	ヨコナデ	ヨコナデ	内 にほい黄褐色 (10Y R 6/4) 外 にほい褐色 (10Y R 6/4)	径1~2mm程度の白色粗砂を多量に含んで いる。 ○		1/15
225	⑩ 杯皿	口径 11.4	回転ナデ	回転ナデ	内 黑色(10Y 6/1) 外 黑色(10Y 5/1)	径0.5mm程度の白色粗砂を少量含んでいる。 ○		1/11
226	⑪ 杯身	口径 約15	回転ナデ	回転ナデ	内 青黑色(5B G 5/1) 外 青灰色 (10B G 5/1) 断面 にほい褐色 (5Y R 5/4)	径0.3~0.5mm程度の粗砂を多く、ほり1~2mm程 度の白色粗砂を少量含んでいる。 ○		1/6
227	⑫ 高杯	—	—	—	内 黑白色 (7.5Y 8/1) 外 黑白色 (7.5Y 8/1)	径0.3~0.5mm程度の黑色粗砂を多く含んで いる。 ○		1/6
228	⑬ 杯皿	口径 9.6	回転ナデ	回転ナデ	内 黑色(5Y 6/1) 外 黑色(5Y 5/1)	径1~2mm程度の白色中砂を多く含んで いる。 ○		1/12
229	⑭ 杯皿	口径 10.4	回転ナデ	回転ナデ	内 黑白色(5Y 7/1) 外 黑色(5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ○		1/9
230	⑮ 杯皿	口径 8.8	回転ナデ	回転ナデ	内 黑色(7.5Y 5/1) 外 黑色(7.5Y 4/1)	径1~2mm程度の白色中砂を多く含んで いる。 ○		1/9
231	⑯ 杯身	口径 13.4	回転ナデ	回転ナデ	内 黑色(7.5Y 5/1) 外 黑色(7.5Y 5/1)	径0.5~1mm程度の粗砂を含んでいる。 ○		1/19
232	⑰ 杯皿	—	回転ナデ	回転ナデ →ナデ	内 黑白色(N 7/0) 外 黑色(N 6/0)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ○		

表3 出土遺物観察表 土製品

(15)

番号	品種	法量(cm)	施文・調整		色調 (内面) (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
233	⑤ 盃	口径 10.6	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 緑灰色 (10G Y 6/1) 口縁部に一部自然焦がか かでオーブル灰色(10Y 5 /2)になっている。	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでい る。 ○	1/5	
235	⑥ 杯身	底径 約6	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色(5B 6/1) 外 灰白色(5B 6/1)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ○	1/6	
236	⑦ 壺?	口径 13.8	回転ナデ	回転ナデ	内 青灰色(5B 5/1) 外 墓青灰色(5B 3/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ○	1/11	
237	⑧ 高杯	底径 10.4	回転ナデ	回転ナデ	内 棕色 (7.5Y R 6/6) 外 棕色 (7.5Y H 6/6)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んでい る。 ○	1/13	
238	⑨ 杯蓋	口径 12.2	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径1~2mm程度の白色粗砂を少量含んで いる。 ○	1/6	
239	⑩ 杯身	口径 約13	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径1~2mm程度の白色粗砂を多く含んで いる。 ○	1/20	
240	⑪ 杯重	—	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 灰白色 (7.5Y 7/1)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂と径0.3~ 0.5mm程度の黒色細砂を少量含んでい る。 ○	つまみ	
241	⑫ 短颈器	口径 6.4 脚径 9.0	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 4/0)	径0.5mm程度の白色細砂を多量に、径1 mm程度の白色中砂を少量含んでいる。 ○	1/3	
242	⑬ 杯身	—	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 灰色 (7.5Y 6/1)	径0.1~0.5mm程度の白色細砂を多量に、 径1~2mm程度の白色粗砂を少量含んでい る。径0.5~1mm程度の黒色粒を含む。 ○		
243	⑭ 杯身	口径 13.4	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色(5Y 8/2) 外 灰白色(5Y 8/2)	径2~3mm程度の白色粗砂を含んでいる 裏面に黒斑がある。 ○	1/8	
244	⑮ 杯身	底径 10	回転ナデ	回転ナデ	内 明オリーブ灰色 (2.5G Y 7/0) 外 オリーブ灰色 (2.5G Y 6/0)	径0.2mm程度の白色細砂を含んでいる。 ○	1/7	
245	⑯ 高杯	底径 約11	—	—	内 棕色 (2.5Y R 6/6) 外 棕色 (2.5Y R 6/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多く含ん でいる。 ○	1/4	
246	⑰ 高杯	底径 約9	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色(N 5/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を少量含ん でいる。 ○	1/10	
247	青磁 瓶?	底径 4.6	回転ナデ 削出し高台	回転ナデ	内 淡黄褐色と灰オーブル色 (2.5Y R 8/3~5Y 6/2) 外 淡黄褐色 (2.5Y 8/3)	径0.2~0.3mm程度の黑色細砂を含んでい る。 ○	3/5	
248	⑱ 杯身	口径 約12	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 灰白色(5Y 7/1) 外 灰色(5Y 6/1)	径0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ○	1/10	

表3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		(内面) 色調 (外面)	胎 焼	土 成	備考
			外 面	内 面				
249	④ 杯身	直径 11.6	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色 (7.5Y 7/1) 外 灰色 (7.5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/11
250	① 杯身	直径 約19	ナデ	ナデ	内 浅黄褐色 (7.5Y R 8/3) 外 浅黄褐色 (7.5Y R 8/4)	径0.5~1mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/15
251	④ 杯身	口径 11.4	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(5Y 6/1) 外 灰白色(5Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/5
252	④ 壺	直径 10.8	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(5Y 6/1) 外 灰色(5Y 6/1)	径0.1~0.2mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/3
253	④ 短筒壺	口径 8.8	圓軸カキメ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 5/0)	径2~3mm程度の白色細砂を少量、径0.5 ~1mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/4
254	④ 杯身	口径 約10	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(7.5Y 6/1) 外 灰色(7.5Y 5/1)	径0.2mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/9
255	④ 杯身	直径 7.8	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(N 7/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/3
256	④ 壺	口径 17.6	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 5/0)	径0.3~0.5mm程度の白色細砂を含んで る。 ○		1/18
257	④ 杯身	直径 13.0	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(5Y 8/1) 外 灰白色(5Y 8/1)	径0.5~1mm程度の白色細砂と径2mm程 度の粗砂を含んで る。 △		
258	④ 短筒壺	口径 12.2	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 6/0)	径0.5mm程度の粗砂を多量に含んで る。 外渕：自然粉 ○		1/2
259	④ 杯身	口径 11.8	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 灰色(N 6/0) 外 灰色(N 4/0)	径0.5~1mm程度の白色細砂を多く含 んで る。 ○		
260	④ 杯身	口径 13.8	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 灰褐色 (7.5G Y 6/1) 外 灰褐色 (7.5G Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色細砂を多く含 んで る。 ○		1/10
261	④ 壺	直径 13.0	圓軸ヘラケズリ	圓軸ナデ	内 灰色 (5Y 8/1) 外 灰白色 (7.5Y 7/1)	径0.2~0.5mm程度の白色細砂および黑色 細砂を多量に含んで る。 ○		1/6
262	④ 大甌	口径 約28	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(N 5/0) 外 灰白色(N 5/0)	径0.5~1mm程度の粗砂を含んで る。 ○		1/19
263	④ 瓶	口径 約15	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(10Y 8/1) 外 灰白色(10Y 8/1)	径0.2~0.3mm程度の白色細砂を含んで る。モノが細かい。 ○		1/14
264	④ 杯身	直径 10.4	圓軸ナデ	圓軸ナデ	内 灰白色(5Y 7/1) 外 灰白色(5Y 7/1)	径0.5mm程度の白色細砂を多く含んで る。 ○		1/8

表3 出土遺物観察表 土製品

(17)

番号	器種	法量(cm)	施文・調整		色調 (内面) (外面)	胎焼	土成	備考
			外 面	内 面				
265	⑤ 瓶身	口径 約14	回転ナデ	回転ナデ	内 塗灰色(N 3/0) 外 オリーブ灰褐色 (2.5G Y 5/1)	径0.5mm程度の細砂を多量に含んでいる。 ◎		1/10
266	⑤ 瓶身	口径 13.2	回転ヘラケズリ	回転ナデ	内 塗白色(S Y 7/1) 外 灰褐色(S Y 6/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎		1/8
267	⑤ 豆	口径 14.2	回転ナデ	回転ナデ	内 にいわ褐色 (7.5Y R 6/4) 外 にいわ褐色 (7.5Y R 6/4)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでないし、径2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		1/14
268	⑤ 瓶身	口径 9.8	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色(S Y 7/2) 外 灰白色(S Y 7/1)	径1~2mm程度の白色中砂を多く含んでいる。 ◎		1/3
269	⑤ 瓶身	口径 11.8	回転ナデ	回転ナデ	内 灰色 (10Y 6/1) 外 灰色 (10Y 6/1)	径0.2~0.5mm程度の白色細砂を含んでいる。 ◎		1/8
270	⑤ 長颈瓶	—	回転ヘラケズリ →回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色(S Y 7/1) 外 灰白色(S Y 7/1)	径0.5~1mm程度の白色中砂を含んでいる。 ◎		
271	⑤ 盆	口径 約16	ヨコナデ	ヨコナデ	内 漆褐色および黒色(S Y R 8/3, 5 Y R 7/6) 外 黒褐色(5 Y R 6/6)	径0.5~1mm程度の白色中砂を多量に含んでいる。 ◎		1/5
272	⑤ 豆	口径 21.6	ヨコナデ	ヨコナデ	内 明赤褐色およびにいわ褐色 (2.5Y R 5/8~7.5 Y R 7/4) 外 棕褐色およびにいわ褐色 (2.5Y R 6/8~7.5 Y R 6/4) 裏面 塗灰色 (7.5Y R 4/1)	径1~2mm程度の白色粗砂を含み、径0.5~1mm程度の白色粗砂を多量に含んでいる。 ◎		1/7
273	⑤ 内板	長径 3.8 短径 3.6 厚 0.6	ナデ	同心円当て其抜跡	灰色(S Y 6/1)	径0.2~0.5mm程度の白色細砂、径1~2mm程度の白色粗砂を含んでいる。 ◎		
274	青磁 瓶	底径 4.0cm	回転ナデ	回転ナデ	内 灰白色 (10Y 8/1) 外 灰白色 (10Y 7/1)	径0.2~0.3mm程度の黑色細砂を多く含んでいる。 ◎		

第3章 まとめ

当遺跡の発掘調査によって得られたいくつかの成果と今後の課題として残された問題点について、若干のまとめを行う。

1 倒木痕跡について

(1) はじめに

北久米淨蓮寺遺跡3次調査地（以下、淨蓮寺3次）における発掘調査の際に、多数の「土壙状の遺構」を確認した。旧表土である黒褐色土、あるいは地山層と共通する茶褐色粘質土を埋土とする三日月形の土壤と、礫層が盛り上がった部分が一対となった特異な形状を呈するこの「遺構」については、過去においても、近隣の遺跡で多数確認されている。¹⁹ところが、その性格付けが明確になされないまま今日に至っていることから、当地における発掘調査の進行と、その整理作業の過程において混乱をきたす状況となっている。

結論から述べると、この正体不明の「遺構」は、風などによって倒された木の根元の痕跡であることが判明した。以下、この「遺構」の基本的な形状を説明したうえで、自然科学分析の成果の裏付けのもと、その成因をモデル化して解説することにする。その上で、この種の「遺構」の考古学的、自然地理学的な活用の可能性について検討を加えたい。

(2) 倒木痕跡の形状とその形成過程

形状 まず、典型的なものに着目することによって、この「遺構」がいかなる形で我々の目に止まるか整理しておこう。

検出時の平面形状は、円形、橢円形に近いものから長円形、あるいは台形を呈するものまで様々である。重要なことは、二次堆積土を埋土とする三日月形ないし不整円形、あるいは長方形の土壤状の落ち込み部分の存在と、それに近接して地山ないし礫層の盛り上がり部分が検出されるという共通した構造を示すことである。礫層の盛り上がり部分と二次堆積土の間には、確実に地山と同じ土層の堆積が認められることも共通の事項である。大きさは直径1m弱の極めて小規模なものから、直径約4mにも及ぶ大規模なものまで様々である。概して、規模が大きなものには礫層の盛り上がりが伴う一方、長径が1.5mを下回る小規模なものには付随しない傾向がある。この点は、後述する断面形状と密接な関係にある。

断面形状は基本的に半円形を呈する。深さは0.3m～1m近いものまで様々であるが、概して平面形状が大きなものほど、小さなものと比較して深い傾向が認められる。半円形のはば中央付近に厚さ5cmほどの灰褐色粘質土の安定した土層が1～3層直立する形で存在し、この部分を境として左右の堆積状況は大きく様相が異なる。倒木-1（図121）で説明すると、礫層の盛り上がりが認められる側においては、④層の次に、同様に直立した形で付近の地山と共通した土層（⑤～⑧層）が存在しており、最も外側に礫層が位置している。一方、反対

側の二次堆積土の部分の状況は安定していない。堆積土の性質も、旧表土と考えられる黒色土(①層)がある一方、地山に近似した茶褐色粘質土(水成堆積土)が入るものも存在する。堆積状況についても、初期流入土(⑩層)が明瞭に区分可能なものがある一方、はっきりしないものも多く様々である。以上の状況は、各「遺構」の堆積土の流入のあり方や、当時の

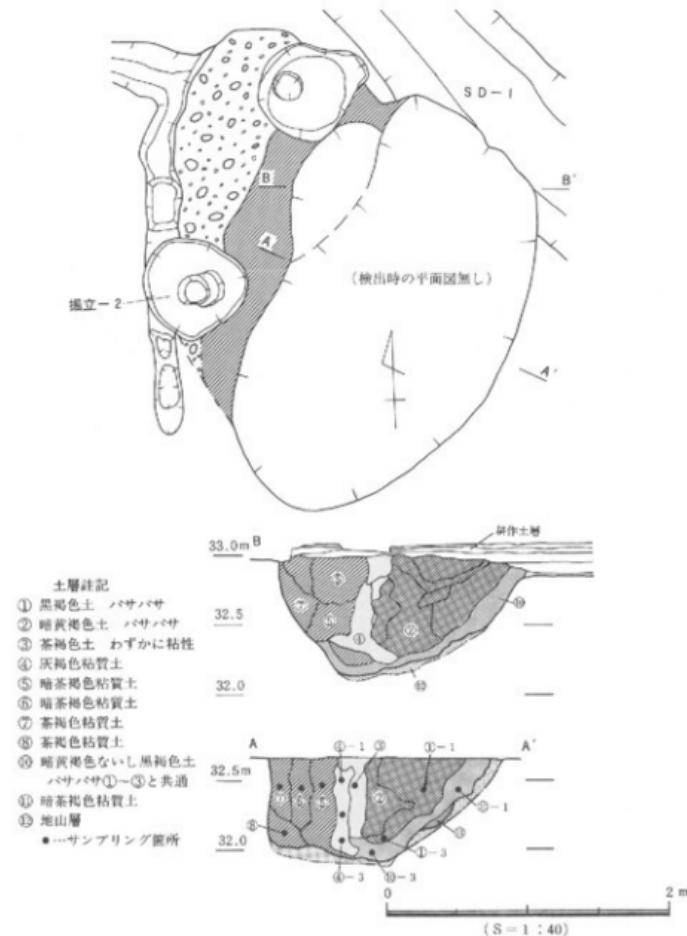


図121 倒木-1

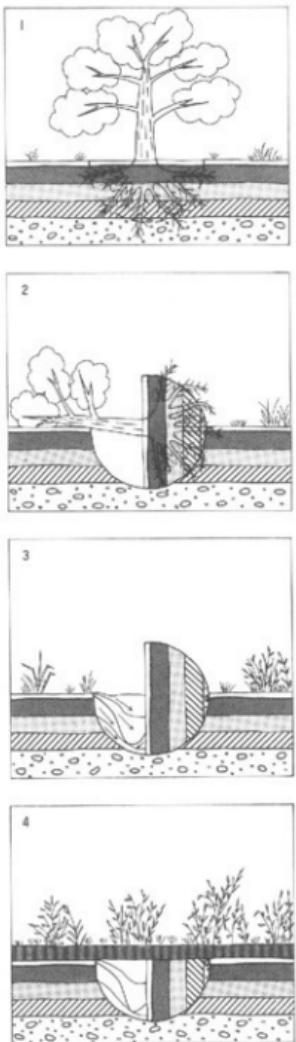


図122 形成過程模式図

地表の表土層の状況の違いを反映したものと考えられる。当遺跡において多数認められるこの「遺構」は、以上の状況から、表土層の性質が大幅に変更を受けるだけの極めて長期間をかけて、順次形成されていった可能性が高いと考えられる。

完掘時の特徴としては、二次堆積土を除去すると、「遺構」の中軸ラインである灰褐色粘質土層に対して垂直方向の幅の狭い溝が複数本存在する点をあげることができる。規模が大きい倒木-3では、この溝がほぼ平行な位置関係で6本確認されている（図124）。

倒木痕跡の形成過程の復元 以上の観察結果に適合する形成過程の復元を試みる。

- 1 根の張り方が縦方向ではなくて、基本的に横方向に広がるタイプの木が生えている。地山上面には腐食土による表土層が形成されている。大きな木の根は疊層内部にまで達しているが、小さなものは及んでいない。

- 2 強風や水流、火山灰の降灰、火碎流、土石流などによって木が倒される。その際、根の周辺の地山層が根に絡んだ状態（半球形）で地表面に対してほぼ垂直に倒立し、このことによって、表土層以下の土層が立ち上がる部分が形成される一方、その反対側は空間となる。表土層の粘性が強い場合その形状は維持されるが、粘性が弱い場合は初期の流入土となる。木が倒れる際、木の根や根に絡んだ疊が、強い力の為、倒れる反対の方向に移動させられることによって、複数の溝が底面に刻まれる。

- 3 周囲の表土層が土壤内に流入する。初期の流入土が明瞭に識別できるケースは、埋積に一定の時間がかかったことを示すものかも

しない。木が倒れることによって周囲の植生に短期間で大きな変化が生じたことも想定されるので、倒木周辺の表土層の性質の変化は予想以上に速かったかもしれない。木の幹や根は、やがて朽ちて無くなる。

4 地表面に突出した部分は徐々に風化して崩壊していくが、これ以前の段階において表土層の流入によって土壤の埋積は完了している。そのため堆積土の中に地山や礫が混じることはほとんど無い。以上の過程を経て倒木の根元の痕跡が成立する。その後、年月が経過するにつれて付近の環境が変化し、表土層の性質が変わっていく。新たに形成された地表面に生えた木が倒れることによって、堆積土の性質がまったく異なる倒木の痕跡が形成される。

自然科学分析による確認 前述の形成過程を、倒木-1の形状とその自然科学分析の結果を突き合わせることによって確認する。なお、倒木-1については、調査時の認識不足から、その全体の記録を探っているわけではない。

図121に示した13ヵ所について土壤サンプルを採取し、植物珪酸体分析を実施した。あわせて比較のため、近くの擾乱を受けていない地山層のサンプリングもおこなった(AV-11グリッド付近)。その結果、かつての表土層であると考えられる③層と④層については、二次堆積土層と比較して、イネ科の植物珪酸体(特にネザサ節属)の値が少ないと判明した。初期の流入土である⑩層、二次堆積土である①層の値は、旧表土層のおよそ3から4倍に達している。⑤-⑦層は、倒立した地山層であるが、植物珪酸体は著しく風化が進んでおり、その数値は極めて低いものであった。この状況は、比較のために分析を行ったAV-11グリッド付近の地山層であるV-VII層の状況と完全に一致している。以上の結果は、この「遺構」が倒木の根元の痕跡であると仮定した場合、うまく符合するものと評価できる。

なお、ここで言う②層については、木が倒れた際の表土層であったことも考えられる。

(3) 分類

当遺跡で確認された50基を越える倒木痕跡の形状には、実に様々なバリエーションが存在しているが、すべて前述の過程に当てはめてその成立過程を説明することが可能である。平面形状や断面形状に認められる多様な様相は、木の大きさ、木の根の張り具合、倒れた時の角度、表土層の状況、埋積の過程、地山層と礫層の堆積状況、遺存状況の違いなど、倒れた木をとりまく様々な要素の差異を反映したものと解釈可能である。したがって、異なった形状を呈する倒木の痕跡に対して、それぞれ個別の成立過程を検討する必要はない。

ここでは、倒木痕跡を二次堆積土の違いから、大きく2種類に分類することを考える。

水成堆積土が二次堆積土になっている可能性が考えられる、茶褐色粘質土のものをa類、粘性がまったく無いバサバサの茶褐色土ないし黒色土(腐食土)のものをb類に分類することにする。

b類の黒色土は自然科学分析の結果、ネザサ類の植物珪酸体が多く遺存していることが確認されている。その密度は極めて高いもので、あたり一面この植物が密集した状態で存在し

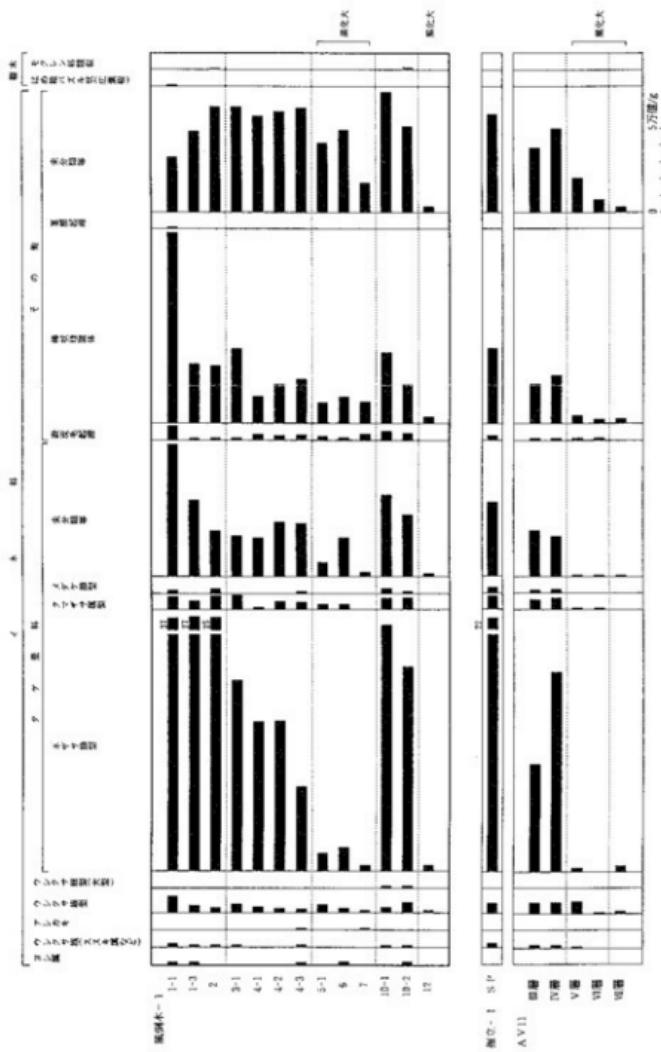


図123 植物珪酸体分析結果

ていた状況が想定されている。倒木-1の分析結果によると、当時の地表面である灰褐色粘質土中の密度は、二次的に堆積した黒色土に比べてかなり低い値を示す。このことは、木の倒壊によって周囲の植生に大幅な変化が生じ、ネザサ類をより多く含む表土層が形成されたことを示すものと考えられる。

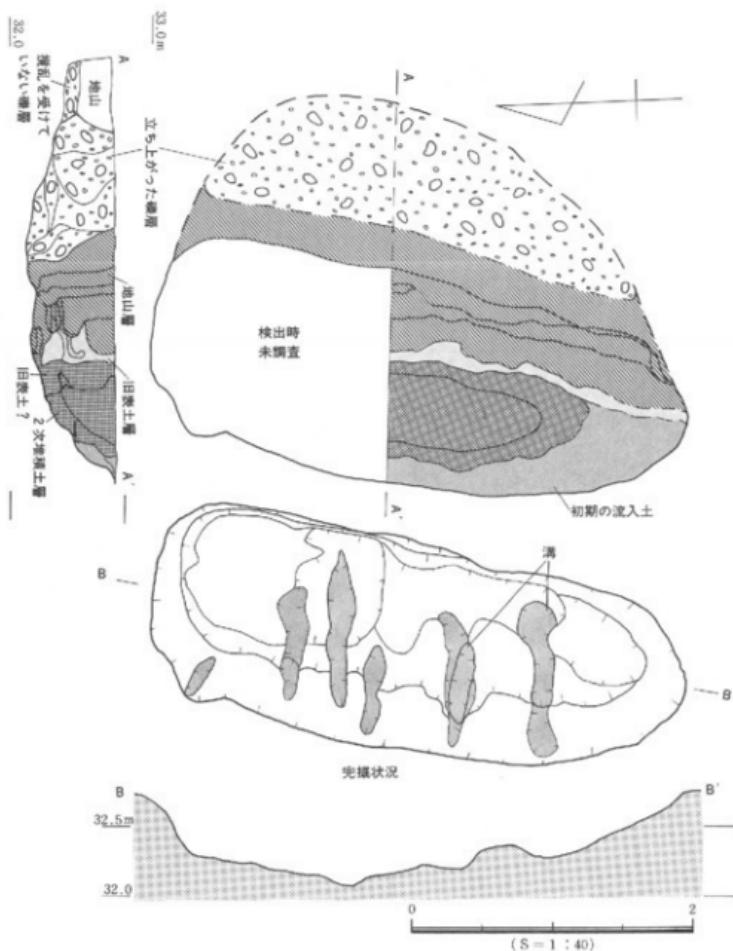


図124 倒木-3

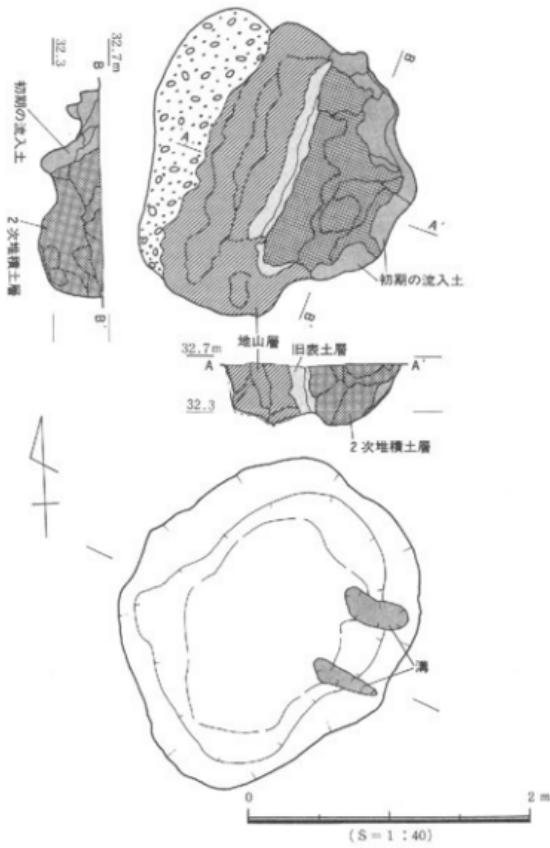


図125 倒木-8

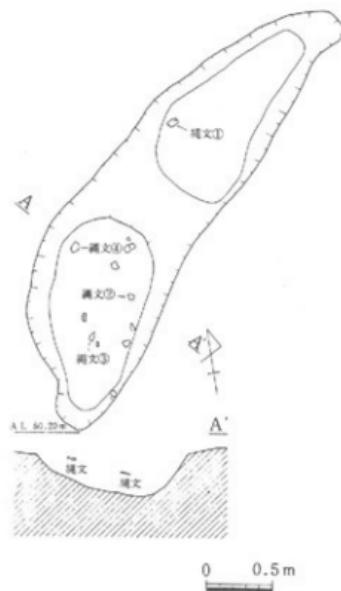
一方、a類の二次堆積土は地山層の土質と近似しており、分析の結果からもこれを裏付けるデータが得られている。ネザサ類の値はb類の旧表土層の値よりもさらに低く、検出された植物珪酸体の依存状況も風化が激しく、悪いものであった。このことは、a類がb類に比べてかなり古い時期のものである可能性を示唆している。a類、b類とともに、当遺跡内において近接して混在する状況が認められることから、同時期に同一条件のもとで形成された可能性は低いものと考えられる。

以上の状況から、ネザサ類の密度が低い時期に形成されたa類から、時を経て密度が高い状態で新たに形成されたb類への変遷を想定できる。堆積土の土質の違いは、その倒木の痕跡が形成された時期差を反映しているのである。ただし、言うまでもなく、この分類は当遺跡においてのみ適用されるものである。

(4) 形成時期の推定

当遺跡の倒木からは、まったく遺物が検出されていないので、その所属時期については不明である。しかしながら、関東地方においては縄文土器を伴う例が多く認められているようで、縄文創始期、早期から後期段階に至る時期の土器片が少量出土する事例が多く知られている。松山平野においては、高繩山系に隣接する台地もしくは微高地上において、無数に存在しているが、北久米淨蓮寺遺跡の東方に位置する久米塙田V遺跡（図1）周辺において、遺物が絡む事例が認められるので、若干検討しておく（図126）。

その形状は、明らかに倒木の二次堆積部分の特徴を示している。「第10号土壤状遺構」と命名されているこの「土壤」からは、縄文時代後期中葉のものと考えられる土器が数点出土



第10号土壤状遺構図

図126 久米塙田V遺跡の倒木痕跡

しており、その検出面においては時期不明ながら、弥生土器の破片が確認されている。

この遺跡において、確実に年代が推定できる状況にある倒木は、この一例のみであるが、少なくとも、当該地域に分布する倒木の一部の年代の上限を、縄文後期段階から弥生時代に至る間に求めることが可能である。⁽⁴⁾

第二の例は、久米塙田森元遺跡（図1）において認められる。この遺跡からは、土壤一括出土のかたちで、まとまった量の後期段階の土器が出土しているが、この土壤そのものが倒木痕跡である可能性が高い。遺構の実測図は公表されていないが、調査時の諸記録を総合すると、倒木痕跡の二次堆積の最終段階において一括投棄されたか、あるいは、埋積後の二次堆積部分を選んで掘り込みを行い、土器を埋めたものであると考えられる。しかし、土器の出土範囲が、倒木の二次堆積層の部分と実にうまく重なることなどから、後者の考え方はどうぞ、倒木痕跡埋積時に投棄されたものと解釈しておきたい。この例から明らかなように、縄文遺跡の密度が高い地域においては、倒木痕跡を土器等の廃棄土壤として使用した事例が存在する可能性を考えておく必要があろう。

以上、当該地域における倒木痕跡から出土する遺物に関しては、縄文時代後期のものに限定された形で認められる。

(5) まとめ

倒木痕跡が形成される可能性は、いつの時代にも存在する。したがって、一定地域において、ある時代を境として痕跡が認められなくなる状況が確認されるならば、人為的な森林の伐採が行われ、開墾された時期の上限を示すものと評価することも可能である。仮に地域ごとにその年代に差が認められるのであれば、「人間と自然との関わり」に関して、地域差を抽出する事が可能となる。一方、一律に同一時期を示す状況が確認される場合、かなり広範囲に及ぶ気象の変化に伴って、倒木痕跡が形成されなくなる状況が生み出された可能性を考える必要があろう。その場合、人間の自然に対する働きかけの程度の強弱に関わらず、木が倒れるような甚大な自然災害が起こる頻度が、ある時期を境として急激に低下した可能性も考えられる。

いずれにしても、「自然への人間による働きかけ」、「環境変化に対する人間の適応」といった、人と自然との関わりを考えていく上で、有効な視点となる可能性があることを指摘しておきたい。

以上、倒木痕跡の形状とその形成過程を明らかにするとともに、その考古学的利用の方法等を論じてきた。倒木が検出されることが日常的な関東地方などにおいては、ここで述べられた事柄は、まったく取るに足らぬ内容であろう。しかし今後、旧石器時代の遺跡が当該地周辺において層位的に調査される可能性も考えられるので、地下の層位を乱す倒木痕跡の存在を認識しておく必要があると判断し、紙面を割いた次第である。環境復元、自然と人の関わりを検討する材料として活用していく点については、今後の課題としたい。

註

- (1)梅木謙一編 1992年「第7章 桑原西縄葉遺跡（2次）の調査」『桑原地区の遺跡』松山市文化財調査報告書26 （財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
 - (2)能登健 1974年「発掘調査と遺構の考察——いわゆる“性格不明の落ち込み”を中心として——」『信濃』第26巻第3号 信濃史学会
 - (3)坂本安光・小林一郎編 1981年「5 土壌状遺構」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書』III 愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
 - (4)西尾幸則他編 1989年「39 久米塙田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II 松山市教育委員会
 - (5)他地域の倒木痕跡出土遺物について検討しているわけではないが、註2文献および久米塙田V遺跡、久米塙田森元遺跡における状況から、绳文後期中葉を下限とする遺物の存在が鍵になるかもしれないと考えている。註2文献によれば、埼玉県坂東山遺跡の例では、堀之内1式土器が出土しているようである。また、この他にあげられている各遺跡出土土器の年代についても、概ね、この時期を下限とするようである。
- 補足：脱稿後、下記の文献に接する機会を得た。本稿では提示できなかった様々なデータが、詳細に提示されている。なお、文献の収集にあたっては、阿部芳郎氏（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）よりご援助をいただいた。
- 辻本崇夫 1985年「倒木痕の再検討」『館町遺跡I』

2 5世紀代の集落変遷について

北久米淨蓮寺遺跡3次調査地における1期から5期に至る集落の変遷について、隣接の同1次調査地の調査成果も踏まえた上でまとめておきたい。これまでに1次調査と3次調査で明らかになった範囲において、以下の変遷過程を復元している（図127・128）。

1期：SB-9（改築前）とSB-7（改築前）、1次のSB-2の3棟から構成される。1次のSB-2は非常に痕跡的な遺構であったことから、その詳細は不明であるが、SB-9などと同様に、北西壁中央付近にカマドが造られていた可能性が考えられる。各住居の平面形状は完全な正方形ではなく、長方形を呈している。SB-9がこの小集団の中心人物の住居であったと考えられる。5世紀前半段階に所属する。

2期：SB-9とSB-7は拡張される。1次のSB-2については不明である。出土遺物から、廃絶年代は5世紀半ば過ぎに求められる。最大規模のSB-9のみ、初期須恵器を保有している（第3章まとめ-4）。

3期：SB-9はSB-6に、SB-7はSB-5に、また1次のSB-2はSB-1にそれぞれ建て替えられる。建て替えられる場所は1～2期の住居の北西方向が選択されており、建え替え後の住居の規模は、前段階のものとほぼ共通している。

4期：SB-6は掘立-9、SB-5は掘立-8に、1次のSB-1はSB-4にそれぞれ建て替えられる。いずれも2間×4間であると推測される。時期は5世紀後半である。

5期：5世紀後葉になると、掘立-1～掘立-4が建てられる。これと4期の掘立柱建物が時期的に併行した可能性もある。SB-11も新たに加わるもの、ここで問題にしている集

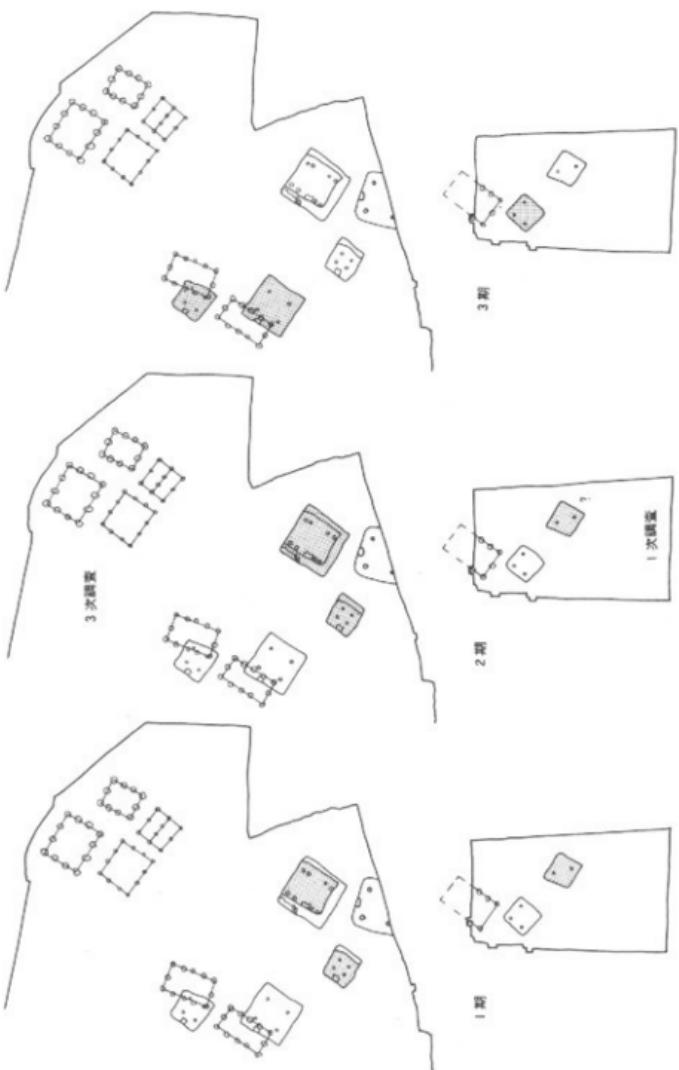


図127 5世紀代の集落の変遷(I)

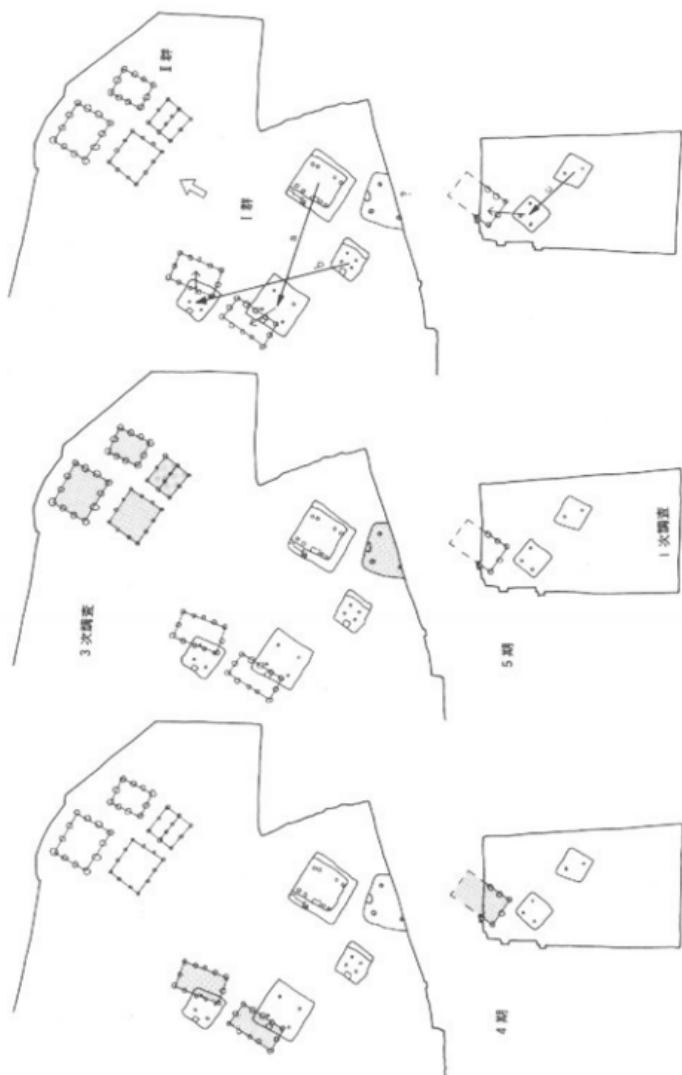


図128 5世紀代の集落の変遷(2)

落との関係は不明である。SB-11の場所には、その後6世紀末までに、最低6棟の竪穴住居が重複して建てられる。

ここで、SB-9が建て替えていく過程を示す各住居をa群、SB-7をb群、1次のSB-4を起点とする一群をc群に区分し、変遷からうかがえるこの集団の性質を検討する。その際、a～c群をまとめてI群とし、その北東に位置する4棟から成る掘立柱建物群をII群とする(図128)。

先に述べたとおり、I群内における変遷は非常にスムーズにたどることができる。その際、SB-9が集落の中心を形成しており、規模の小さな2棟がこれに付随した状況が復元できる。重要な点は、住居の規模等には差異が認められるものの、その建て替えの過程が、集団として完全に一致した方向性のもとに復元可能なことにある。この事実から、集落を構成する集団の性質が比較的均質なものであったこと、さらに、一定期間集団の性質および内部の力関係に目立った変化が生じなかったことを読みとくことができる。つまり、当該期間のこの集団が置かれた社会的環境は、比較的平穡であったことが想定できる。

I群からII群への移行に際しては、若干の断絶も予想されるが、掘立-1～3を、a～c群の系譜上でとらえ、総柱の掘立-4については、集団に帰属する倉庫としての性格を与えることができるならば、同一の視点で捉えることも可能である。断定はできないものの、I群からII群への変遷を考えておきたい。

以上、中心的建物であるSB-9に、小規模な建物が3～4棟付随する状況が確認されるが、この集落に対しては、小規模な単位集団的な性格付けを行っておきたい。

3 煙道の痕跡が確認されない造り付けカマドについて

(1) はじめに

北久米淨蓮寺遺跡3次調査地においては、5世紀中葉の竪穴住居4棟(A群)、5世紀末から7世紀初頭の竪穴住居4棟(B群)について、造り付けのカマドを確認した。その詳細については、本文中において報告した通りであるが、これらのカマドに共通した事項として、煙道の痕跡が全く確認されなかったことがあげられる。これは、後世の削平を受けたことによって、完全に削り去られたものと理解することも可能である。しかし、A群とほぼ同時期の樽味遺跡3次調査(図129・130)においても、深さが40cm近くにも達する、当地としては遺存状況が良い住居においてすら煙道は確認されなかった。この事実は、当該期の住居及びカマドの構造と密接な関わりがあるものと考えられるので、若干の検討を試みる。

(4) 「煙突」の想定

カマドが住居の壁の内側に位置する以上、何らかの形で煙を外に排出する必要がある。ところが、いわゆる煙道と呼ばれる構造が認められない以上、これに替わる何らかの施設が存在した可能性も検討可能である。可能性は低いが、全くこの種の構造を持たず、屋根越しに煙が自然に出ていく方法を探るケースも想定できる。この場合、遺構から得られた情報にはうまく当てはまるものの、「煙出し」が有ってこそ排煙機能を持つカマドとしての意義が高まることを考えれば、解釈としてはあまり適当ではなかろう。あくまで煙出しが存在したとすれば、それはカマドの直上に取り付く「煙突」状の構造であった可能性が考えられる。この場合、住居の壁の外側に痕跡が認められなくともかまわない。SB-9の改築後のカマドの背後には壁溝が存在するが、燃焼部と壁溝の間に、壁溝と一体化した黒褐色土を埋土とする舌状の窪みが検出されている。場合によると、この部分が煙突の下部に当たるのかもしれない。樽味3次の「SC-04」においては、カマドの背後の住居の壁が、若干窪んでいる事実が確認されている。これは、「煙突」の存在と関わりのある構造である可能性が高いものと考えられる。

また、浄蓮寺3次、樽味3次とともに、カマドが住居の壁の中央からはずれた場所に位置する事実は、垂木など住居の上部構造の配置関係によって、「煙突」を設定できる位置が制限を受けたことに由来するのかもしれない。

遺構から明確に実証されない以上、推測の域を出ないが、ひとまず「煙突」の存在を仮定したうえで、その可能性を別の視点から検討してみよう。

(3) 小鍛冶の熱源としてのカマドの利用

数mにも及ぶ長大な煙道ではなくて、垂直方向に煙を排出できる「煙突」を採用することによって、効率良く排煙を行うことが可能となる。その結果、燃焼部の温度をより高くすることが容易になると考えられる。そこで考えられるのが、より温度が高い熱源としてのカマドの利用である。

当遺跡では、A群の住居から、鉄片（？）と砥石、それに金床石である可能性が考えられるものが出土している（SB-9）。また、B群のカマド付き住居においては、小型鉄斧、鉄鎌、小型石突、少量の鉄滓、砥石が出土している。A群では2種類の砥石が認められる。ひとつは、刃物を研いで仕上げるための面をもつタイプである。もう一つは、断面三角形状の細い溝が幾筋も刻み込まれたタイプのものである。これは、刃物に刃を付ける際に最初の段階において用いる砥石で、大まかに刃の形を整えるためのものと考えられる。この砥石の存在から、これらの住居内において、ただ完成品としての刃物の刃を研ぐ行為だけではなく、製作過程として「刃物の刃を付ける」行為が行われたことを考えることができる。

以上、砥石だけでなく、直接的に小鍛冶を連想可能な金床石（？）の存在などから、これらの住居内において何らかの鉄器の製作行為を復元可能である。以上述べた住居内における

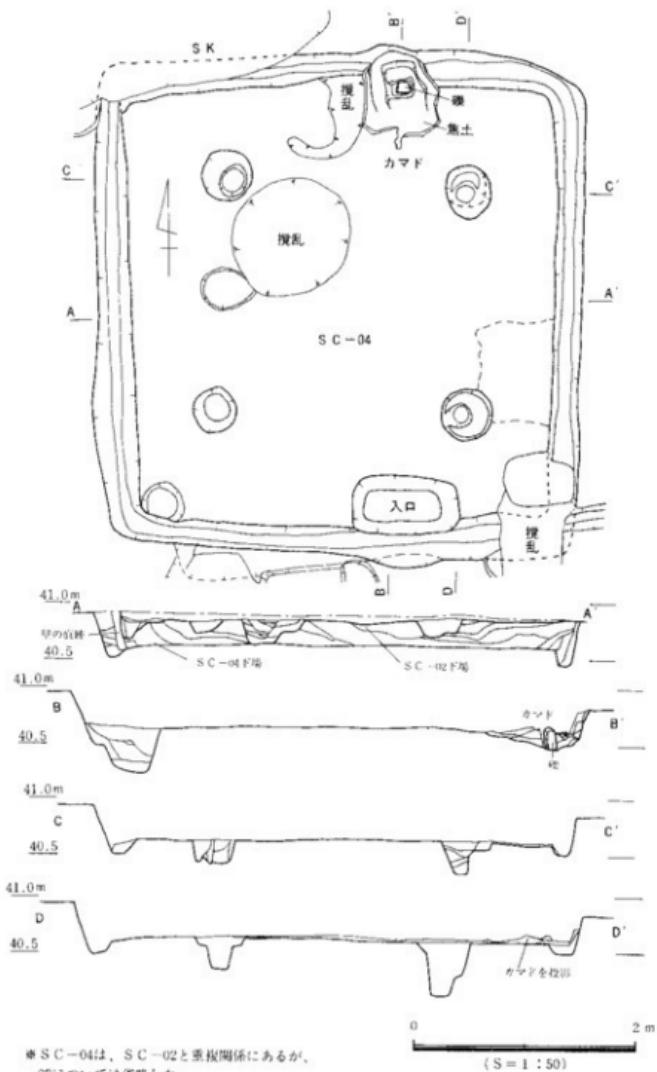
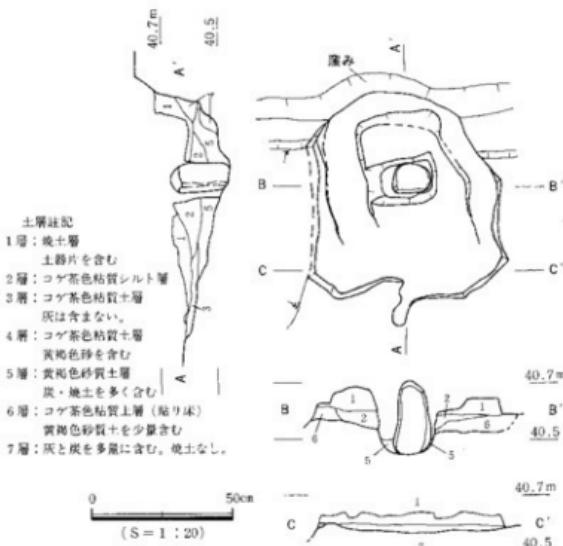


図129 樺味遺跡 3次：S C - 04
(愛媛大学埋蔵文化財調査室提供)



(愛媛大学埋蔵文化財調査室提供)

図130 樺味遺跡3次：SC-04のカマド

鉄器製作の可能性を検討する際に、熱源としてのカマドの利用を考えることはできないだろうか。その際、カマドに対して、素材をドロドロに溶かすほどの高い温度を期待する必要はない。鉄津の出土状況、その量が少ないとことなどから、製鉄そのものは住居の外で行われていたと考えるのがより自然である。したがって、外部において製作された鉄素材に若干の熱を加えることによって実施できる程度の小鍛冶を想定し、その熱源としてのカマドの位置づけが可能ではないかと考えるものである。その際カマドは、排煙機能を若干向上させる程度の改良が施されることによって、十分にその役割を果たしたのではなかろうか。

(4) おわりに

煙道を伴わないカマド付きの住居の排煙構造を推定し、より高温の熱源としてのカマドを、小鍛冶の際の熱源として利用できる可能性を論じた。現段階では、資料数の絶対的な少なさから、この考え方を明確に裏付けることは困難を伴う。しかし、先に述べたB群の住居と小型の鉄製品との密接な関係は、生活に密着した祭祀道具を住居内において保有していたことを示しているし、また、鉄津の存在はまぎれもなく鉄生産活動の証拠である。

松山平野北部の遺跡群においては、これまで、弥生時代から古墳時代にかけての多数の遺

跡の調査が行われてきたものの、明確な鉄関連の生産遺跡の確認には至っていない。このような状況は、関連遺跡が大規模に展開している畿内や吉備地域と比較すると、政治的、経済的にその規模が小さい社会であったことを示すものと評価できる。しかし当地にも、明確に鉄器が存在し使用されている以上、何らかの生産活動が行われたことは確実である。中心地域のように、コンビナート的な体系化されたシステムの存在は想定不可能ではあるが、辺縁地域においても、一定範囲の生産活動が行われていたはずである。素材の供給は他地域に依存するものの、一定範囲の加工及び製品の補修活動は、在地でなされた可能性が高く、その場合、住居内で行われる程度の簡単な小鍛冶を想定することが適当であると考える。

このように考えると、全く生産遺跡の痕跡が認められない現状は、いかにも不自然である。ひょっとすると、我々の目に容易に触れる極めてありふれた状況の中に、その謎を解くヒントが隠されているのかもしれない。カマドの存在やその構造は、今後、何らかの参考に成るかもしれない。「煙突」説の真偽は、また別の問題ではあるが……。

註

(1)愛媛大学の樽味キャンパス（農学部）内に位置する遺跡である。愛媛大学埋蔵文化財調査室（下條信行室長）によって、1993年8月23日～10月6日まで発掘調査がおこなわれ、5世紀後半期の堅穴住居などが確認された（担当：田嶋博之助教授）。調査を実施した面積は259m²であった。1994年6月現在、調査室にて整理作業が行われている。このたび、調査室のご厚意により、実測図をはじめとする記録を使用させていただいた。なお、造構の実測図に関して、一部省略した部分がある。

(2)松井和幸氏よりご教示をいただいた。

4 5世紀中葉の豊穴住居廃絶時の祭祀について

(1) SB-9の例

5世紀中葉に建て替えられて、規模を拡大しているSB-9(図131)において、住居の廃絶時に行われたと考えられる祭祀行為の痕跡が確認された。具体的には、遺物の特徴的な出土状況から、その祭祀の形態を知ることができる。

祭祀は、大きく分けて2種類認められる。第1点はカマドの廃絶に絡む祭祀、第2点は住居の上部構造の撤去に絡むものである。前者は、カマドのすぐ横に位置する「台状構造」上に甌を設置していること、後者は柱の抜き取り穴に、土師器の高杯が埋納されていたことから、何らかの祭祀行為を想定できる。

ここでは、カマド祭祀に着目する。

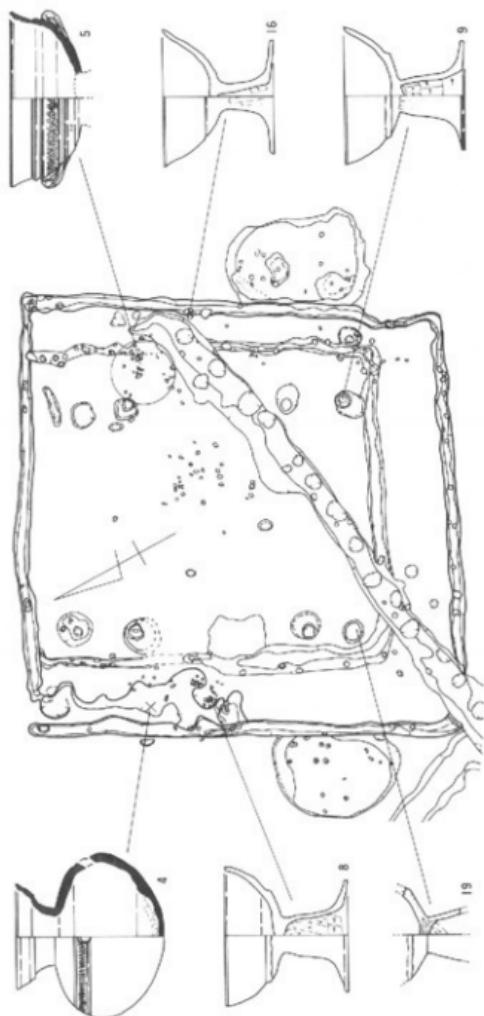
(2) カマド祭祀

カマド祭祀については、これまでに様々な検討が行われている。特に、燃焼部に伏せた状態で設置されている土師器の高杯等に関して、カマド廃絶時の祭祀に絡むものとの評価が下される場合もある。SB-9に関してもこれと全く同様の状況が認められたが、同時期の他のカマドについては確認されなかった。他のカマドにおいては、支えとして用いられたと考えられる礎が残されていたのみであった。この事実から、SB-9のカマドの中の高杯に関しては、報告の中で「支脚」であるとの結論を述べるに至っている。

ここで特に検討したいのは、カマドの横に設置されていた甌の役割についてである。報告中で説明した通り、この甌は住居の廃絶時にカマドのすぐ横の台の上に、置き土を施した上で設置されていた。住居が撤去され、大半の物が持ち出されているであろうことを考えると、この甌の存在は極めて特異である。甌は、住居の床面上から出土した高杯とともに、TK216もしくはON46にあたるものと推測される。当該期の初期須恵器を焼いている窯の存在はおろか、個別の出土例も極めて希な時期にこれだけの優品を保有し、しかも、住居の廃絶時に持ち出すことなくカマドの側に置いてあった状況は、この甌とカマドが極めて密接な関係にあった事実を示していると評価できよう。

(3) 甌出土事例

松山市の「辻町遺跡2次調査地」において、SB-2の床面上から、甌が1点出土している。その形状は、「淨蓮寺3次」出土のものと比較するとやや新しい段階のものと考えられ、其伴の土師器高杯の形態については、ほぼ同時期ないしやや後出する段階のものと評価できるものである(図132)。これらの資料は、淨蓮寺3次のSB-6ないしSK-1~3に併行するもので、甌が出土しているSB-9よりも確実に後出する時期にあたるものと考えられる。図132に出土遺物の内、主なものを示す。この住居から出土した須恵器は、この甌1点のみであった。隣接のSB-1についても、形状はSB-2と類似し、カマドの状況も共通しているが、こちらには須恵器は全く残されていなかった。



遺物 : 1/6

遺物 : 1/100

図131 SB-9 廃絶時の共伴遺物

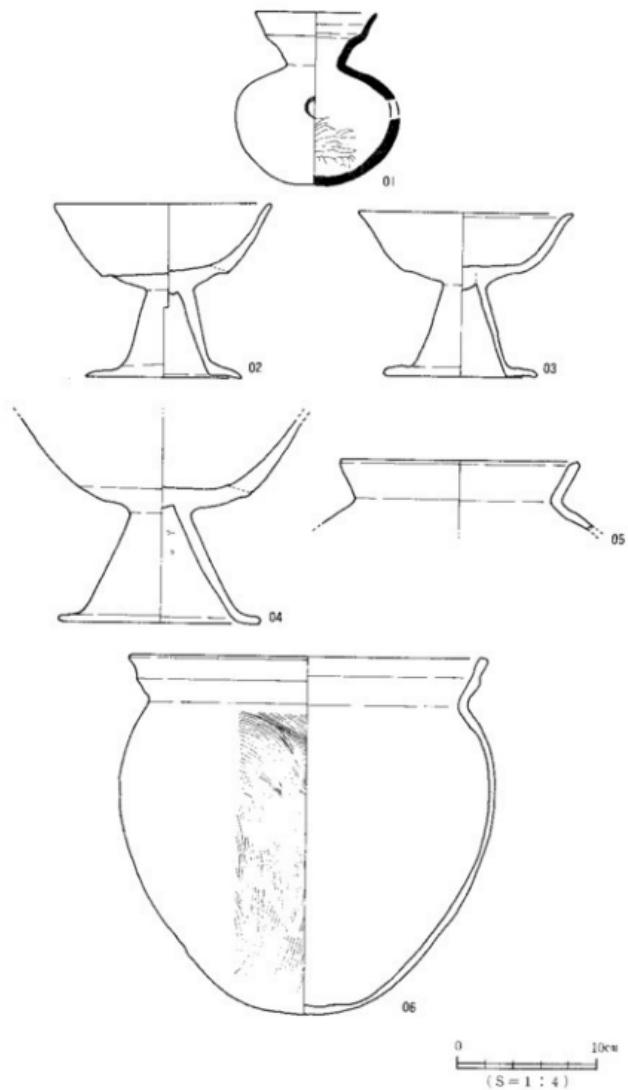


図132 汁町遺跡 2次調査地 S B - 2 出土遺物

以上、淨蓮寺3次のSB-9と比較して、住居の規模が小さい辻町2次のSB-2においても、竈のみが住居内に置かれたままであった状況が確認できる。さらにこの住居は、平面形状及び構造を伴わないカマドの構造等、淨蓮寺3次のSB-9と多くの点において共通性が認められる。これらの状況を総合すると、5世紀中葉から後半期にかけてのカマド付き住居内に初期須恵器の竈が何らかの意図のもとに置かれている様子が復元できるが、その意図には、淨蓮寺3次のSB-9にみられるように、カマド祭祀としての意味あいを読みとるのが妥当ではなかろうか。

ところで、SB-9と並存しているSB-7は須恵器を保有しておらず、したがって、カマド祭祀の痕跡は認められていないが、これは、この種の祭祀が集落の中心人物(SB-9)の手によって、代表して執り行われたことに起因するのではないか。住居の廃絶によるカマドの廃棄に際して、初期須恵器の竈を集団を代表して保有する立場にあった人物によって、一定の様式のもとに体系化された祭祀が執り行われた可能性を想定したい。よって、辻町2次と淨蓮寺3次の集落は、共通の祭祀形態を保持するかなり似かよった性格の集団によって構成されていたと考える。

(4) 朝鮮半島からの移住者たち

それでは辻町2次や淨蓮寺3次の集落に住んでいた人々は、当時の社会の中にあって、いかなる立場に置かれていたのであろうか。

該当の集落の廃絶年代は概ね5世紀の中葉前後と推定されるが、少なくとも淨蓮寺3次に関しては、増築以前のカマド付き住居が存在することから、集落のスタート段階は5世紀前半にまで遡ることが予想される。この段階において、「カマド」という外來の新しい要素を伴って、しかも須恵器を祭祀に用いている状況から、最初の住人は、朝鮮半島からの移住者たちであった可能性を考えることはできないだろうか。

このようにわずかな状況証拠だけでは、話が飛躍し過ぎていると言う批判を受けかねないが、5世紀の前半期という時代の特質を考え合わせると、この解釈はむしろ自然なことのように考えられる。日本における初期須恵器の生産が、4世紀終末ないし5世紀初頭には既に開始されている事実が、大阪府の大庭寺遺跡をはじめとするいくつかの遺跡の調査の結果明らかになりつつある。一方、地方においても、定着こそしないものの、須恵器生産に携わった人々の生活の痕跡が確認されてきている。このように、5世紀の前半期には朝鮮半島から須恵器やカマドなど新しい技術を携えた人々が日本に移住してきているのである。よって、ともに外來の新技術を背景とする初期須恵器の竈とカマドは、互いに密接な関係にあったものと予想される。このような時代背景のもとに、竈をカマド祭祀に用いるこれらの人々を、半島からの移住者であると考える。

(5) 集団の性格

「淨蓮寺3次」の集落の変遷過程で認められるとおり、その集団の規模は小さい。SB-9にSB-7が付随する状況は、次の段階に至っても、SB-6とSB-5という形で踏襲されている（図127）。辻町2次においては、最低3棟の堅穴住居が確認されていることから、この状況とさほど差異は無からうと考えられる。

この程度の規模であれば、両集団ともに一つの家族集団的な性格付けを行うことが妥当ではないだろうか。少なくとも、須恵器を保有できる優位に立つグループと保有できない下位の集団から構成される共同体、という図式は描きにくいように思える。中心的立場にある人間と、それに従う人間たちの存在、という関係は読み取れるものの、集団としては比較的均質なものであったと考えられる。SB-9の主は、小家族の家長的立場にあったのではなかろうか。その場合の家族とは、近親者のみで構成される小規模なものと評価できる。今回の調査によって、集落を構成する「単位集団」を確認したものと捉えておきたい。したがって、規模の大きなSB-9について「豪族居館」的性格を与えることは行わない。

(6) 集団の定着と解体

淨蓮寺3次におけるもっとも古い遺構は、1期に属する改築前のSB-9とSB-7である。これに先行する段階の遺構と遺物は皆無に近い状況である。近隣には「福音小学校構内遺跡」など、弥生時代以降の拠点的集落が存在しているが、淨蓮寺の微高地に初めて「入植」したのは、SB-9に代表される人々であった。このように、移住者たちは当時の中心地から、やや距離を置いた場所において定着していく過程を読みとることができる。

その後のSB-9を中心とする集団の発展過程は「まとめ-2」で説明したとおりである。最終的に、4期から5期に至って、掘立柱建物に置き替わっていくが、この集落が5世紀後葉のSB-11以降に離続していくものかどうかは不明である。SB-11の方向性やカマドの位置の変更等の事実は、この集団の性質に変化がもたらされたことを示すものと受け取ることもできる。あるいは、別の集団の転入に伴って、彼らは他の地域に転出したのかもしれない。また、これに先立つ3期のSB-6と5の廃絶にともなって、2期に行われたような祭祀が実施された形跡は確認されていない。このことから、鬼を用いたカマド祭祀に表現されたこの集団のアイデンティティーの崩壊・喪失が、徐々に進行していたものと考えられる。このような経過を経て、移住者たちの集団は在来の諸集団の中に完全に埋没していく。

(7) おわりに

以上、5世紀中葉のカマドに伴う祭祀の存在から、5世紀前半期に朝鮮半島から移住してきた人々の存在を想定した。その特徴的な祭祀形態に着目することによって、かれらの集団の性質を検討し、当時の在来集団とどのような関わりのものとに集団が形成されていたかを検討した。ここで行ってきた議論は、ごく小数の初期須恵器の存在を基本としているが、今次の調査によって、同時期の住居であっても、須恵器の所有の事実を確認し得ないケースが多



図133 北久米淨蓮寺遺跡全測図

く認められる事実を確認している。今後、須恵器等の遺物によって裏付けができるない小規模な住居の場合でも、以上述べてきたような解釈が可能なケースが含まれていることを、考えておく必要があろう。

註

- (1)栗田正芳編 1994年「辻町遺跡 2次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』VI 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- (2)栗田茂敏編 1991年「福音小学校構内遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』II 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- (3)註1 文獻 3次調査地の南西、1次調査地の西、2次調査地の南側隣接地（付図）において、4次調査（図133）が行われた結果、SB-9などと同時期であると推定される堅穴住居1棟が確認されている。この結果、当集落の規模が予想よりも若干拡大することが明らかとなった。住居の規模はSB-7とSB-6の中間クラスで、カマドは擅私のために失われていた。土師器が少量出土しているのみで、須恵器は伴っていない。調査は、財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターによって、平成5年11月24日から6年3月19日まで行われ、同年6月現在、整理作業が進められている。

5 5世紀中葉の土師器の高杯について

SB-9の出土遺物について述べた際に、当該期の土師器の高杯の分類を行った。ここでは、その説明を繰り返すことはしないが、住居における祭祀行為との絡みから若干の考察を行う。

注目したい点は、住居内における1類の扱われ方である。SB-9のカマド内に伏せて置かれていた8と、柱の抜き取り穴に埋納されていた9、SB-5内に位置するSK-27出土の54については、その形状が極めて近似していることから、同一工人の手によるものである可能性を指摘した。8に関しては支脚であるとの結論に至ったが、9および54は祭祀に用いられたものと判断している。同時期には、少なくとも2類と3類に加えて4類も共存した可能性があるにも関わらず、前述の行為に際して、あえて1類が選択されている状況を読みとることができる。精製された粘土で作られ、丁寧な調整が施された1類の扱いは、小型の2類や粗雑な作りの3類などとは区別されていたようである。ただし、このことは、1類が少數の特殊な器であることを意味するものではない。むしろ、各遺構出土の高杯の過半数の物がこの1類によって占められており、3類の割合は2割以下でしかない。このことから、1類が祭祀など特殊な目的の為だけに作られたものではないことがわかる。むしろ、1類の高杯はこの集団にとって一般的なものであるが、これ以外の形態の高杯を重要な行為の際に用いることを避けたものと考えられる。よって1類の高杯と、初期須恵器を祭祀に用いるこの集団は、密接な関係にあるものと推定される。

近隣の遺跡において、当遺跡の1類のように杯部が楕状の形態をとるタイプの高杯は明確に確認できないので、当遺跡の集落にのみ存在する形態である可能性もある。したがって、他の遺跡との直接の比較は行えないが、今後注意しておく必要がある。

6 古墳時代後期の集落から出土する小型鉄器について

当遺跡の6世紀後半から7世紀前半期における集落から、小型の鉄器がいくつか出土している。各住居からの出土点数は、1ないし2点と少數であるが、この中に明らかに実用品とは考えにくい小型のものが含まれており、当該期の住居内における何らかの祭祀行為が想定される。さらに、「3 煙道の痕跡が確認されないカマド付き住居について」で述べたとおり、これらの鉄器類が住居内のカマドを熱源として加工されていたことも考えられる。³³

107に関しては、手斧として使用可能な限界の大きさであるが、柄を装着された形跡は確認できない。130については、儀礼に用いる目的で作られたミニチュアであると考えられる。これは、掘立-10の柱の抜き取り跡と想定される部分から出土したことから、建物の廃絶に伴う祭祀に用いられた可能性も存在する。108は107と同様の地点から出土している。これに関しては、儀礼用と断定することはできないが、一般的な鉄鎌と比較するとやや小振りである。129は石突としては、かなり小型の部類に含まれる。130を除いて、他の小型鉄器はいずれもカマド付き住居内から出土している。

この種の小型鉄器といえば、一般的には5世紀代の古墳の副葬品としての存在などを連想するが、ここで述べたものについては、いずれも6世紀以降の段階、場合によっては、7世紀前葉にまで時期が下ることは疑う余地はない。しかも、実用品として使用された可能性が少ない小型のものが含まれることと、その一部の出土状況から、当該期にミニチュアを用いた祭祀が執り行われた可能性を想定したい。

前述の可能性を想定する場合、集落遺跡出土の小型鉄器の類例の存在の有無を確認することが不可欠ではあるが、これまでのところ明らかでない。ただし、その例は多くないものの、一部の古墳の副葬品の中に小型鉄器の例を認めることが可能である。奈良県北葛城郡新庄町所在の寺口忍海古墳群・H-20号墳と、藤ノ木古墳において、ともに複数の小型鉄斧の存在が知られている。これらの例はいずれも6世紀代に属するもので、7世紀まで降るものではないが、この種の鉄製品が確実に存在していたことを示すものと言える。

今次の調査で出土したような小型鉄器は、6世紀以降、古墳に副葬する習慣が徐々に廃れていくために、藤ノ木古墳など一部の例しか知られていないものの、古墳に関係のない形で依然として使用されていたことを示すものと評価できよう。このような鉄器の使用形態は、普遍的に時代を越えて想定可能かもしれない。ただし以上述べたように、集落における祭祀の際に小型の鉄器を使用する習慣が、当該期の他の地域においても広く認められる状況に無い現状では、当遺跡当該期の集落の集團に限られた事象と理解される可能性も考えておかねばならない。

註

- (1)松井和幸氏のご教示による。
- (2)尾上元規氏のご教示による。
- (3)千賀久・吉村幾温編 1988年『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第1冊 新庄町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (4)奈良県立橿原考古学研究所編 1989年『斑鳩藤ノ木古墳第1次調査報告書』斑鳩町教育委員会

7 正方位を指向する区画施設について

(1) はじめに

今次の調査によって、当該地域においては、7世紀中葉から第3四半期にかけての時期に、正方位を指向する区画施設（溝）が出現する事実が確認された。このことは、これとほぼ同時期に出現する官衙的施設との関わりが推定されるので、若干の整理を行っておきたい。

(2) 集落の方向性の変遷

5期以前の集落については、微高地の地形を反映した方向性を示しており、方位に規制された形跡は認められていない。以下、6世紀末以降の集落について検討する。

7期の集落の方向性は、概ね真北から西に度数ないし10度程度振った方向を軸としている。次の8期に至ると、ほぼ真北を中心として西に4度～東に7度程度の範囲に、各建物の軸線が集まってくる。その後、大幅に方位が崩れる9期を経て、7世紀第3四半期にあたる10期になると、真北からやや東に振った方向を基準とする区画溝（SD-10、SD-21）が出現する。ほぼ正方位を軸とする掘立-21と掘立-24については、10期以降の段階に所属するものと解釈した。

(3) 区画施設出現の時期

今次の調査による各遺構の年代的位置づけに問題がなければ、区画溝の出現は7世紀中葉段階に求められる。また、各住居の方向性が真北を指向するようになるのは、概ね7世紀第3四半期以降と理解される。それ以前の区画施設としては、7期に位置づけている布掘の柵列SA-2が唯一といえるが、他の遺構との関係など、この遺構の性格はよく判っていない。

これまでに明らかになったデータからは、7世紀第3四半期以降において、建物を正方位を軸として建てる意識が働くとともに、区画施設を設けるようになるものと考えられる。その要因としては、隣接の官衙遺跡群の成立によって、この地にそれらの概念がもたらされた可能性を指摘しておきたい。

当遺跡の南東方向に位置する久米高畠遺跡、来住庵寺付近には、7世紀の中頃を上限とする時期に置かれる官衙関係遺構（一辺約45mの柵列で囲われた区画内に掘立柱建物多数が立地・久米評衡推定地）、方一町規模の区画溝で囲われた「回廊状遺構」などの他、いくつか

の区画地が互いに有機的に関連性をもって存在する状況が明らかになりつつある。この内、「回廊状遺構」に関しては7世紀後半、「評衡」推定地については7世紀第3四半期を上限とすることが想定されている。大切なことは、これらの遺構の所属年代には若干のずれが存在するものの、台地上に一定の基準（軸線の方位・尺度）をもって設定されたと考えられる点である。このような状況から、7世紀の中葉前後に、当地域に正方位を指向する考え方と区画施設を設ける考え方方が、官衙的施設の建設に伴って導入されたことは明らかである。諸施設の所属年代^②に関しては、今後の調査研究によって多少前後することも予想されるが、当遺跡における正方位を指向する区画施設の出現時期が、隣接の官衙遺跡群の成立と連動していく可能性は高いものと考える。

(4) おわりに

今次の調査によって確認された区画溝S D-10は、西隣の浄蓮寺2次調査地内において、いったん途切れていながらの状況が確認されている（付図）。このくいちかいで部分は、出入口に当たる施設であると考えられるものの、その区画内には該期の建物はほとんど確認されていない。したがって、官衙施設の外縁施設に伴う区画であるとの解釈は行いにくい状況にある。しかし、将来的に、官衙施設と密接な関係にある区画溝等が周辺地域に広域に展開することが確認される可能性も考えられるので注意を要する。

註

- (1)松原弘宣 1992年『熱田津と古代伊予国』創風社出版
- (2)栗田茂敏編 1991年『久米官衙遺跡群』『松山市埋蔵文化財調査年報』III 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター
- (3)松山市教育委員会編 1989年「30. 来往庵寺跡寺域調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』II

附編 自然科学分析

発掘調査に際しては、株式会社古環境研究所（埼玉県大宮市土屋1795-24、代表取締役 杉山真二）に委託して、二度にわたって土壤サンプルの植物珪酸体分析を行った。一回目は倒木に関して、二回目は各遺構について実施しているが、ここでは、二回目の分析成果を掲載する。この分析は、遺構の堆積土の性質が時期によって異なることを確認することによって、出土遺物から時期の決定に至らない遺構の、おおまかな所属年代を推定する際の参考データとすることを目的とした。

なお、倒木に関する分析結果は、第3章「1 倒木の痕跡について」の内容中に盛り込むこととした。

1. 松山市、北久米淨蓮寺遺跡3次調査における植物珪酸体分析

古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は植物により様々な形態的特徴を持っていることから、土壤中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境を復元することができる（杉山、1987）。

北久米淨蓮寺遺跡3次調査地の発掘調査では、5世紀中頃から7世紀末頃までの遺構が多数検出された。そこで、各遺構の覆土について植物珪酸体分析を行い、遺構の変遷と植生との関係について検討を行った。

2. 試料

試料は、5世紀中頃から7世紀末頃とされる住居跡や掘立柱、土坑、溝などの覆土について計12点が採取された。各試料の時期や遺構の種類、遺構名を図1の左端に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスピーツ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理

- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-8}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は6.31と1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

ヨシ属、ウシクサ族 (ススキ属やチカヤ属など)、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型 (おもにクマザサ属)、メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、未分類のタケ亜科、表皮毛起源、棒状珪酸体、未分類等

〔樹木〕

はめ絵パズル状 (広葉樹)、その他

5世紀中頃から7世紀末頃までの時期の異なる計12箇所の遺構の覆土について分析を行った。

その結果、すべての試料からネザサ節型が多量に検出された。その他の分類群では、ウシクサ族 (ススキ属など) やウシクサ族型、クマザサ属型、メダケ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

ネザサ節型の密度は、5世紀中頃とされるSB9 (No.1) では約11万個/gであるが、5世紀後半とされる掘立1 (SP4) では大幅に増加しており、密度は約22万個/gと極めて高い値になっている。同じく5世紀後半とされる掘立8 (No.18) および6世紀末～7世紀初

表1 松山市、北久米淨蓮寺遺跡3次調査の植物珪酸体分析結果

(単位: ×100個/g)

分類群	1	2	3	5	9	13	14	15	16	18	20	SP4
イネ科												
ヨシ属	7		7	7	6						7	
ウシクサ族(ススキ属など)			7	7	21	14	7	8	32	13	21	21
シバ属	19											
キビ族	6											
ウシクサ族型	56	38	20	36	64	48	48	50	84	97	21	62
タケ亞科												
ネザサ節型	1150	734	1092	1267	1595	1429	1210	2547	1740	2489	1296	2191
クマザサ属型	14	63	47	80	35	102	28	30	32	39	28	90
メダケ菊型	28	50	7	29	14	7	7	12	25	25	14	28
未分類等	280	226	335	204	240	293	173	133	682	284	444	442
その他のイネ科												
表皮毛起源	21	6	7	22	14	20	7	12	13	26	7	21
棒状珪酸体	287	168	302	430	819	401	429	163	727	472	155	435
未分類等	322	498	529	855	600	626	491	543	780	556	648	580
樹木起源												
はめ粒パズル状(広葉樹)					7		7	7	6			
植物珪酸体総数	2166	1808	2411	2745	2408	2939	2405	3514	4084	4002	2641	3870

表2 主な分類群の植物体量の推定値

(単位: kg/m²·cm)

分類群	1	2	3	5	9	13	14	15	16	18	20	SP4
イネ科												
ヨシ属	0.44		0.44	0.44	0.38					0.44		
ウシクサ族(ススキ属など)			0.09	0.09	0.26	0.17	0.09	0.07	0.40	0.16	0.26	0.26
タケ亞科												
ネザサ節	5.52	3.52	5.24	5.05	7.60	8.85	5.81	12.23	8.35	11.95	6.22	10.52
クマザサ属	0.11	0.47	0.35	0.60	0.26	0.77	0.21	0.23	0.24	0.29	0.21	0.67

※表1の値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数をかけて算出。

表1 松山市、北久米淨蓮寺遺跡3次調査の植物珪酸体分析結果

頭とされる掘立20(No15)では、ネザサ節型はさらに増加しており、密度は最大25万個/g以上にも達している。おもな分類群の植物体量の推定値(表2)によると、この時期のネザサ節の生産量は層厚1cmの堆積期間あたり10kg/m²以上にも達している。

その後、7世紀第1四半期とされる掘立19(No13)と掘立18(No.5)では、ネザサ節型は大幅に減少しており、密度は約13万~14万個/g前後とピーク時の半分近くにまで落ち込んでいる。また、これらの試料ではクマザサ属型の密度が他の試料よりもやや高い値となっている。

7世紀第2四半期から7世紀第3四半期とされる遺構の試料では、地点によって密度に差

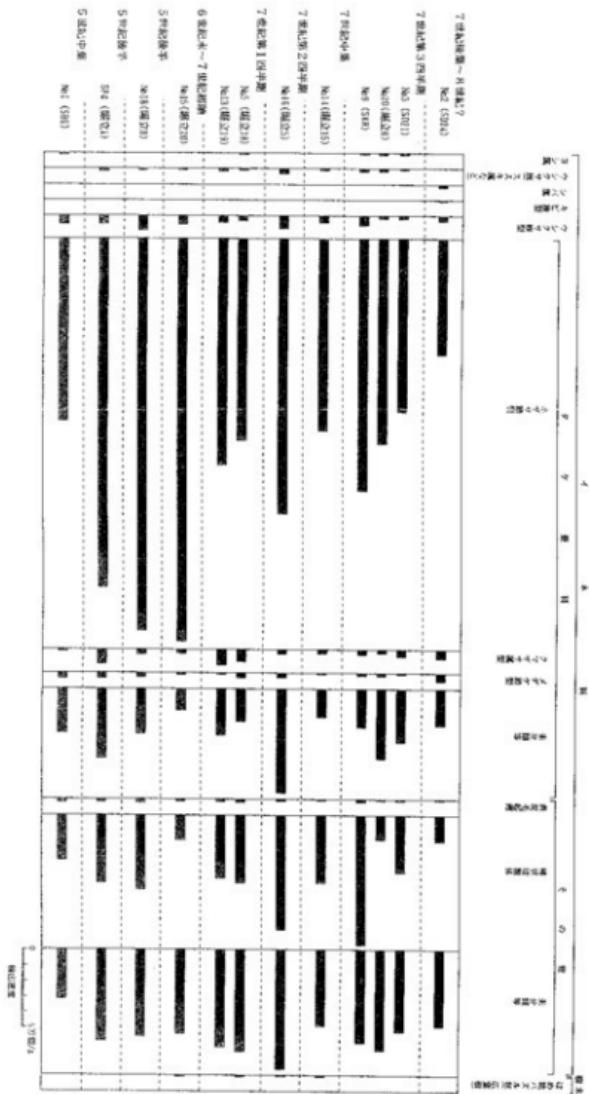


図1 北久米淨蓮寺遺跡3次調査における植物珪酸体分析結果

異が見られ、掘立5（No.16）やSK8（No.9）では16万～17万個／g前後と比較的高い値であるが、その他の試料ではおむね12万個／g前後とピーク時の半分程度の密度となっている。

7世紀後葉～8世紀？とされるSD24（No.2）では、ネザサ節型の密度は約7万個／gに減少している。

5. 考察

1) 古植生・古環境の推定

以上の結果から、北久米淨蓮寺遺跡3次調査における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

5世紀中頃から7世紀末頃までの遺跡周辺は、ネザサ節が圧倒的に卓越しススキ属やクマザサ属なども少量見られるイネ科植生が継続されていたものと考えられる。とくに5世紀中葉から7世紀初頭にかけてはネザサ節の生育が旺盛であり、土壤中に多量の有機物が供給されたものと推定される。その後、7世紀後葉～8世紀？にはなんらかの原因でネザサ節が減少したものと考えられる。

ネザサ節やススキ属は森林の林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

2) 遺構の年代推定の可能性について

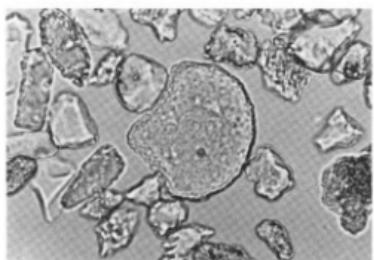
今回の調査では、遺構の時期によってネザサ節型の密度に比較的大きな差異が認められ、密度が20万個／g以上と極めて高い値になるのは、5世紀中葉から7世紀初頭とされる遺構の試料に限られることが分かった。また、7世紀後葉～8世紀？の試料では密度が7万個／g程度であるが、その他の試料ではすべて10万個／g以上となっている。

以上の結果から、おもにネザサ節型の密度からある程度の時期推定が可能と考えられる。ただし、同一時期の試料でも地点によって密度に違いが見られる場合があることから、周辺の地形や堆積環境などについても考慮する必要があろう。

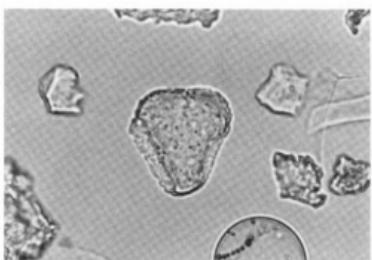
参考文献

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点、植生史研究、第2号：p.27-37
- 杉山真二（1987）タケモ科植物の機動細胞珪酸体、富士竹類植物園報告、第31号：p.70-83。
- 杉山真二・前原 豊・大工原 豊（1992）植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定、日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集、p.14-15。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体

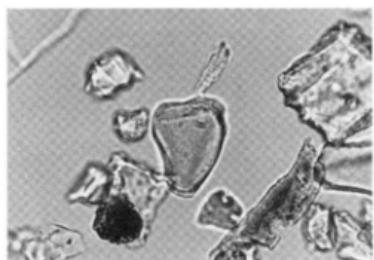
- 標本と定量分析法ー。考古学と自然科学、9:p.15-29。
- 藤原宏志(1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O.sativa L.*)生産総量の推定ー。考古学と自然科学、12:p.29-41。
- 近藤鉢三・ピアスン友子(1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)ー双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体についてー。帯広畜産大学研究報、12:p.217-229。
12:p.217-229。



1. ヨシ属



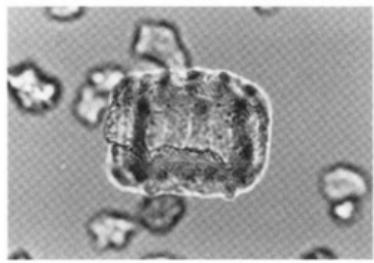
2. ウシクサ族 (ススキ属など)



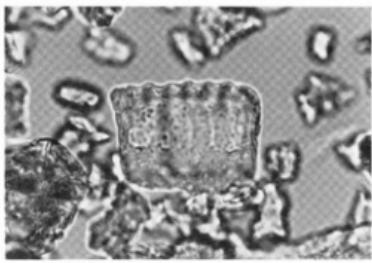
3. ウシクサ族 (ススキ属など)



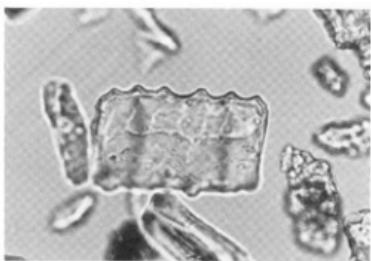
4. ネザサ節型



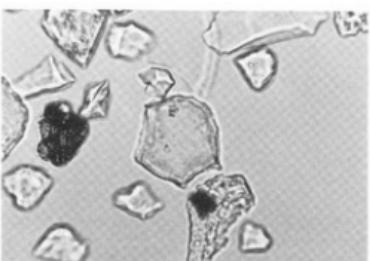
5. ネザサ節型



6. ネザサ節型



1. ネザサ節型



2. クマザサ属型



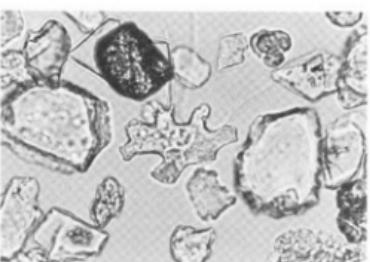
3. メダケ節型



4. 表皮毛起源



5. 棒状硅酸体



6. はめ絵パズル状（広葉樹）

写 真 図 版

写真図版例言

1 遺構の撮影は、大西・橋本が行った。

使用機材：

　　・ ウィスクフィールド45 90mmレンズ他
　　・ アサヒペンタックス67 55mmレンズ他
　　・ ニコンニューFM2 28~85mmレンズ

フィルム：

　　・ プラスXパン・ネオパンSS

2 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

　　・ カメラ トヨノビューア-45G
　　・ レンズ ジンマーS 240mm F5.6他
　　・ ストロボ コメット/C A-32 2灯・C B 2400 2灯(パンク使用)
　　・ スタンド他 トヨノ無影撮影台・ウエイトスタンド101

フィルム：

　　・ 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP 4×5

3 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った(白黒に限る)。

使用機材：

　　・ 引伸機 ラッキー450MD
　　・ ラッキー90MS
　　・ レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A
　　・ エル・ニッコール50mm F2.8N

印画紙：

　　・ イルフォードマルチグレード RCIII

4 製版 150線

印刷 オフセット印刷

用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』Vol. 1~4



1. SB-9 検出状況（北東より）



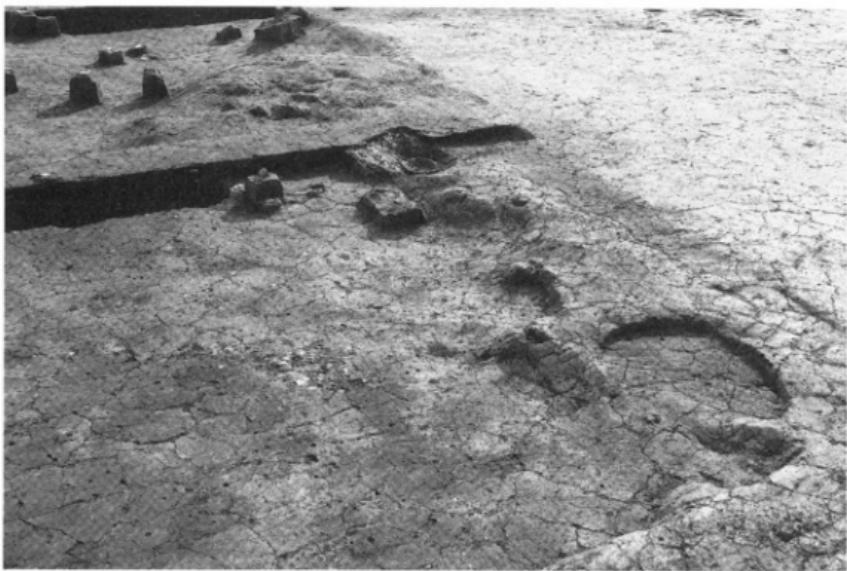
2. SB-9 遺物出土状況（南東より）



1. 高杯・金床石出土状況（東より）



2. 須恵器高杯出土状況（北東より）



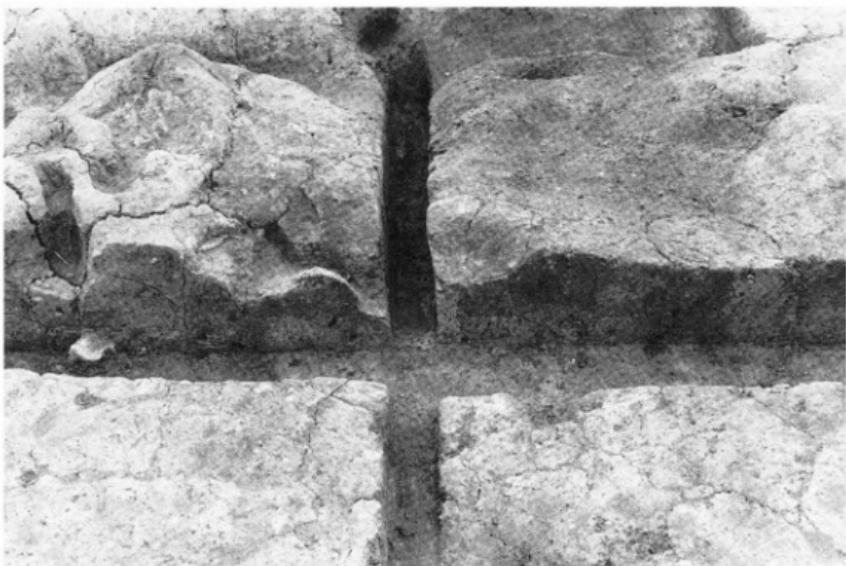
1. SB-9 カマド～台状遺構（北より）



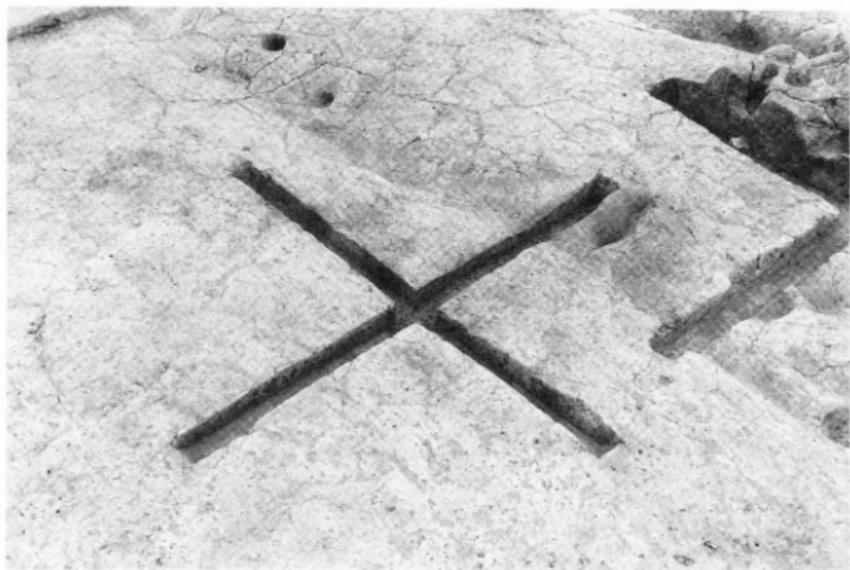
2. SB-9 カマド検出状況（南東より）



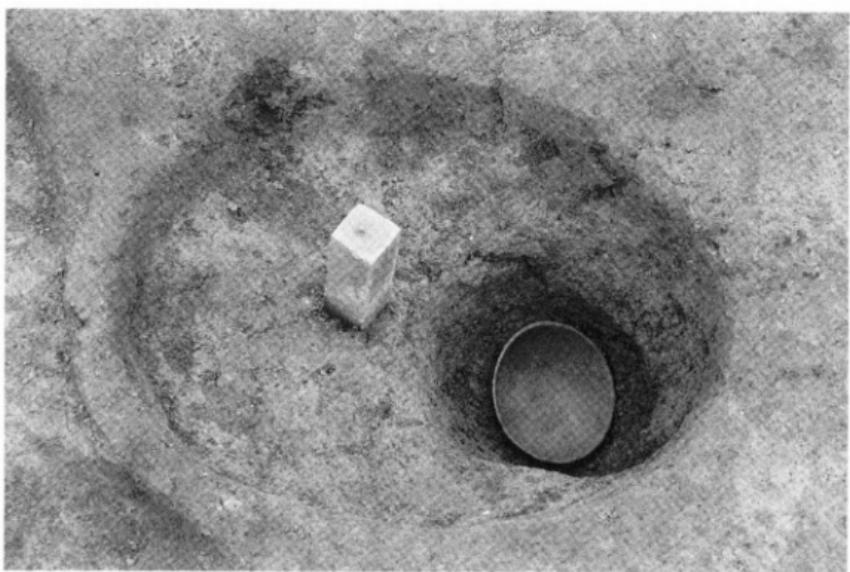
1. SB-9 カマド（北より）



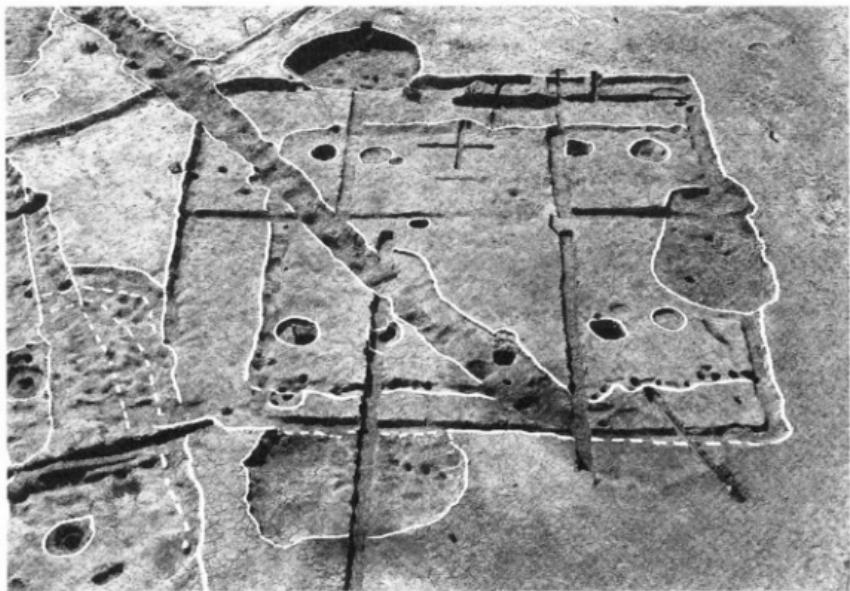
2. SB-9 カマド断面（南東より）



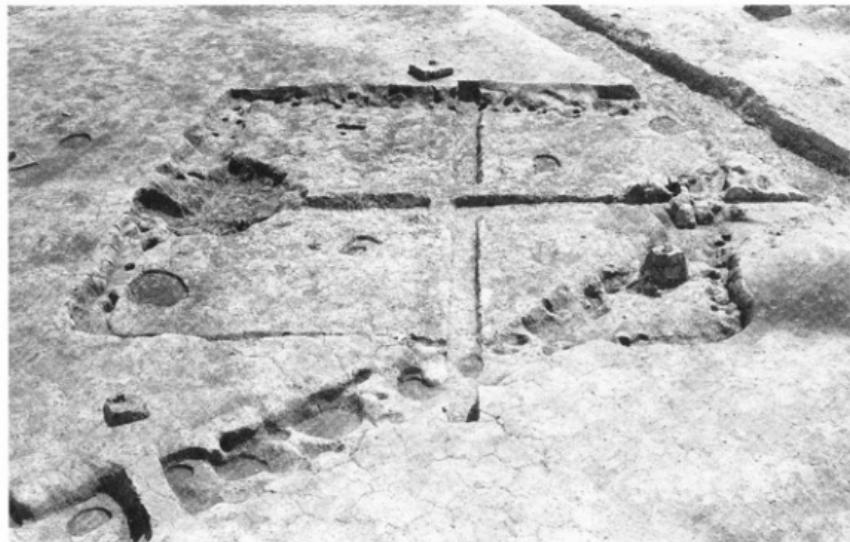
1. SB-9 拡張前のカマド痕跡（北東より）



2. SB-9 土師器高杯出土状況（南より）



1. SB-9 完掘状況（南東より）



2. SB-7 完掘状況（北東より）



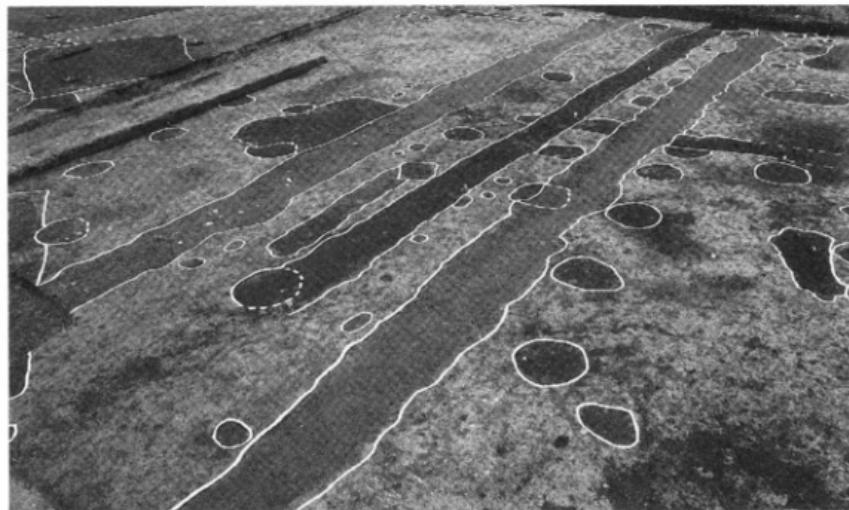
1. SB-7 遺物出土状況（北より）



2. SB-7 カマド（南東より）



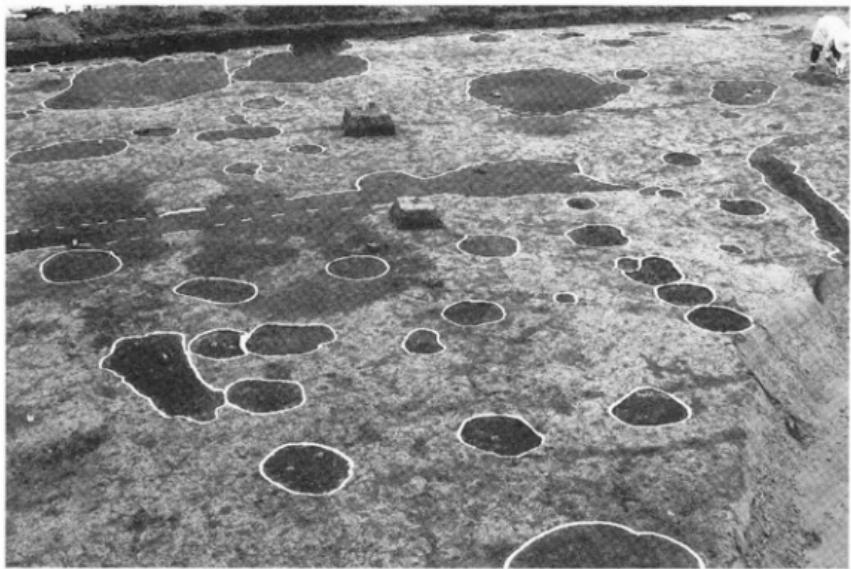
1. SB-6 付近 検出状況（西より）



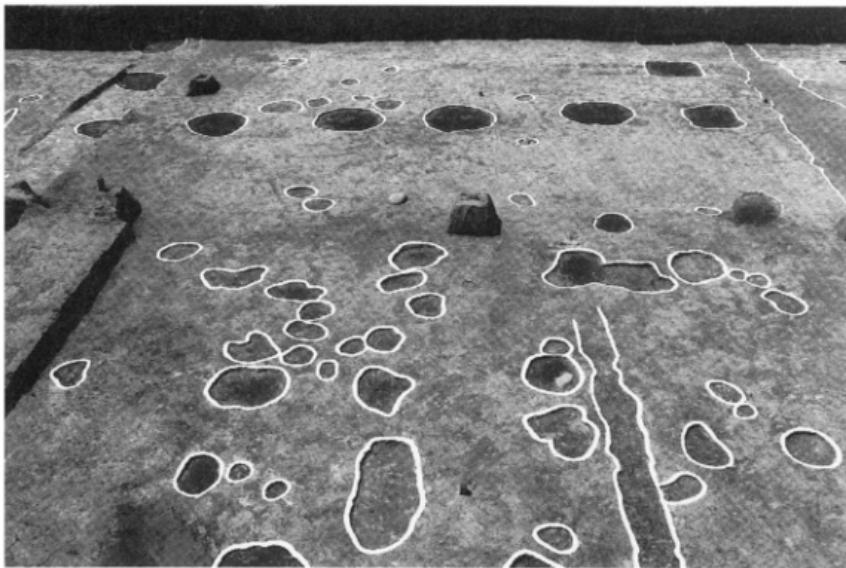
2. SD-2・SD-21・SD-24 検出状況（北西より）



1. SD-9・SD-10 検出状況（北より）



2. T-12・T-21 検出状況（北東より）



1. 堀立-5付近 検出状況（東より）



2. 堀立-6・堀立-7 検出状況（東より）



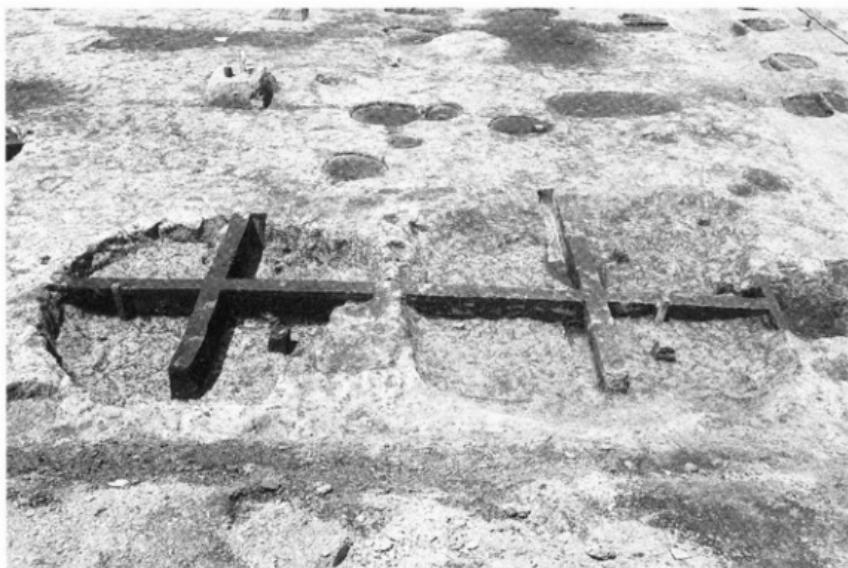
1. 堀立-6 完掘状況（北東より）



2. 堀立-7 完掘状況（北東より）



1. SD-10 遺物出土状況（東より）



2. SK-8・SK-9 完振状況（南より）



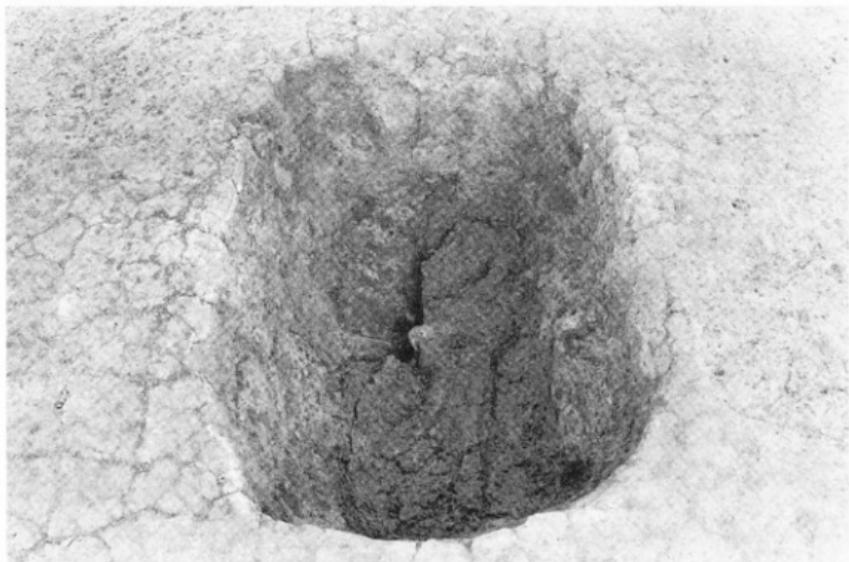
1. 堀立-20 遺物出土状況（南より）



2. SB-2 カマド（南より）



1. SK-24 遺物出土状況（南より）



2. SK-24 人骨の痕跡検出状況（南より）



1. 倒木痕跡半截状況 2区（西より）



2. 倒木痕跡断面 21区搅乱北壁（南東より）